イージー・カム

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イージー・カム

【Ｎコード】
Ｎ２２５７Ｅ

【作者名】
あゆみかん

【あらすじ】
■【シリアス／恋愛／音楽／連載中】■『Ｃａｎｄｙ』……キャンディ。お菓子。女の名前。甘ったるい、甘くする。甘美な。臆病――「もっと聴きたい……」一度芽生えた主人公・愛の想いは、加速し始める。アーティストの夢先を追って●Ｈ２３／４／３・第３０話（追憶）追加※不定期更新でかなり間が空きますが、完結までよろしくお願いします。

1話（歌）（前書き）

表現者とは。

1話（歌）

『Ｃａｎｄｙ』

キャンディ。お菓子。女の名前。甘ったるい。甘くする。甘美な。臆病。

『Ｐａｒｔｙ』

パーティー。仮面舞踏会。社交場。上っ面。表面。人生。

単語ひとつに複数の意味。込めた思いは、込めた本人のみぞ知る。

日本で言えば、掛詞。

これを技巧に繋げる者を、我は……称賛す。

……

Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ　……

歌が聞こえた――あの人の歌が。

あの人が作った、あの人が書いた、あの人が奏でた、あの人が歌った、

あの人が作った、歌が。

それは愁いを帯び、物悲しく私の心に自然のように入ってくる。

あなたにもそんな経験がなかっただろうか、と。問いかけてみた

くなった――

……

「ちわーす。お届け物でーす」

マンションの一室……せっかくの音楽空間を台なしにさせる、雑音のような声が遠くでした。「まったくもうう！」

気分を害された愛（あい）は、手に持っていた四角く白い無地のクッションを2人掛けのソファに叩きつける。そして普段着のまま玄関へと乱暴に小走りしていった。

荷物を渡した、何も知らない宅急便屋の若い陽気な男は汗をかきながら、「まいど～」と、営業スマイルで業務に戻って行った。

バタン。

玄関の重みのある鉄のドアは、勝手に閉まる。ガチャリと金属音をさせて内鍵を閉めため息をつきながら愛は、手に持った厚みのある簡易梱包された封筒をじろじろと見ていた。

送り主である会社名を見て、ふ・ふ・ふと。笑いをひとつ零している。

愛は知っていた。中身が何なのかを――

ＣＤ。

音楽の、ＣＤだった。愛が今、好きで好きで堪らない、バンドの。『ＳＡＫＵＲＡ』という、インディーズだが、地元人気は非常に高いバンドだった。

ボーカル、キーボード、ベースギターにドラムと。４人グループとして成っている。洋楽スタイルを好み、歌詞には英語が多く、ロックかジャズ色で演奏することが頻繁だった。質としては若さゆえに荒っぽく粗削りな部分が見えるも、１００人ほどが入ることのできるライブハウスでは、毎度毎度の満員で非常に盛り上がっていた

という。

特徴的なのはボーカルの声質、歌唱力と抜群のセンスだった。パフォーマンスなどは決して派手ではないが、愁いと、皮肉を織り混ぜたような歌声はどんな遠くにいるお客の心にでも入り込み響き打たせてじわじわと、そしてゆっくりと徐々に浸透させていっていた。

重量感があり、それでいて透明で繊細な声質。

音楽に通じる者の一部の間では、彼のことを神だと崇める者がいるらしい。彼のカリスマ性は着実にその広がりを見せていて、恐らくメジャーからの声がかかるのも時間の問題だろうと思われていた。

「はあー、やっと届いた……ネット注文って初めてだったから、ほんとに注文できてるんだかどうだか。分かんなかったのよねえ～っと……」

ひとり言を言いながら、愛は簡易包装されている包みを破いていった。開けながらソファにどっかりと腰を下ろし体を埋めさせていった。

封筒の中から出てきたＣＤを裏表とひっくり返して、何故か匂いを嗅いでみたりする。そしてソファに寝転がりながら、

「私は、どうして彼の事が好きなんだろう」

と、誰もいないというのに聞いてみたりもした。

神経は大丈夫だと自覚はある愛だったが、少し周りからは変わった子と言われることも昔から度々にあった……それは大学生になった今でさえもと窺える。

バンドとの出会いは友達の影響によった。音楽好きの友達から、複数のインディーズ系アーティストやバンドの曲を集めたコンピレーション・アルバムを一枚借りた愛は、全曲何回も部屋に流し続けていた所、そのなかでどうしても忘れられなく。流し終わった後でも耳に常に残ってしまうある歌があったのだった……。

『Ｃａｎｄｙ』

……それは、お菓子の名前。甘美な、という形容動詞。臆病、という意味として使われることもあるという。

「素敵……」

何度も繰り返して聴いているうち、その世界観という揺りかごに、まさに虜になっている自分を見つけた……それはもう、ご飯も喉を通さないほどで、眠気も起きないほどだった。

そんな渦中のなかで愛がまず思ったのは、歌う彼が何者なのかということ――。

「“ＲＥＮ”……レン」

ＣＤのジャケットに書かれた参加アーティストの一覧の中に名前を見つける。ＳＡＫＵＲＡというバンドの名前のボーカル担当は、レンと書いてあった。

（もっと聴きたい……）

そうやって一度芽生えた愛の想いは、加速をし始めていく。

音楽というジャンルに対しては今まで何の関心も起きなかった愛は、初めて自分から音楽に触れてみようと思う――それは彼ら、彼のおかげだった。そして愛に、次々と行動を起こさせてしまうという不思議な力、その魅力か、魔力。

バンドと同名のＣＤを探し、買い集めたもののなかから自分のお気に入った歌の歌詞を訳してみたりした。歌は日本語ではなくほとんどが英語だったので、見ただけでは内容が分からないという……しかしそんな言語の壁を感じて唸りながらも、愛は一生懸命に辞書を引き、訳して歌詞の意味を追っていった。なかには、どうにも意味の捉えようのない言い回しや単語があり、愛を一日じゅう苦しませる事もしばしばある。しかしそんな時には、その悩ませていた曲

をプレーヤーにかけてみて部屋に流しながら聴くと、自然と何か答えが閃いたりしてくれていた。
これを『レンが教えてくれた』と手を合わせ、窓から差し込む光を浴びて太陽を拝んでみた……その繰り返しである。

歌詞にはまるで、言葉という宝か宝石かが詰まっているかに思えて。次第に愛を別の世界へと導いていった。夢をベルという女の名前で呼んでみたり、パーティーをうわべだけの人生だと皮肉ってみたりしていた。ひとつの単語にアレもコレもと意味を複数込めてみているその歌詞の複雑さ、深さ。技巧さのレベルは、確実に凡人の域ではない――愛は、歌詞の内容がとてもよく理解できていたが、それが何故できていたのかは愛自身にも分からないでいた。……

『身は　時という概念のもとに　とても近づくことは　できないね
でも　心は　近づける
僕は　パーティーで　キャンディを　拾った
君が落とした　キャンディを　拾った
口に入れたら　甘くて　溶けて　なくなった
でも僕のなかで　キャンディは　消えない　……　』

……直訳を経て、シンプルにまとめた歌の歌詞。愛には内容がスッ、と理解ができた。
いつの間にやら感動し、涙まで流してしまっていた――。
「レンはそばにはいないけど……レンの声は歌で私に届いた……そ

ういう意味なのね？　……レン」

『君』とは、キャンディのことを……キャンディという形は姿を失くしても、心のなかではずっと残っている――。

彼は歌った、キャンディを。たくさんの気持ちと意味を込めて――そのなかへ。

これを技巧と言わずして何と言おうかといった所だろうか。

「レン……会いたい……」

愛の気持ちは熱を帯びて加速していく。

止まらない。

彼のことをもっと知りたい。今は何を考えているのだろうか、と。

少し、これまでのことをソファに寝転びながら思い返していた愛は開けたＣＤケースを見て首を傾げた。「ん……？」

ＣＤに何かが張り付いていた。

長細い紙である。ライブチケットみたいな内容が書かれ――

「ライブ！？」

ガバッと愛は激しい音をさせて体を起こし、紙だけを両手で持った。目が大きく見開かれる。持つ手が小刻みに震えてきていた。

「『ＣＤ発売記念１００人限定内緒のライブへご招待』……ないしょ？」

声も震えてきていた。

「『このチケットであなたにライブの参加資格が与えられます』って。要するに私……当たったの！？」

それは奇跡のようだった。愛にとっては運命とさえ感じてしまうほどの。

愛は動き出していく。
止まらない。
たとえ先に何が待ち受けていようとも――
構わない。

2話（開演時間まで）

＞i15473－1775＜

Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ　……

それはバンド『ＳＡＫＵＲＡ』の、先週にリリースしたばかりの新曲だった。もちろん、愛は即行で購入する。販売はパソコンなどで彼らのホームページへ行き予約注文する、というものだった。ネット先行販売を終えてから一般に市場販売を開始するとホームページに書いてあったという。

パソコンなど普段からあまり馴染まない愛だったが、友達に頼んで予約してもらい、数日かけてやっと愛の手元に届いたのだった。今の愛の頭のなかは彼らのことで隅々までいっぱいであり、彼らの音楽が愛の生活に大きな影響を与えているのは明らかだった。運命をも本人知らずに変えてしまっているのかもしれない。

Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ　……

ボーカルの彼の名前はＲＥＮ、レン。

重量感があり、けれど繊細で、鼻にかかったような独特な声を出す。聴いていると何時間も時を忘れて聴きいってしまう、その声質、そのセンス。

愛は虜だった。彼の賢さも、歌詞を訳して意味を理解できれば言葉で証明できる。

「イージーカムの後は、何て続くんだろうな……」

イージーカムといえば、イージーゴウと思う人がいるのかもしれない。『Ｅａｓｙ Ｃｏｍｅ，Ｅａｓｙ Ｇｏ』――日本のことわざで言えば、“得やすいものは失いやすい”である。

「……」

愛は自分の部屋のソファの上で、開けたばかりのケースのなかのＣＤを見つめた。ＣＤに貼り付けてあったライブのチケットは何と１００人限定ライブ招待チケットで、愛は見事に当てたのだった。

「行くわよ、もちろん！」

両手に力を入れ、立ち上がった。

今の愛を止められるものは何も……ない。……

『あなたに僕が見えますか

あなたに僕の声が聞こえますか

見えやしない

届きやしない

だまされている

だまされて喜んでいる

人生は　お飾りなんだ　パーティーなんだ』

新曲を聴きながら、愛は口ずさむ。ただ、歌詞は全て英語だったために愛から放たれる言葉は意味不明な言葉だった。もちろん愛自

身、そんなことはとっくに分かりきっているから言わないでほしいと周囲に対して思っていた。
頭のなかではレンの声が響いている。歌が終わっても再び始まる。歌は手に持つCDプレーヤーに最初設定された通り、エンドレスで繰り返し繰り返し同じ曲が流されているのだった。だが何度聴いても全然飽きはせず、それどころか、まるで自分がレンの一部にでもなったかのような錯覚を覚えた。断言してしまってもいい、自分はレンと共にあるのだと……。

時刻はちょうど夕刻6時を迎えた。開始予定は7時からだと手元のチケットには書いてあった。
愛は電車を乗り継ぎ、来たこともない地へと赴く。電車のなかでは帰宅ラッシュ時であるにも関わらず、混み合う人ごみのなか幸運にも座席に座ることができ、おかげで着くまでCDプレーヤーのイヤホン越しにレンの歌声を満喫できたのだった。

迷うことはなく、ライブチケットに書かれていた簡単な地図と案内を頼りに愛は辿り着くことができた。

ライブハウス。

此処に来る前に詳しく調べておけばよかったかなと、愛は思った。動員数が１００人ということ、しかも、内緒のライブと聞いている。こじんまりとした店を想像していただけに、愛は「え？　こんな所で？」と軽く首を捻っていた。

５階建ての白塗りの壁の素っ気ないビル。見上げても、『英会話』『軽食ザッツ』などの小さい看板が各階に添え付けてあるだけの建物。入り口は開閉のドアもなくスッポリと横穴が空いたように奥ま

で続き、突き当たるとエレベータがあった。人が辺りにまばらで、女の子ばかりのようである。2、3人の知り合い同士で固まって談笑していたりしている。ピンクのキャミソールを着た、一番此処にいるなかで涼しげな格好だと思った女の子と愛は目が合った。しかし向こうの方が先に目を背けてしまったという。

彼女らもライブに？　……愛は少し心細げで前にと歩を進めた。

エレベータに着くまでの道伝いの壁に案内板が設置されていたので、愛はチケットに書かれていたライブハウスかバンドの名前を確認しようとした……だがしかし変なことに気がつく。

ライブハウスの名前である『ＳＨＯＷＴＩＭＥ（ショウタイム）』。そう、黒マジックで手書きで横書きにされていた、白い紙が案内板の『屋上』の位置部分に貼られていた。

屋上？　もはやハウスではない……何度も愛は首を傾げている。

するとエレベータの呼び出しボタンを押そうとした時、後ろから声をかけられたのだった。

「さっき店長の人が来て、開演時間までは来ないで下さいって」

愛は振り向く。先ほど視線をかわされた、キャミの女の子だった。栗色の茶髪を後ろでアップにしており、派手なラメ入りのピン留めで巻きつかせるように留めている。化粧はナチュラルメイクで少し甘い香りの香水をつけていた。

高校生くらいだろうかと愛は思って一瞬だけたじろいだ。高校生相手にどの態度と目線で話せばいいのかを考えてしまっていた。「そ、そうなの……ありがとうございます」

「あんたもライブ？　当たったワケ？」

愛の返事など聞いていない寸秒の間で相手は質問してきた。愛は「ええと……ええ、はい」と頷いた。

「フウン……」

相手はじいい、と愛の顔を舐めるように見るが、あまり気分のよいものではない。愛は我慢して、相手の次の言葉を待っていた。
「あたしギターのシークが好きなんだぁ。あのサウンド、シビれちゃう。あんたも、そう思わなぁいぃ？」
「……」
予想もしていないことを聞かれたので、愛はしばらく言葉を失った。
頭がどうにも回らない。
困った愛だが、何とか反応して頷いた。
「だよねぇ」
名前も知らないキャミの女の子は、鼻で笑うような仕草をとった後。愛から離れて、元いた集団の中へと戻って行った。
出迎えた集団からすぐ、どっと笑い声が上がる。もしや自分が馬鹿にされているのではないかと、愛は不安になって冷たいコンクリートの壁に体を向けて、小さく身を固めていた。
早く開演時間になってと、祈る気持ちで……。

人生は　お飾りなんだ　パーティーなんだ

僕も　そうなんだ

……

（『僕も』……？）

愛の脳裏にクエスチョン・マークが浮かぶ。僕、即ちレンは、何が自分も『そうだ』というのだろうか……と。
考えてみても、すっきりとした答えには到底いかないだろうと予測していた。
開演時間になるまでの間。不安な愛を、記憶の中のレンの歌声が

支えのように優しく包んでくれている。愛が想像し像となったレンが愛の頭のなかで祀りあげられていた。

歌詞の内容など、関係なく……歌は、流れている。

3話（お礼）

Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ　……

やがてエレベータの出入り口が開き出てきた人物に、場にいた全員の目が向けられる。

愛もだった。しかし登場したのは、レンでもなければバンドメンバーの誰でもなく。白のカッターシャツに黒のズボン、黒のネクタイを締めた、普通の細身の若い男だった。

男は恭しく頭を深く下げ、片手は底の丸いワイングラスを持つような仕草で胸前へと持ってくる。

「長らくお待ちのことと思います。本日は、ようこそ足をお運び頂きまして、誠に感謝、感謝致します……では」

男はバンドのマネージャーだろうか。それともライブハウス（か謎だが）の店長だろうか……主催関係者であることに間違いはない。愛は男に尋ねたいことでいっぱいだったが、それは周囲の皆も同じだろうと様子を見ることに愛は決めていた。

「エレベータの定員数は7名ですので。まずは順番にお並び下さい……」

男は案内をし始めた。屋上へと、ライブ開始を待つ人間をひとりずつ丁寧な対応で。この上下に移動する箱の中へと……導いていっている。

愛も順番を待とうと、列に並んだ。自分よりももっと前には、先ほど愛に声をかけた女の子達がいる。しかし向こうは愛のことなどこれっぽっちも気にする風ではなかった。おしゃべりをして時々に

叫んだり、騒いだりしているだけだった。

Ｐａｒｔｙ。パーティ。社交場。

……上っ面。

愛の耳にレンの声が聞こえてきたような気がした。たがそれは幻聴にしかすぎない、と愛には分かっている。

（人間なんて表では……）

残念ながら鏡が愛の手元に今は無い。仕方がなく家の玄関の鏡で見た自分の顔を思い出していた。いつもより入念に化粧をされていた……外での自分の顔というものを想像する。

（綺麗に着飾っているだけで……）

僕も　そうなんだ

「ささ、どうぞ。足元にご注意」

愛は、俯いていた顔を上げて声のした方を見た。

若く、まだ少年のようなあどけなさを残す顔が愛を見ていた。

「ありがとう」

愛は招かれ、箱の中へ。７人の人間が皆入り終え、出入り口に一番近い女の子が開閉ボタンを押そうとした時だった。

愛は気がつく。

そしてすぐ、開閉ボタンを押そうとした女の子に向かって、荒げた声を出していた。

「ちょっと待って！　……すみません、降ろして下さい」

愛は乗りかけたエレベータを降りようとする。

不思議がる乗客と案内人の若い男。しかし愛は気にすることもなく、「すみません……先にどうぞ！」と、詫びの言葉を言うと素早く駆け出していった。

若い男は走り去る愛の背中を少しの間だけ見ていたが、やがて自分の役割を思い出し仕事に戻っていった。
「さ、……定員空きましたのでひとり、なかへとどうぞ……」
……

愛は走った、一人の男を追いかけて。
片手には、茶色い革の札入れを持っていた……実はつい先ほど、エレベータの前で拾い上げてきた札入れだった。考えるよりも先に愛は体が動いていたという。
「あの！　……」

ビルを出て、道を歩いている男の背中に呼びかけた。
黒のジャケットに薄汚れた黒地のジーンズ。被る黒のキャップには、シルバーで骸骨の装飾が施されている。両耳でシルバーのシンプルピアスが光っていた。
愛に後ろから呼び止められ、傍(かたわ)らで。目線より下で息をつき自分を見上げている愛を見た。男の表情は変わらない。
「これ……」
愛の手から差し出されたのは、札入れ。男は黙ってそれを受け取った。
それから札入れと愛を交互に見ていてしばらく考える。「……」
呼吸が落ち着いた後……愛は冷静になって事情を説明していった。
「エレベータの前をあなた通った時、落としたのが見えたから……」
そう。
愛がエレベータに乗り込んで出入り口をぼうっと見ていた時だった。入り口の前をこの男が通りがかる。札入れを落としたことにも気がつかず、エレベータの前を通過していった。

恐らくは誰かが拾うだろう、あの男もすぐに気がついて、戻って来るだろう……触らずに放っておけばいい――そんな空気が漂っていたのかもしれなかった。愛は従って、見ていただけである。
だがしかし誰も札入れには気がつかない。
知っているのは、愛、自分だけなのだと。
別に善行を考えたわけでも、迷っていたわけでもない。愛は自分にしかできないと思った時に……思わずとも、即座に――走り出していた。
「わざわざ届けに？　……サンキュ」
男は少しだけ笑って、札入れをジーンズの後ろのポケットにしまった。愛は男の顔をよく見ようと顔を上げる。しかしその前に男の手が愛を引っぱり出したのだ。
「お礼する。そこの自販機でジュースでもどう？」
「え。……あ、はい。うん」
男が指さしていたのは、数十メートル先にある、ネオンが派手に目立ち光るゲーセン前の自販機だった。ピコピコといった電子音や、ガチャガチャといった機械音のやかましい音と分かるそれが店先から聞こえてきて、場の雰囲気を想像させている。
愛は、ゲーセンに行くのを久しぶりに思った。昔は兄や友達に連れて来られたもんだったと……男の手に引っぱられながら、思い返していっていた。

自販機で、それぞれ一本ずつ飲み物を買う。無論、男のおごりだった。愛はペットボトルのお茶を、男は缶コーヒーを買っていた。
「ちぇ、冷たいの、売り切れ」と男は舌打ちをした。冷たいのがよければコーヒーを止めればいいのにと思った愛だったが、黙っておいて、買ったお茶を少しずつ口にしている。3分の1程度を飲んだ後、フタをしめて手に持った。
「これで、お礼、終わり」
と……男は軽く笑いかけながら自分の飲み終えた缶を自販機の横に

あるゴミ箱に投げ入れて、澄ました顔で言った。

これで、お礼、終わり。

……何でそんな風に言うんだろう、と愛は思った。確かに、飲みたくて自分は購入したわけではなく……この男の気が済めばとついて来ただけにしかすぎない。

建前（たてまえ）。表向き。虚偽。嘘。うわべ……上っ面。

「パーティー……」

愛の口から自然と……言葉がこぼれた。

「パーティーが、なに？」

愛の考え込む顔を微かに笑ったまま覗いた男。愛は誤魔化すようにつられ笑いを。「何でもない」

それからすぐに、ハッと気がついて目を大きく見開いた。

7時、5分前である。

店の入り口から店内の壁掛け時計が見えた。時刻はもう、そんな時間を表していた。ライブ開始の時刻が迫っている。

「いけない！　ライブ、始まっちゃう……！」

愛は言うと同時に走り出した。ちゃんと走る前に「それじゃあね！」とひと言だけ言い残して手を振ってからである。

その後は男のことなどもう何処かへと置いてきてしまっていた。後ろで男が今どうしているかなど、愛の頭のなかにはもういない。存在を忘れた。忘れ置いてきてしまった。

愛はライブに行く。行かなければいけない、行かなければと……愛は焦り、走り急ぐ。

レンに会うために。

それだけに。

……

本を開いてごらんなよ
嘘ばっかり　書いてやがるから
見えやしない
真実は何処
だまされている
だまされて　喜んでいる
人生は　お飾りなんだ　パーティーなんだ
……

愛が走り出した後。
男も、走り出していた――愛を追いかけて。
まだ、自分の見える範囲の所に愛はいた。愛は決して振り向かず、ライブハウスへと一心に前だけを見て走っている最中である――止まらずに。男の前方をひたすらに。
男は愛の背中を見ながら、走りながら。ジャケットのポケットから、携帯電話を取り出した。
そしてすぐ誰かに電話をかける。ワンコールも待たずに相手は即、電話に出たようだった……
「今から行く。そっちはＯＫか」
『ああ。全員入場完了、あんたらだけだ、が……面白いな。数も一

寸の狂いなし』

電話越しにそれを聞いた男は顔を歪めてタマラナク、愉快に大笑う。

「いい答えだ……ようこそ、『ビサイド』」

残念ながら、走りながらの笑いは少し苦しかったようだ。愛を見失わないようにも、だからとても忙しい。

「もうじき着く……じゃあ後で」

相手の返答を聞くまでもなく、電話を切って元あったポケットにしまった、男。切る直前に、相手は最後に……言っていた。

『早く来いよ待ってる……レン』

3話（お礼）（後書き）

Ｂｅｓｉｄｅ　～をはずれてハズレの人達。

4話（ようこそ）

＞i１５４７５―１７７５＜

Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ　……

遅刻だ。

愛は、焦燥と諦めの狭間にいた。もう開演時間の7時なんてとっくにまわっているんだろう……せっかく自分は余裕を持って家を出て来たというのに、それなのに！　……と、こぶしを握り締めて憤慨している。

愛はビルに戻って来た。そして、突き当たりのエレベータへと直進する。心境は文句のひとつでも直接つけに来たクレーマーと同じである。憤り、興奮。今の愛は、行き場のない悔しさで全身を支配されていた。

エレベータの前には案内人の男がひとりで。

礼儀正しい彼は愛を見て、不満もなく柔らかく微笑んで出迎えている。

「お待ちしていましたよ」

「！」

自分の猪のような突進をにこやかに止められて。一歩後ろへと引き下がってしまった愛。

（待っていた……？）

何のこっちゃと、片方の眉を上げて今さらながらこの男を不審に思った。男の愛を見る目が突然、嫌らしく思えてしまったりする。

「ははは、変な目で見ないで下さいよ。あなたが最後のお客様です

……他の皆さん、もう上の階へ行かれましたよ。ささ、乗って下さい。あなたが着くまで、ライブは始まりませんから」
自分が戻って来るまで待ってくれていたというのだろうか。
とにかく、感謝した。愛は開いたエレベータの出入り口からなかへと静かに入っていった。

案内人の男は入っては来ないで、入り口の前に待機していた。すぐに入り口を閉めないのは何故だろうと思っていた矢先、すぐに目の前の光景に目が行った。先ほど愛に、お茶を礼だと称しておごってくれた男が走り寄ってきて、エレベータに乗り込んで来たのだった。
すぐに出入り口が閉まっていく――愛は「あ」と声を上げ、男を凝視した。肩で息をつき、前屈みになって両手を両膝に当てて乱れた呼吸を整えようとしている――男。
愛の視界には、彼のキャップの先端しか見えてはいない。
「ふう、間に合った。早い早い」
やっと声と同時に体を起こす。すると視線が愛と重なった。
「……？」
顔に見覚えがあると思った。愛はそれもあって、また不審な表情を浮かべてしまった。
この狭い箱の空間に2人きり。
男と女……愛はかなりの不安に襲われていた。寒気を隠している。
「俺もライブに行く」
「え」
男は突然そんなことを言い出した。「遠回りだけど」
エレベータは2人を乗せて上へと動き昇り出す。人を運ぶことしか能のない箱……きっとレンならそう言うんだわと、不安の消えない愛は必死にレンのことを考えていた。
レンが自分を護ってくれますようにと……。
「なあ」

「え？」
「お前、小学生の割り算できる？」
男は入り口の方を向いていて、一階ずつ箱が昇る度にパッ、パッ、パッと移り変わっていく階数表示のランプを眺めている。愛は相手の質問の意図が分かりかねて黙っていた。男は言いたいことを言うようにペラペラと口を動かしていく、……それは。
「本日１００人限定ライブ」
箱は止まることがなく、指定された通りの階へと向かって上昇する。
「エレベータの定員は、７人」
上昇していく。
「俺らで最後」
止まらない。

「１００わる７は？」

チン。
到着の合図だった。
エレベータは２人に知らせていた……着きましたよ、と。
愛が解答を言う前に出入り口は堂々と開いた。到着したんだと思い込んでいた愛は、先に降りてみるが……何故かそこは屋上ではなかったのだった。
（あ、あれ……？）
愛は訳の分からないまま、２歩３歩と自然に進む足が……やがて立ち止まる。呆然としていると背後から声がした。
「ようこそ選ばれたゲスト様」
愛はゆっくりと振り向く……。

男が、箱のなかで突っ立って清々しい顔をしていた。

微かに笑い、……そして。「選ばれた……？」愛の瞳に光がひとつ差し込まれる。閃きという――光が。
男の顔に見覚えがあった。思い出しかけて、ええと……と、頭を捻る。それと相まって、１００わる７という計算は、答えは１４と……
……あまり２人。
答えはすぐに出た。あまりが２とは、即ち……。
２人とは、愛と……

「レン……！」

その時に。レンの歌が頭のなかで流れて見ている姿と重なる。幻覚だと最初は思っていた。愛は、ああ、まただ、いつも私をからかうかのようにしてレンは……と、背筋を引き締め身を凍らせて幻のなかと実際の彼の姿を重ねて合わせ、まるで聞こえてくる音楽に耳、いっそ傾けていた……

真実は何処

だまされている

だまされて喜んでいる

人生は　お飾りなんだ　パーティーなんだ

あなたも　そうなんだ

……

「窓を見て開演を待ってて。……すぐ行くから」
パタリ……エレベータの出入り口が静かに閉じた。愛だけを階に降ろして。男は……。
「レン……何故……？」
頭の中なかが混乱していた。ひとり、残された愛は頭を抱えてしまう。
（一体、私の身に何が起こったの……？）
さっぱり訳が分からないままに、愛は入り口の閉じられたエレベータから屋内の方へと視線を移していた。床は、鉛丹色一色の絨毯（じゅうたん）が一面に敷かれており、愛はパンプスを履いていたが少し強めに足で床を叩いてみてもほとんど音を吸収してしまっているようだった。歩を進み歩いたが、足音は無にも等しく全くしないという。
愛は天井近くにまで高く大きい外張りの窓ガラスへと向かった。何も考えず……いや、無意識に、といった所でだろうか、そうかもしれない。
すると何処かで、声が微かに聞こえた気がした。間違いなく外からだとは思っていた。だが、しかし……？　正体はつかめない。
愛はあらゆる答えを求めていた。この部屋は、何……？　どうして私はあの案内人の男やレンに、こんな所に……連れて来られてしまったの？　そう、疑問だけが取り巻いている。

窓際に向かって、ガラス製の天板がのった鉄のひとつ足テーブル。そして白い、オフィスなどで来客用としてよくある普通の2人掛けのソファ。
そこから少し離れてはいたが、邪魔にはならない程度の距離の所に観葉植物のアレカヤシが白い鉢に植えられて置いてあり、リラクセーションの演出効果をもたらしていた。どうぞ、お寛ぎ下さいと

言われているように思える。
それ以外に屋内には、何も物は置いてはいなかった。
「……」
心細い愛。
先ほどのレンの姿が、やっと冷静になってきていた愛の頭のなかにまた浮かび上がってきていた。次に、レンの口から放たれた言葉が蘇ってくる。
『窓を見て開演を待ってて』と……彼が言い残して去っていったことを。
「窓を……」
愛は窓際へと寄って行く。すると急に、だった。

ダダダダダ。

はっきりと、何かを連続で叩く音が聞こえてきていた。愛には聞き覚えのある叩く音。そう、ドラムである、打楽器だ。「！」
向かいのビル！
そう愛は驚いて大口を開けてしまった。
向かいのビルは、今、愛がいるビルより5メートル以上は離れ、建物の高さが低かった。よって愛のいる階の目線では、ちょうど向かいのビルの屋上あたりが位置している造りになっているのだ。
つまり愛の目の前は、隣のビルの屋上『ステージ』となっているのだった。
愛の視界に広がるその屋上『ステージ』には。「……！」
愛には、信じられなかった。
『ステージ』の中央あたりにドラム、ドラム奏者が。ベースギターを抱えた人物、それからキーボード2台を横に並べて待機している、目立たないワイシャツの男。それぞれのポジションに人がいる、それと。
愛には名前の分からない機材一式が暗がりで見える。

ダダダダダダ……

ドラムは、小刻みに軽快そうにただ叩かれる。

ギュワンンッ……

恐らくはベースギター。チューニングでもしているのだろうか。そんな調子の音をさせて。

あとは、一本足のマイクが『ステージ』の中央に堂々と存在する。

愛の心臓が高鳴ってくる。

彼らを知っている――バンド『ＳＡＫＵＲＡ』のメンバーだったのだ。

だから当然、あのマイクに立って現れてくれる人物とは、……決まっている。

愛は窓に両の手の平をついた。窓は鍵がついてはいなかった。窓が開こうが開くまいが、今の愛にはどうでもよかった。愛は興奮して、激しく脈打つ心臓が喉から叫びと共に飛び出してきそうになるのに耐えた。頭がおかしくなりそうで。……

やがて『ステージ』に現れた人物。さっき見た格好と同じ人物が、颯爽と登場する。

「レェンン……！」

5話（爆弾）

Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ　……

何てことなの……！

愛の大きく見開き切った両の目に、光景が映っている。

向かいのビルの屋上、愛のいるビルより階数が少ないために実現し成り得た、『屋上ステージ』。愛のいるビルの階の目前に――広がっている。

最低限、演奏に必要不可欠な音楽機材と、それを扱う人間たち。

それはキーボードと、ドラムと、ベースギターと、マイクと……バンド『ＳＡＫＵＲＡ』のメンバー。愛のいる位置からは大きく数メートルと距離が離れてはいるが、愛が喉から手が出そうなほど求めている『彼』とは……愛のほぼ真正面と、向かいあって威風堂々と健在していた。

愛は心の中で叫ぶ。

『彼』……“レン”が……！　あの、レンが。本物よ、間違いない。確かにレンが、こんな近くに……！

鍵の付いていない窓は、愛が押さえつけてもビクとも動きはしない。叫んだとしても、その叫びは果たしてガラスを越えてレンに届くのかどうか？　いや……。

愛は両の手の平をガラスにぴったりと吸いつけて、ただただ釘づけになるばかりだった。

あなたに僕が見えますか

あなたに僕の声が聞こえますか

見えやしない

届きやしない

……

愛は悔しかった。

愛とレイを隔てている、この窓ガラスと距離が、存在がとても憎らしく。

それほどに興奮している愛……吸いつけた手の平は両方とも今度は、固く潰すほど強く握り締められていた。

曲は始まった。

一曲目はデビュー曲だった。愛も当然、知っている――

曲目開始と同時に、ワアアッ！　と歓声が怒涛に天井から沸き起こった。「！？」

愛は轟音とも聞き取れた振動に身を竦ませた。縮こまった体がやがてほどけてくると、怖々天井を見上げてみる。天井自体には、何も変哲はなかった。

（さっき賑やかな音か声がしたかと思ったら……そうか、この上って）

愛はやっと理解ができた。自分のいるフロアは、最上階。この上は『屋上』なのだと。そして屋上には恐らく、自分を除くバンドのファンたちがいて、そこから見下ろすようにライブを観ているのだと……。

何故だか自分だけが此処へ連れて来られ、置いてきぼりにされたんだと事情を飲み込めた。自分はレンたちに選ばれて……。

選ばれて？

愛は目を最大限に開いてレンを一心に見つめた。片時も目を離すまい、そう決めていた。しかし、歌うレンは一向に愛と視線を合わすことはなかった。ライブじゅう、ずっとである。それは奇妙なことではないかと、時間が経ち曲目が進むにつれて愛を動揺させていった。

（まさか避けられている……？　何で？　自分たちが私を選んだんじゃないの？）

訳を教えて。自分を選んだ理由をと……。

そんな心の暗中で解釈を模索している勝手な思考のせいで、愛は歌に集中できないでいた。レンは音の波に乗って、その誰もが羨む（うらや）自慢の声を自由に弾ませている。天性のその声を、複雑に即興で奏でられアレンジされている音の譜に便乗させて。

とてもレン本人は楽しげに、キーボードを叩いているメンバーの所へお邪魔してみたり、ベースギターのシークと同じマイクで歌ってみたり。せっかくの美声も時々わざとなのか裏返ってみたり、ドラム奏者にマイクを渡してみたり、屋上じゅうを走り回ってみたりと。普段は大人しくもあった彼のはずなのだが、今夜はまるで違っていた。大人には見えない。

子どものように、大はしゃぎで。

自由のように奔放で。

彼は……遊んでいる。

そして観客は。

ワアアァァアアア……ッ！
天井から響いていた。恐らくファン総勢９８人。愛の頭上、屋上からである。愛からでは全く見えないのだが、地響きかと思われるくらいの歓声。叫び集まりとなった声の群集は、脅威だった。
もし愛もそのなかにいたら。
恐らくは、空気と音の波と勢いと活気と人と、あらゆる考えつくもの何もかも全てに押され潰されてしまうのではないかと思わされるほどに。愛も此処で、レンを含む『ＳＡＫＵＲＡ』のメンバーたちと一緒に合わさってしまって――。
レンと。
音と。
声と。
同調し一体化する、いや。
支配される。

チン。
愛は気がつかなかった。自分の背後で、エレベータの出入り口が開いたことに。
そして。
何者かが、愛に近づいて来たことに……。
……
舞台では曲目が進み夜も時は進んでいく。すでに左右上下からライトアップされていた。
光をも支配しレンは、その作り上げられたイリュージョンのなかでマイクを離さず。気の済むまで歌い暴れ踊り続ける。

髪を掻き上げるたびにファンは興奮し歓声が沸き、片手を突き出せば屋上の手すりを越えそうになってファンというファンが手を同じく、レンを乞い求めている。そんな激情的なショウが続くなか、突然、歌のさなかに全ての照明が音もなく……全て消えた。

（え……？）

突如、月と周囲のビルの頼りない明かりだけになるステージ。もちろんファンは悲鳴を上げた。しかしレンを含めてメンバーは落ち着いている……。

愛も一瞬だけ驚いたが、たぶん演出だと思っていた。何故ならエレベータの事例がある。どうせ何か仕掛けがあるのだろうと思い、冷静だった。次に起きるのは何だろうワクワクと、好奇心が勝ってきていた……愛だった。……

だまされている

だまされて喜んでいる

人生は　お飾りなんだ　パーティーなんだ

……

……ふと、愛の脳裏にまた蘇ったフレーズだったが、それが予感だとは気がつかず。愛は次に来るレンの言葉を抵抗もなく、無防備に真っ向から受けることになった。

『本日をもって、バンドＳＡＫＵＲＡは――解散する』

……ほどよくフィナーレが、そろそろかと思わしき時の舞台に。

衝撃という爆弾が炸裂した。あれだけ騒がしかった場は不気味なほどシンと寸秒、静まり返った。
愛も……呼吸を寸時だけ忘れ去ってしまう……。
「イヤアアアアッ……！」
まず女子の誰かが金切り声を上げた。「嘘よおおおお！　レェェエンッ！」そしてうるさく続く。
「キャアアアアアッ！」
断続的に高音は仲間を増やしていき。此処は何処だ、戦場か、それとも亡者の蔓延(はびこ)る灼熱世界の地獄の底なのか……と阿鼻叫喚は散布しファンの悲鳴は暗い空へと広がって伝染していったという。一体、今に何が。愛も、混乱してつられて意味不明を叫びそうだった、その時。
「レンは、才あるが故に不幸だったんです」
抑揚のない声が矢のように貫く。愛は振り向く。
愛の背後3メートルあたりで、案内人の男が何もせず立っていた。愛を通して、バンドのメンバーたちを見つめているらしい。とても優しい目をしていた……。
（才あるが故……？）
愛は半ば麻痺したような頭で男を凝視していた。先ほどのレンの言葉が体から抜け切っていないのだった。男の言葉を耳は素通りしてしまいそうになる。
「どういうことなの……？」
泣きそうになっていく愛の感情などもお見通しで、男の語りは続いていった。

「レンの気まぐれに付き合わせてしまって申し訳ありません。今日の舞台を最後に、レンは音楽界から去るつもりです……これが彼なりのけじめだと。もう今後、表に上がってくることはないだろうと……」

「どうして！」

ついに愛は叫んだ、怒りと悲しみをぶつけて。でもそれだけでは無論、気は治まるはずはない。男は相も変わらず坦々と語っている。

「大手の音楽プロダクションからのいい話が来ました。ただそれは……彼の自由を奪うことになるという条件付きです。詳細はお教えできないので伏せますが、プロへとなる以上。彼は今までのように好き放題に歌うことが困難、またはできなくなるということです……それと」

まだ語っている。

「彼の歌は……公に出すには……危険すぎる」

そんなことを言った。

『危険』……？

愛の背後となっていた、窓の外でレンがマイク越しに言い伝えた。

『次がラストソングだ……聴いてくれ』

6話（支配）

>i15474—1775<

レンは目を閉じた……。
そして全ての照明という照明は、レンを主役にどうぞと浴びせて彼に注目し味方していった。
光の熱さなどおくびにも出さず、レンは一本足のスタンド先のマイクを上から両手で被せ握って、姿勢のよい立ち姿で静かにしていた。息をつかずいっそ呼吸を止めて沈黙し——静かだった。
ワン、ツー、……
ドラムがリズムをとる。

カ。

長く太いドラムスティックの、ドラム端を叩く一叩きに合わせて各メンバーの楽器の音は個性で勢いよく飛び出した。
ギュァァアアンッ！
一番目立つのはギターの音。そして、
ギュァァアアンッ！
音が世界を支配する。

ギュァァアアンッ！

音が世界を支配する。

ギュァァアアンッ！

音が世界を支配する。

ギュァァアン。

音が世界を　……

俺が音を支、配、す、る。

……さあ見るがいいとレンは悦に笑い転げていた。とても楽しそうにと飛び跳ねていた。寝て起きて助走をつけて跳び、2台あるうちの1台のキーボードの所へと着地した。彼は乱入して鍵盤を感覚か気分だけで叩き出し、滅茶苦茶な不快音を出していて何だ下手くそと皆に思い込ませたと思ったら、だ。

……

破壊的だった音の侵入者は、正確な旋律のなかへと次第に融けて一体化していく。魔法にかかったかのような、不思議さを秘めた何とも言い難い斬新な感覚を皆は覚えていた。

ああこれが見事というものだ。

無謀とも思えた弾き方は、レンの細い指によって音の元々に持つ性質を見極め最大限に引き出されて、場にいる全ての者を圧倒させた。音の調和と融合。そんな簡単にできるものでは断じてない、決してないのだ。それを軽く直感だけでやってのけてしまうという呆れたその才能、そのセンスとは、一体何なのか。……

……彼は何だ。……化け物なのか……？

完全に今いる世界は彼のものだった。この空間を手中に入れている。彼は此処では神であり、逆らうことなど許されはしない。

「レン……ああ……」

何故だか愛の薄くなった視界、目から、とめどなく涙が溢れ出ている。その理由は分からない。愛の心の臓は打ち震えている……感動、感動している、感動、感動とは。

――感動とは、こういうことなのだ――

愛は確信していた。声が出ない、これが感動、これが本当、リアル。心も涙も本物(リアル)よ。レン、私はあなたが、と――酔いしれる。

「きゃあああー！」

「！」

脳天を突んざくような悲鳴。

その後、人知れず心中で酔いしれていた愛の視界に一瞬だけ、信じられないものが飛び込んできた。レンと自分の間の、窓の向こうでは何、誰が――

人である。女性。

愛の視界に焼き付いている。人がひとり、屋上から落ちてきたのだった。「――！」

開かない窓の向こうでは、毅然とした態度のままのレンが独立したマイクを握って歌を歌い続けている。動じる風もなく、何ごともなかったかのように……振る舞っていた。

何もなかった？　――ただの錯覚か幻想か、夢まぼろしか。どうせ演出よ、とまで果敢に考えた愛だったのだが、それらは全て間違いだった。

「嫌よおおお！」

「やめないで！　レエェェン！」

「いやあーーー！」

声と共にだ。

人が、落ちてくる。ひとり。

そしてまた、ひとり。

やがて愛は驚愕し絶叫する。
「いやああ！　やめて！」――耐えられないと目を背けた。
頭を抱えて数歩後ずさりすると、すぐ後ろにいた案内人の男に肩を受け止められた。
「大丈夫です。予想はしていましたから、こんなことぐらい」
彼も平然だった。微かだが、彼の首筋につけていたシトラス系の香水の香りが漂う。愛は茫然自失としたまま、瞳が消えかけそうで、僅かな眼光でレンを見……た。

初めてレンと愛の視線が一致し真正面からぶつかる。
絡み合った。「……」身体が支配されている。
流れる涙は、誰のもの。レンは……言った。

Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ……

得やすいものは――

……

……照明がまた全て消える。
ライブの終わりを告げる合図で、同時に解散をも意味している『終わり』。だが愛はラストの曲を一切覚えてはいない。何も頭に入っては来ていない、いない。
「……終わりましたね」
肩を掴む、すぐ傍の男の声も。何も耳に聞こえない愛。何も……。
「どうしますか？　帰りますか？　なら早くなさらないと他のファンの方たちが降りてきてしまいますので……どうか、お急ぎを。ファンの方たちにあなたがこんな境遇だったことがもし分かってしまったなら、あなたは――」

愛に言葉を発せられる余裕など、まだ持ち合わせてはいなかった。まだ頭のなかは、ぼうっと蜘蛛の巣が張っていた。だがしかし男の声で、愛の反応を無視して続いている。
「……八つ裂きにされるでしょうね」

もう舞台だった屋上には何もない。全ての照明は消されていて、真っ暗闇だった。レンも他のメンバーも何処かへ行ってしまって、いない。
「何なら、ご覧になって下さい。外の下」
肩を押されがちに、魂を抜かれ人形のようになった愛は虚ろな顔と心で歩を進めた。男の言うがままに歩かされ、窓際に寄せられた愛は下の階を見下ろした。
男が大丈夫だと言った理由が分かる。
四隅をフックで頑丈に取り付けられた白いエバーマットが用意され吊られていた。そして、その上に先ほど落下したファンの女の子たち数人が仰向けで倒れている。もちろん生きていた。彼女らは、屋上の手すりを飛び越えて跳んだのだ。とても隣のビルに届く距離ではないとしても。
跳んだ……レンに、近づくために。命など惜しまずに……。

「あの子は……」
落ちたひとりは、此処に来る前に会話をした、あのキャミの子だった。目は両方とも開いている。一体、何処を見つめているのか……空か、あの黒い、ビルとビルの間に見えるだろう、夜の空か……。
それとも彼女の目には、レンの姿が映っているのかもしれない。自分だけを見つめている、自分にとっての都合のよい、綺麗なレンが……。
でも、と、ふと愛は思い出す。彼女が好きだと言ったのはレンではない、他のメンバーだったはずだった。
「嘘だったの……？　ギターのシークが好きだって……」

愛をからかったのか、それとも、レンに乗り換えた？　または…

…。

『レンの声は危険すぎる』――

7話（歌詞）

あのまだ生まれたてだった頃。僕らは皆、幸せだった。
円を描くように夢、描いてた。……

その先を知らないで。

……

終演の時。
立つ鳥は跡を濁さない。
小さな羽を広げて、彼は――大きく羽ばたく。
月照らす闇の中を自由と思い方向を定めず。
先を求めて。

……愛は黒の空に見えない鳥を見つけて、それが幼きレンを想像させていた。

「『Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ……』の歌詞の中で……」

窓から見えるビルの夜景と、ガラスに映る自分の瞳を見た。どちらも温度を感じることはなかった。「レンに聞きたい……」愛の呟きは、窓の向こうの世界に伝わるのだろうか。
「あなたには分かる……？」
誰に語りかけているのかがはっきりとは分からない、迷いとも聞こえる愛の呟きは、届かない。何も残されていない目の前の漆黒のステージには、誰もいない、いなかった。

「何処の部分でしたでしょうか？」
急に現実に引き戻される言葉を返してきたのは案内人の男だった。ずっと愛の傍にいた。いまだ彼の素性は知れていない。
男を改めて見る愛。白のカッターシャツに黒のズボンで、飾らない体質の細身の男。だが何処か落ち着いていて、安心を人に与えてくれる色彩を持っている。
「ベルと、本……」
愛は　、かつて自分が訳した歌詞を記憶の底から掘り起こす。一字一句、正確だと自分では奇妙にも確信をしていた。
『僕は　ベルを信じた　信じすぎていた　だから離れた　どうしようもなく（無力だった）』
「私は、ベルとは……夢なんじゃないかって。決めつけていたの。何となくだったけど……」
『本を開いてごらんなよ　嘘ばっかり書いてやがるから』
「週刊誌のゴシップを見たとか、バッシングでも受けたのかと……勝手に色々と想像してた」
『だまされている　だまされて喜んでいる』
「誰も本当のレンの心なんて知らない」
『人生は　お飾りなんだ　パーティーなんだ』
「人は仮面を被って人生という社会へ出て行くものだと」

『僕も　そうなんだ』

「私も……あなたも」

『得やすいものは』

「皆……ただの　お飾り」

Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｏｂｔａｉｎｅｄ
Ｅａｓｉｌｙ　ｉｓ　ｄｅｓｔｒｏｙｅｄ　ａｔ　ｏｎｃｅ

得られたものは　すぐに壊される

「レンは、プロには……なれないのね」
愛はクス、と軽く笑った。馬鹿にしたのではない、おかしなことね、と思った途端に自然と笑えてきたのだった。

好きなように歌って好きなように過ごしただけなのに。
社会という鳥籠は彼を捕まえようとするのね。珍しいから。
でも悔しいわ。鳥籠に入らなきゃ、社会では生きていけないの、悔しいわ……。

愛はそんな風にレンのことを思っていた。レンに与えられた立場、境遇、思いを膨らませて、加速していた。思い込みと、想像と、幻想と……そして確信へ、と。
「プロになっても歌は歌えます。彼の好きなように。存分に歌えば、いい……」
と、案内人の男は始め見ていた夜景から目を逸らし、エレベータへと音もなく歩き出した。そして『下』への階ボタンを押した。エレベータは下の階から上昇し、呼ばれて近づいてやって来ている。

「レンを求めて屋上から跳び降りようとも、レンの声に毒されてファンが自殺しようとも」
愛から離れた男の抑揚のない、けれど下へと吐かれ沈みそうな声は、重く愛の耳にも充分に響く。
ジサツ？
愛は眉をひそめていた。そんな事実は全く知らず、だが、しかし確かめるまでとも行かずに愛は胸中へとそっと押し込んだ。男は話し続けていた。
「レンの知る所ではない。ファンがどのような末路になった所で、彼の罪では、ない」
チン、と。音を立ててエレベータは到着した。まだ男の饒舌は止まることがなかった。
「彼の歌詞を知っているんでしょう？　……彼は何と叫びましたか」
愛は言われて即座に脳中の記憶のページを開いていく。ええと、と考えた。
「『壊れ出したら　止まらない、誰か……』」
思い出しながらの言葉と、重なる記憶のなかのレンの幻想。愛とレンの幻の声は、２つがひとつに。その言葉とは――愛のなかで閃きが瞬いた。
Ｓｏｍｅｏｎｅ，　ｈｅｌｐ
誰か、助けて
……
エレベータの入り口が開き、男は愛を気持ちよく招いた。「どうぞ……」
男の大きな片手は入り口の扉に添えられて閉じないように、もう片手は、なかへと愛を導くように添えられた。

男は案内人なのだ。それが男に与えられた唯一の仕事だった。
「……」
しばらく、愛の時間は止められていた。だが、再び愛は動き出す。男に誘われるがまま、与えられた見えない、恐らくは赤のカーペットの道を辿るように……それは当然のように。
愛はゲストで、お客様。今日、この特別な場に招待された、選ばれた――。
「あなたならレンを救えるかもしれないと思いました」
閉ざされようとしている箱の前で、男は言った。
「誰も拾わなかった札入れを持ち主に届けてくれた、あなたなら」
「あれも……？」

今から思えば、と愛は少しずつ顔を赤らめた。何も考えず、何も見えず。愛はレンがレンだとは思いもよらず、気がつかず……普通に追いかけ、普通に話しかけ、普通にお茶をおごってもらい。思い込みだけで過ごした時間――恥ずかしくて、たまらなくなった。
エレベータも同様で、レンの仕掛けか、罠。わざと札入れを落としてファンの子達の動向を確かめたのか？　……それにまんまと釣られたと分かった愛は、両手で顔を隠してしまっていた。赤い顔を隠す仮面を持ち合わせてなどいなかった。
察した男は目を伏せて、愛を見送ることにした。「きっと優しい……あなたなら」

パタン……入り口は閉じられた。

エレベータは、すでに押されていた『一階』へと下降して走り出す。愛ひとりだけを乗せて。僅かに聞こえる機械の音は、うるさくはなかった。むしろ……静かだとさえ思えていた。下へと引っ張られる重力という力を心地よく全身で感じている。
そのなかで愛は、また。レンの幻の声を聞いてしまう。歌声では

ない、生々しい声を――。

これで、お礼、終わり。

8話（Ｃａｎｄｙ）

愛は帰路を急ぎたくはなかった。時計は夜９時をまわっている。ビルを出たものの、道先を失っていた。帰りたくない、こんな後味のまま帰ってしまっては。帰る前に一目だけでいい、彼に、と――。

レンに会いたいと。

……

……数台しか停まってはいない車の駐車場の横舗道をフェンス伝いに歩き、電柱に汚く立てかけられた看板の前を愛は通りすぎる。雑居ビルや、閉店シャッターの下ろされた商店と商店の間の路地を頭ぼんやりと、また、気持ちゆっくりと……そして暗闇に怯えるようにも歩いていた。

駅へと向かっているようで、いっそ違う道を歩いてしまいたかった。そんな愛を、明るく楽しげな光が騒がしく迎えてくれている。ゲーセン……ゲームセンターの照明だった。「……」

店内は眩しいほど明るかった。明るさが、ライブ前の時よりいっそう増している。レンにお茶をおごってもらった場所。だが、愛は彼がレンだと正体に気がつかなかった。思い出すたびに顔を赤らめ、焦りが生まれる愛。――恥ずかしい。

愛は店内に入る。

ＵＦＯキャッチャーやプリクラ機が幾台も並び、小さな段差を踏んだすぐ奥はカウンターと、テーブル型やレーシングなどの固定型の筐体、ダンスや太鼓ができるアーケードゲームなどが詰まって設置され、男がパラパラとまばらに数人ほどがいた。ゲームの音や店内に流れる最新ポップの曲だけで、人声もなく落ち着けるようだった。昔は兄や友達とよく来て遊んだことのあるゲーセンという場。

大きくなってからはプリクラ程度で、もうほとんど来る機会がなくなっていた。懐かしくもあり、新鮮でもある気がしていた。久しぶりに何かひとつくらい遊んでみようかと、急に愛は思いたつ。

「あ……」

ちょうど愛の視界に入ってきたのは、丸い半球型のケースに入ったクレーンゲームである。お菓子をなかで掴んで落とし、ゲットする、それだけのゲーム。お菓子を取ってくれるクレーンをボタンで操作し、その押すタイミングさを要求されるものだった。景品は、お菓子、駄菓子。ほとんどはガムか飴――キャンディ。見ると、ガムの入った小箱は積み重ねられ塔を作り、少しの衝撃でも加えられたらすぐに崩れるようになっている。崩れたら難なくお菓子は受け取り口へと滑り込まれ手に入るのだった。こうやって仕掛けておいてお客を呼ぶのだ。さあ、取ってみて下さいと、挑戦的でもある。

「ようし」

愛はそれにのる。財布から硬貨を取り出し、数回分を投げ入れた。

クレーンが動き出すと、愛は回転してまわってくるキャンディの集団めがけてボタンを押すが、スイ、とクレーンは空をかき……始めは上手くはいかず、2・3個しかすくえなかったのだった。ガムの箱の塔はビクとも動きはしない。「ムムム」

苦い顔をして再挑戦をする。何とかコツを掴もうと、愛はゲームに没頭していた。

……自分の向かいのプレイゾーンに人が来たとも知らずに。

黒のジーンズ、シルバーの骸骨が装飾された黒のキャップ帽を被って、シルバーのピアスを着けている。上下の上だけを黒地のTシャツに着替えた『彼』は、たった一回だけのゲームプレイで見事に景品のお菓子を多量に手に入れていた。彼は景品を取り出すと愛の元へと寄る。愛が「え？」と、やっと存在に気がつき男の顔を見ようとする前に。

彼は愛の手を掴んで手の平の上に――。今、自分が手に入れたばかりの景品をのせたのだった。「あげる」
そして足早に去る。愛の反応など無視をして。いや、無反応に近かった愛が悪かったのかもしれなかった。彼は店の出口から出て行かず、手前の、地下へと続いている階段を下り始めていた。

「レン！」

愛は追いかけた。突然、愛の体の、作動スイッチが入ったのだった。止まりかけた愛のなかの全てのものが動き出して……待って、立ち止まってと乞い願った。階段を折り返して下りようとしていた彼の足元に、バラ、バラ、……と、愛が落としたキャンディたちが愛より先にと追いついて、ばら撒かれていった。

レンは立ち止まる。段上を見上げる。段上では、立ち尽くした愛がレンを見ていた。既視感……では、ない。ライブの時にも一瞬だけ見つめ合った2人。確かに、あの時に。真正面から視線と視線がぶつかり合っていた。
「待って……」
やっと絞り出せた声。それが精一杯だった。今度こそはレンに気がつくことができたのだ。もうあんな盲目な馬鹿ではないのよ、と、汚名返上の思いも含まれていた。レンは何も言わない。半身だけ振り返っていた状態で、キャップに隠されそうな目で愛を睨むように見ると……

キャンディを拾い上げる。集めて、愛の元へ。
愛が手を受け皿にして受け取ると、一個だけ、レンはキャンディをヒョイと摘み上げた。
「一個もらい」
包みを開け、キャンディをポイと口へ。それを美味しそうに食べ

ていた。「あなたには驚かされてばかりね……ライブ、凄く感動した……」
愛は話しかけた。レンにこれといった反応は見られなかった。レンは、「フウン。そう」と適当に相づちを打っただけだった。愛は話し続けている。
「素晴らしい歌、素晴らしい演奏、声、演出……お金なんてかけなくても、充分に私は満足だった。ありがとう、レン。……でも」
愛の興奮は、次のひと言から沈んでいく。「あなたのパーティーをもっと楽しみたかった……」

パーティー。仮面舞踏会。社交場。上っ面。表面。人生。
バンド『ＳＡＫＵＲＡ』の……レンの、解散ライブ。パーティーは『終わり』だ……
「光栄だね。それだけだ」
レンの反応は冷たいものだった。ああ、やっぱり……と愛は心の軋(きし)む音がした。実際の彼は、捻(ひね)くれているのだ。これはきっと――。
「……『Ｃａｎｄｙ』の　せいね。あなたは逃げてしまう……“臆病”の方の」
愛がそう言った時、レンは少し驚いていた。しかし、すぐに調子を取り戻して、だが、嫌な顔をする。
「へえ……？　あんた、そこまで知ってたんだ単語の意味。驚いた……たかがファンなんてノリだけだと思ってたのに」
愛の言葉など聞いていないかのように振る舞っている。愛は思いのたけをぶつけ始めていた。
「あの歌は素晴らしかった。ひとつの単語に色んな意味が込められていて」
走り出す口は止まらなかった。
「あんな技巧的で繊細で、切なく訴えかける歌……私はほんと神を見たのかとさえ思ったの。あなたはうわべでは捻くれていても、中身はとても臆病者なんだわ。何となくだけど私には歌詞の意味が分

かっ……」
　ダンッ。硬い石を叩く音が響いた。愛の身体は、壁に押し付けられてしまっていた。「……！」愛は衝撃に耐える。　レンは愛を睨んでいて、そうやって怒りを露(あらわ)にしたレンは、激しく鋭く愛の瞳を見つめ射抜き、金縛せていた。珍しくも感情的になったレンだったが……だがすぐに治まっていったようだった。
「ハハハハハ！」
　違って、愛に一笑をくれてやっている。まだ愛の身体はレンに捕らわれたままだった。
「俺が臆病だとか、歌が技巧的だとか、神は……ハッ、ま、いいとして……馬鹿だなあんたも」
　愛を今度は軽く睨んでいるらしかった。
「あれはパクリ。元歌があ・ん・の」
「！」
　愛の目は見開かれていき、とても信じられないと背筋が凍っている。
　――裏切り。レンの言葉が違う形となって愛に突き刺さっている。
「……いいことを教えてやるよ。人は偽る、嘘をつく……よくても悪くても、嘘をつく。人生という社会は、仮面を被る、綺麗ごとを言う、お客はだまされる。俺もあんたも……上っ面の社会というパーティーに参加してる訳だ、わかるか」
　レンは愛を激しく憎しみで見ている。恐らくは、愛を嫌悪しているのではないだろう。彼が憎悪を抱く相手とは。
「楽しく自己満足に優越に生きたいのなら、知らないふりをするんだな」
　知りたくもない世界だったのだろう……彼がプロへの扉を開いた時に見たもの、現実、それが。
　臆病で、繊細な彼を窮地に立たせたのだ。スポットライトの当たるプロの華やかな舞台を前にしながら――彼は、見たくもないものに触れたに違いない。だから、捻くれたのだった。夢は、綺麗だっ

たのに、……ベルは――

夢を、諦めますか。現実を、受け入れますか。

彼は混沌とし、ぐるぐると廻って自問自答をする。抜け出せない泥の沼に浸かっているかのようだった。迷い、恐れ……だから臆病。愛はそんな彼が、とても可哀そうに見えて仕方がなかったのだ。できることなら、救い出してあげたいと思い――しかし愛には力がない、力のない自分にできることとは何なのか。この2本の腕でできる可能なこととは何なのかを――愛は、必死になって考えていた。

やがて愛はレンに手を差し出し、引き寄せてレンを抱き締める。

力の限り。

自分の腕の中にいるのは男だった。ひとりの男である。肩書きなど関係がなかった。支えるものが必要で、今、とても必要で――助けを求めていたのだ。……救いを。

愛は思う――ええ、私は知らなかった、だまされていた、だまされていると知りながらも、これからだってだまされているんだ。そう受け入れている。

レン、あなたの主催するパーティーに、参加するの、参加したいの。だから連れてって。どうか私も連れてって。あなたの口のなかで溶けてしまったキャンディは、例えその姿形を失くしてしまったとしても、決して消えないから、……決して。

甘い……

甘い、口づけをあげるわ――

歌詞【Easy Come……】by SAKURA（前書き）

歌詞がないと分かりづらいと評がございましたので記載しています。

作詞は作者ですが、『英作詞・REN』・『和訳意訳・愛』の設定です。『僕』と言ってますが実際のレンは『俺』と言っています。作者の英語力には誰も何もツッコまないように……（恥）。物語の続きは次話より。失礼しました。

歌詞 【Easy Come ……】 by SAKURA

>i15472—1775<

Easy come ……
得やすいものは……

Can you see me?
あなたに僕が見えますか
Do you ask my voice?
あなたに僕の声が聞こえますか
You will not be able to be seen
見えやしない
It is likely not to reach you
届きやしない
Everyone is cheated
だまされている
Everyone is pleased to be cheated
だまされて喜んでいる
The life is the decorated one and a party
人生は お飾りなんだ パーティーなんだ
I am one of them

僕も　そうなんだ
Easy come　……
得やすいものは……

I nothing but believed the Bell
僕はベルを信じた
I believed too much
信じすぎていた
Therefore, I have parted after all
だから離れた
I did not have the done way (
It was helpless in me)
どうしようもなく（無力だった）

It doesn't stop when beginning to break
壊れだしたら　止まらない
It is not possible to stop it
止められない
Someone, help
誰か、助けて

Open the book
本を開いてごらんなよ
Only the lie is being almost written
嘘ばっかり書いてやがるから
It is not possible to see thr

ough
見えやしない
Is there truth if going to where?
真実は何処
Everyone is cheated
だまされている
Everyone is pleased to be cheated
だまされて喜んでいる
The life is the decorated one and a party
人生は お飾りなんだ パーティーなんだ

You are one of them
君も そうなんだ
Easy come ……
得やすいものは……

I nothing but believed the Bell
僕はベルを信じた
I believed too much
信じすぎていた
Therefore, I have parted after all
だから離れた
I did not have the done way (It was helpless in me)
どうしようもなく (無力だった)

It doesn't stop when beginning to break
壊れだしたら 止まらない
It is not possible to stop it
止められない
Someone, help
誰か、助けて

The one obtained
得られたものは
Easily is destroyed at once
すぐに壊される

9話（天国）

愛の手が指し伸ばされる。レンを救う、唯一の導き。
――愛の口づけは、彼に光を与えていた……。

ゲームセンター、地下へと続く薄暗い照明の下。辺りには誰もおらず、2人だけだった。愛とレン、2人だけの世界、邪魔なものは何もない。2人だけの……
「……」
静かなのは嘘。階段の段上では遠く、騒がしい軽快な電子の音や洋楽のおちゃらけたリズムミュージックが流れている。しばらく2人は動かなかった。目を閉じていた。そして――
離れた。
「あんた……名前は？」
無言を許さないレンは、間髪入れずに愛に尋ねている。「愛よ」
「愛……」
表情は何も示さなかった。愛は小首を傾げてみせている。とても物腰柔らかく穏やかに愛は、レンを見守っていた。でしゃばらない、それを思っていた。レンは聞きづらそうに……でも聞いてみたそうに……俯き加減で遠慮しがちに愛に向かって、とても小さな声で呼びかけていた。
「愛」
「？　何？」
「……一緒に……来るか……？」
聞いた愛は何のことだろうという顔をしている。パチパチとまばたきを繰り返してレンにもう一度の問いを投げかけていた。「……何処に？」
こっそりとレンは指で上を指さした。

「天国」
少し、弱り気味に笑いながら。
……

『破壊』された音楽。
かつてのビジュアル系は、『破壊のためにあった』と人は言っていた。彼らは破壊のために造りあげ、そして壊すのだ、心おきなく。何故ならそのためにあるのだからと……壊して何が悪いのか？　……理解し難き音楽の宿命でもある。
野蛮だとまた人は言うだろう。ならば教えてほしいのだ。人の持つ苦しみや怒り、矛先は。
一体、何処へと向かうのか……。

抱え込む精神よ。解き放て。我は場を与えよう――レン、彼の歌声は、聴く者の精神を破壊する。破壊へと『導く』だろう。縛られた世界から解放されて、あなたは、さあ自由になるのだ、と。レンの、自身の自由への願いは音へと化け運び、ファンにも届いた。それで壊してしまった。レンを心から崇拝する者は、即ちファンは……。
ファンは、マンションから飛び降りる。
彼の声に狂喜し、楽園へと夢を馳せながら。絶対に彼のせいではないはずだ――そう、思いたかった。例え巧妙に隠されてしまっても、事実は事実で消えはしないもの。それが凶器か敵となって彼を追いつめる、追いつめていく。しつこくもしぶとくも、果ての何処までも追いかけられて……。
「実験だった。今回のライブは……全てが、計算通りの」
レンは……疲れている。それが愛に見てとれた。レンの綺麗な両手は愛から離れジーンズのポケットに半分だけを突っ込んだままだ

った。行き場のない絶望した顔で、愛を眺めていた……とても、疲れた顔だったのだろう。涙は出てはいない。
「一人も、こぼれることなく９９人が出席した熱心さには驚いた……俺ってそんなに凄いのかよって、鼻で笑うぜ……あほらし」
今の愛に言葉はない。黙って聞いていた。
「実験……ファンが、屋上から飛び降りるかどうか。または何人」
レンの意識は愛ではなく、過去へとなって終えたライブへと飛び移っていた。
「メンバーと、プロ入りの声をかけてくれた人たちに頼んで計画したライブだったけど、ラストライブになるかどうかより……そんな、つまらない取り決めよりも。俺には、もっと大事なことがある」
ライブは楽しかった、とレンは思っていた。だからか思い出すと、まだ身に微かながら残っていた僅かな触感が蘇ってくるようで。レンは内から興奮しそうになっている。
「大事なこと……？」
愛はまた頭を捻って小首を傾げた。レンの次に出てくる言葉を待とうとした。本当は、レンをずっと抱き締めていたかった。もしかしたら永遠に、ずっと。軽く陳腐なものだが母親にでもなった気分だった。
「もしライブで屋上から飛び降りたファンがいたらだ」
レンの笑いはいつしか消えて現実の愛へと視線を変えた。自分を眼差す愛の瞳は自分から離れてくれていないことが……ありがたいとレンは少し感謝していた。
「いたら？」
レンは涼しい顔で息と気持ちを吐く。
「俺も死ぬ」
……
人は死が絡む時、何を思うのだろう。レンは絶望した。巧妙に隠

されながらも知り得た現実とは、ファンの自殺。プロへの扉はすぐ、そこに。だがレンはさ迷い……止まってしまった。ベルを信じていただけだったのにと……そこはかとなく悔やまれた。「死ぬって……そんな」

愛は信じたくはなかった。両手が心中を表すように、震え出している。太鼓のリズムが押し寄せてくるみたく、ドンドンと心臓が脈うつ音に切迫感を覚えていた。レンが調子よく、真情を吐露するその言葉は加速をし始めて止まらなく、グルグルと渦巻き、回っていた。

「俺には他に行き場が思いつかない。プロになって、表舞台に立って世に晒されて。でも俺の声は――」

――いずれ死を招く。

「人を狂わせる」

好きなように歌い。

「人殺しでもいいんなら、俺は喜んで舞台に立つ」

好きなように歌い。

「……怖いんだ……」

お好きなように。

沈んでいるレンを目前に、愛は案内人の男の言っていたことを今ひとたびに思い出していた。彼は確かこう言っていたのだった。

『レンの知る所ではない。ファンがどのような末路になった所で、彼の罪ではない』

レンを弁護してくれていた。彼は、レンの味方か、いや、ひょっとしたらレンのファンのひとりだったのかもしれなかったのだ。レンに罪はない――。

レンが、一人前として表舞台に立つことを望んでいる。それは皆が望んでいることでもだ。それはきっと、そう。――愛も。周りは皆、そう、望んでいる。

仮面など。少なくともレンを慕い思う人間の全ては、どれだけ上手に被っていても望みを言うだろう。思い切った愛は、震える自分の手を握り締めレンに詰め寄っていた。

「羨ましいわ」

レンは覚めたように顔を上げて、愛をびっくりしたように見る。

「？」

「こんなにも、あなたは周りに愛されて……」

怒ったような愛にレンの動きは止められた。言い返せず、愛を見つめていた。

「愛されて愛されて、皆に望まれて。――望まれて。あなたは単にワガママだわ。何でもやってみなきゃ、どうなるかなんて分かんないじゃない」

愛は愛なりに一生懸命に考えていた。

――すでに造られた安全で無難な道を辿って行くのが、いいと思う？

でもそれはきっと、未来で後悔する。何も分からないまま、後で無知だったことをまとめて恐怖で知ることになるのよ。『だまされて』。

――道のない道を探りながら造って行くのがいいと思う？

毎日に怯えながらでも幸せを信じて未来に行き着きたい？　格好悪くても一生懸命に、『だましながら』。

――さあ、どっちがいい？　どっちでもいいわ。選んだことには、後悔はしないから。

愛は訴えていた。

「私は、こんなちっぽけな場所でレンが歌うよりも。何億何千の人たちが観れることが可能なステージで、レンが思いっきり羽を伸ばして歌っているのをもっともっと観てみたいの。観れるなら、私はそれについていく！」

気持ちよく言い切った。愛の瞳は本気だった。それは当然だった……本当に、心底からそう思っているのだから。すると黙って聞いていたレンは……。

笑う。

「あはははは！」

笑われて、何故、という顔をする愛。さらにレンは面白く、声を張り上げた。

いつの間にか閉店間近となったゲームセンターの地下への途中で、レンは満足いくまで笑った後、愛に軽く言い返していた。

「何億って。地球人口の一体、何分の1なんだ」

からかうような目で見てもいた。愛は弱った顔で「う……」と肩を竦めてしまい、何度目かはもはや分からない赤い頬をしてみせた。

握った手のなかにはキャンディがある。汗と熱気で溶けていないか、心配だった。愛が手の平を広げてキャンディを確かめようとすると、……いきなり、である。

レンが愛を抱き締めたのだ。思い切り力強く。「ひゃ……！」蚊のような声を出してしまった。

「愛……」

愛の手元からはバラ、バラと。キャンディが滑りこぼれ落ち、床や階段の角に当たって下へと転がり散らばっていってしまった。

「元歌からパクったっていうのは、……嘘」

愛の耳元で真実が告げられる。しかし今の愛に、しっかりと届いたのだろうか。愛は、キャンディと同じに溶けてしまうのかと、思っている。

「天国じゃない楽園に……ついてきてくれ」

2人は、此処からスタートを切った。

……

半年後。
それまでに愛はレンと連絡を取りあい、たびたび会っていた。しかしレンは愛に、歌の今後の活動については一切、話してはくれていなかった。
……レンはプロに、なる。

１０話（始まり）

大きな羽を持つ鳥が、都会の雑踏の上を飛んでいる。
こんな緑もない餌もない所に不似合いな鳥が。カラスではない、名の無い鳥が。
目撃したなら、きっと人は呟くのだろうか。鳥は。

（自由だ……）

……

世界各地で市場展開をしている音楽プロダクション、『Ｍ．Ａ．Ｄ．Ｅ』。通称はメイド、造る意味も含まれていると言えよう。Ｍｕｓｉｃ　Ａｎｄ　Ｄｒｅａｍ　Ｅｎｔｅｒｔａｉｎｍｅｎｔ。音楽と、（素晴らしく理想的である）夢、娯楽という社名を創立者は付けたようだった。

主に音楽というジャンルに限ってではなく、夢、娯楽とあるようにゲーム、スポーツ、ネット、舞台、ドラマ、映画、アニメ、漫画、小説と。Ｅｎｔｅｒｔａｉｎｍｅｎｔ（エンターテイメント）であれば、何でもよい。非常に幅広い視野で一企業として成り立ち何十年と継続を見せ続け、変わらない姿勢と毅然で名を挙げていた。

此処に所属している企業グループや子会社、タレントや俳優、声優、選手、専属の著名人など、様々な傘下は実に質が高く揺らぐことが全くないという定評がある。だが逆を言えば、ハードルが高すぎ、凡人という凡人では門を叩くどころか拝むことすらできないだろうと言われるほど、傘下に入るというのはかなりの難関だという

ことになる。

レンの所属しているプロダクション、『M・A・D・E』……ちゃんと社名やロゴマークの入ったCDやDVD、BDもしくは懐古趣味者を対象にしたレコードまでが、一般にリリースされていた。

プロになると決めてからのレンたちは、かなりのスピード展開を世間に知らしめていた。街を歩けば宣伝の広告ポスターがレコード店の至る所に貼られていて、よく屋内では曲がかかっているようになっていた。ごく稀にテレビに出演していることもあり、会わなくとも近くにいるような親近感を抱き寂しさは誤魔化されてしまう……。

愛は、複雑な心境だった。

（仕方ないよね……）

愛は、レンとまだ数える程度にしか会ってはいない。あの、初めて会い口づけを交わし、ラストライブだったはずがスタート地点となった、あの日から……半年が経つ。メールや電話をたまに取り合うようになって、会って、時を過ごして別れ、……去る。

会える時をとても短く感じていた。

だからか、逢瀬の日を重ねていくほどに時間というものが貴重で、とても貴重で……どうしても濃密さを求めてしまうのだった。

しかしレンの心は愛に全てを預けているわけではない。

いつも何処か遠くを見ている。夢の先か、詳しくは知らない今手掛けている仕事のことなのか。愛は間近で敏感にそれを感じ取っている。でも何も言えない、不満を口に出してはレンにきっと怒られてしまう、それなら、別に言わない、言わない、だけど、ほんとは

傍にいてほしいの、と――。
会っても会わなくても寂しさが、愛を苦しめる。
愛が最近レンと会ったのは、もう一週間も前のこととなっていた。
電話もメールも、仕事の忙しさのせいか回数は減っていた。邪魔をしたくないと、愛から電話をかけることはほとんどなかった。就寝前にメールを打つくらいが関の山である。
ため息混じりの愛は大学の構内を出た後。人とのすれ違いざまに『レン』という名前を聞いて心臓がドキンと高鳴った。肩を竦ませ体を強張らせる。

「今度のアルバム、ＤＶＤ付きなんだってえ。アタシ、絶対買うう〜」
「レンてさ、普段ってどんな格好してんだろー。カノジョいるのかな？」
「えー、嘘。考えたくなあい！」

高い声で騒いでいたのはただの通りすがり。３人の、同じ大学に通う女の子たちだった。
歩いているだけでもこうしてレン、またはバンド『ＳＡＫＵＲＡ』の名が飛び出すことがある。愛はもう慣れているはずが、なかなかそうは簡単に言うことを心臓は聞いてくれそうではなかった。

……いつか、レンと。別れの日がやって来る。

愛は予感していた、少し自嘲な笑いを噛み締めながら。これでいいんだ我慢する、会えなくても、我慢する。愛は、レンが忙しくなったのも自分が言ったことのせいなんだと思い出していた。前を歩き出していた。大学を出て、市内へと向かうバスを待ちにバス停へと向かっていた。歩きながら、だんだんと思い直していった。

レンが。あの苦しんでいたレンが、思い切り自分のしたいことができるなら。

……

鳥が、空を飛んでいる。

愛の頭上を、円を描いて。愛が見上げると、鳥は太陽という障害物の周りを迂回しているように見えていた。

愛の小さな体の折れそうな細い腕の中には、翻訳家になるための、参考書の束を持っていた。愛にも、夢がある。夢を見つけた。レンが遠くを見るように、愛も、自分の道行く先を見ようと思っていたのだった。

（自由だ……）

手を掲げて、空を見ている。光が眩しいと、目を細めながら愛は雲の向こうを探してみていた。太陽が照らしてくれている、アスファルトでできた、道を――。

11話（変化）

一方。

レンは、事務所の会議室で残りのメンバー3人と関係者数人とで、軽く打ち合わせをしていた。打ち合わせとは言っても、傍目ではただの談笑話をしている風景にしか見えない。会議用のパイプ椅子が長机に横並びで並び、適当に椅子をひいて皆、好き勝手に話しているだけだった。誰もこんな所でいつだかに開かれる予定の、巨大プロジェクトの打ち合わせをしているなどとは思わないだろう。買ってきたばかりのパンやおにぎりを食べながら話に加わっている者もいる。その中でレンは、大あくびを醸し出していた。

「こらレン。話、聞いてんのか」

バンドのリーダーでもある、しっかり者でキーボード担当のＳＡＹ（セイ）は、コツンとレンの頭を叩いた。さっきから、レンが話に身が入っていないなと踏んだ彼はシラケた顔をして、口を尖（とん）がらさせている。

「聞いてる。一応」

と、レンは椅子に前後反対に座って、背もたれに体を前屈みになってもたれたまま頭を組んだ腕の中へと埋（うず）めた。そうして顔を隠したせいで、声がくぐもって聞こえにくくなっていた。

「じゃあ言ってみろよ。オレがさっき言ったこと」

突っかかる言い方をいつもするのはＳＥＥＫ（シーク）。ベースギター担当。普段は大人しくクールだが、口を開けば毒しか出ては

こないという。煙草は大量に吸う、酒も浴びるほど飲む。女扱いも適当で、長くほどほどに垂らした金髪も適当に自分で切ったらしかった。
　メンバーのなかでは、一番長身で細い体つきをしていて。レンとはよく喧嘩をしてしまう。
「総額推定２７億円。機材、照明、音響、舞台美術、セッティング、運営、運搬費用。スタッフ総勢２０８名、スタント、現段階で５６名予定。……かなり金のかかる商売だなって愚痴ったことか？」
　横に流す口調のレンに、またシークは噛みつこうかと思った矢先だった。

「よせよぉ、お２人さぁん。夫婦な喧嘩、見せつけないでよ」

　うふ、と、反対に座る椅子の背もたれに頬杖をつきながら愛想よく笑う小柄な男、ドラム担当のＪＵＮ（ジュン）だった。ちょっと変わっている。
「どこが夫婦だ。お前の目は腐ってる」
　シーク毒吐きの矛先が、ジュンへと向かってしまった。「あっはっはっはっ」
　大笑いで茶々を入れたのはセイで、場は何故だか和んでしまっていた。腐ってると言われているにも関わらずジュンは、全然怒りはしていない。むしろ喜んでいるのか、やはり変わっている。ジュンは笑顔でこう言った。
「確かに、金はかかりまくってるけどさ。気分屋のレンが、ここまで気合いを込めた理由って一体何だと思う？　……女」
　ブッ、と。誰かが息を吹き出す音がした。驚きどよめく他バンドメンバーと関係者。さっさと解答まで言ってしまったジュンだったが、ジュンの方がシークよりも実は腹黒い。

「女あああ！？」
「ちょっと待て！　何でお前が知ってる、ジュン！」
「ってことは……まじ？」
盛り上がりは止まない。しばらく続いていた。レンは大げさに頭をくしゃくしゃに掻いてみせながら、赤い顔を隠そうと必死に堪えていた。
「うるせえ」
出せた反発は、たったそれだけ。メンバー、スタッフもにやにやしながらレンの様子を窺っていた。

すると、静かに会議室へと入ってきたひとりの男。年のいった、好色そうな顔をしている。中年太りで黒いスーツを着ているその男は、レンやメンバーを見つけるなりすぐに突進して来ていた。
「あれ、優平さんじゃん」
「よ。近くに寄ったから来てやったぞ」
と、男は触るとざらりとする顎ひげを撫でまわして言った。白い歯を見せている。
「優平さん。お世話になります」
セイが一番に挨拶をした。まあそんなに固くなるなと肩に手を置かれ、セイの後にシークも腕を組みつつ軽く会釈した。ジュンもまだ当分にやけながら「どうも！」と元気である。
「ご無沙汰で……ってほどでもないですね。3日前に会いました。進行は順調ですか？」
スタッフのひとりが声をかけると、優平と呼ばれている男は「ああ！」と大きく頷いて満足に返していた。
「こっちは心配の『し』の字すらねえな。こっちが聞いてやるよ、レン。順調か？　またどっかで聴かせてくれよ歌」

優平の言葉にレンはどう答えていいものか分からず。黙っていると、セイがフォローしてくれていた。

「今さ、優平さん。レンに女性の影ありって噂してたとこです。優平さんは、そのへんご存じで？」

優平は表情を変えなかった。「知ってるよ」

あっさりと言ってのけてしまい、顎ひげをさすっている。

「高平兄貴から聞いてる。……やりたいんだろ？　ライブ」

優平の視線がレンへと移った。レンは、内心ギクリとして冷や汗をかいていた。さっきからレンは周囲に騒がれていて、動揺が見えてしまっている。普段、他人のことなど――ましてや、女のことなど。眼中にもないレンではあったのだが、すっかり自分のペースを乱されてしまっていた。

それは恐らく、『臆病』の、せい。……

愛のひと言がレンの心中に矢になって突き刺さっているようだ。

「相変わらずカタイ奴」

追いうちをかけるシーク……レンは少しシークを睨みつけた。相性の悪い2人は、一触即発の状態が常にある。「レンがやりたいって言ってくれたんだから、いいじゃんか。なあ？」

「そゆこと。レンも隠してないで、彼女のこと、教えてよん」

メンバーが間に割って入ったおかげで緊張は解けて、レンも落ち着いた。レンとシークがお互いの感情や皮肉をぶつけ合うたびにこうして、他のメンバーが軌道修正しようと励んでいる。例え、しょうもないダジャレやちょっとした冗談でも、元の平和で穏やかな空気に戻すには、充分にこと足りていたという。

「じゃあ、そろそろ……一応、これから渡米でね。もっとゆっくりしたかったが、またにしよう、レン」

優平の目は何処か優しかった。まるで何もかもが、分かっている

かのように。

三富優平。『M・A・D・E』の創始者であった三富龍平の息子、三富高平とは兄弟である。兄弟で業界のトップクラスへと君臨しその地位を不動のものにした。しかし兄弟とはいっても3兄弟。優平は、次男にあたる。下にはまだ、良平という弟がいた。3人とも、会社の要であるポストに就いていて、高平が副社長、優平は直属の補佐型秘書。複雑かつ綿密なマネージメントや戦略は、彼らの腕で成り立っているのだった。

「優平さん」

レンが、室内を出て行こうとした優平を呼んだ。「ん？　何だ」

「花火、どうなりました？」

外野をそっちのけで、レンは答えを求めている。場に居合わせているスタッフや、メンバーさえも、レンは自分のなかから追い出して優平の元へと一対一で対峙した。レンの持って生まれた高き気位は、その通りに自然と体から滲み出ている。あまりにも堂々としている素直そうなレンに、思わず優平は苦笑いをこぼしてしまった。

「順調だ。用意する手はずは整ってきているよ。しかしだなぁ、レン」

「？」

要領を得ない顔でレンがいると、片眉ひそめた優平は顎ひげを何度となく掻く。意地の悪そうな目でレンを見下ろして、そして。

「いや、金のかかる仕事だと思ってな……莫大に」

そんなことを言ってのけた。レンは、どう思ったか知れない。しかし優平の真意は。

「……すんません！」

会議室の隅から隅へと。レンの謝罪は行き渡り響いた。出入り口から人が行ったり来たり、往来の激しい場だった室内では、いた皆すべてがレンの方へと一斉に振り返っている。振り返っても関係ない素振りで自分の持ち場へとすぐに戻っていく者、振り返ってはみたが怒られているのかと誤解し気持ちいたたまれなくなって即座に離れていく者、振り返ってレンと優平を好奇から見届けようとしている者。

2人は、注目を浴びた。

レンが頭を下げている……優平という男に。

それは、スタッフはともかく、バンドメンバーにも信じられない出来事だった。世間一部では神とも言われ孤高に近く、私的には一般は近寄り難く。捻くれてばかりの、レンが。

人に頭を下げている。下げながら、レンの一度閉じられたまぶたの裏には、愛の――肩に垂らした髪を振り向きざまに払われて、レンの方へと向いた愛の面影がちらついていた……。はにかんだ笑顔をしていた愛。艶やかな口唇と、安らぎを与えるようなゆるい瞳で。小さな頭を傾けて……白百合の花のようにとても綺麗だった。

「……俺、お前のそうゆう素直なとこが好きだわ。レ・ン」

シーン、とまではいかなくとも。やや静まっていた閉鎖空間の突破口を開けたのは、陽気なジュンのひと声だった。オレンジ色のパーカーからチョコンと亀の首そっくりに飛び出した頭、太陽と瓜二つに見える明るい少年顔。小悪魔そうな彼は、両の手の平を鉄砲に形真似て、レンに向けて発射した。「どんっ」片手ずつ同時に放たれていた。「ふふふ」

ジュンのふざけのおかげで、またもやレンは救われる。「好きって、何だよそれ。キショイ」

シークが突っ込んだ。すると、ワッハッハッと、声を荒々しく高らかに優平が笑っていた。それからレンの肩を激しく叩いていた、痛そうな音をさせて。

「さて。成功させよう。これだけ金をかけて大掛かりになったんだ、レン？　……期待してんだぞ、お前には！」

むせ返りそうになりながら、レンは、――感謝した。心の底から。いつからだっただろうか、自分の周りのものの色が、変化し始めている。レンも気がつき始めていた。生活に彩りを感じるようになって……。

（愛……）

プロジェクトは進行している。前しか、見えない。

「はい」

レンの態度も清々しいものだった。見る者をさらに強く惹きつける。願わくは、計画の成功、実現、新しい道――。

愛、レン、それぞれは、それぞれに。未知の道を――歩いている。

12話（ディストロイ）

＞i15477—1775＜

Easy come……
得やすいものは……

『このまま、何ごともなく——』

……

どんよりとした曇り日の休日。愛は、買い物帰りで街なかを歩いていた。
片側3車線となっている、市街バスやタクシー、荷物トラックなど。交通量の多い国道を挟んで、靴屋や電器屋といった様々な店が狭そうにも広そうにも並ぶモール街と場はなっていた。地下鉄に繋がる地下道を通らずに愛は、手提げのピンク色のバッグと買い物をした袋を抱えて、足早に家へと向かっている所だった。

するとすれ違いざまに、外国人に話しかけられる愛。西洋系だろうか、白人で、背中に小さなリュックを背負った身長の高い男が英語で挨拶をしてきていた。「ハロ」
少し驚いた愛は相手の話を黙って聞いているうち、どうやら道を尋ねているんだと分かってきていた。それは身振り手振りから、である。

（え、えっと……）

だがすっかり動揺をしてしまい、愛は弱ってしまった。男の綺麗で済んだ青い目は、愛を見ながらにっこりと笑いかけている。しかしながら待てど愛から何の言葉も出てこないのを知ると、諦めたような顔をした。男は愛が困っているのを見て困ってしまったようだった。笑顔は崩さず、男は先を行こうと道の方向を変えた。

「ソーリー、グッバイ」

そして軽やかに去ってしまったのだった。

取り残されたかのような愛に、絶望感に近いものが覆い被さってくる。コツンと、愛は自分の頭を叩いていた。

「ダメね……」

愛は重そうなため息をつく。自信が、底にまで沈んで動けなくなってしまった。

「通訳できなきゃダメなのに……これから翻訳家になろうっていうのに。相手の言ってることが、分からないだなんてね……」

思ったよりも深刻に落ち込んでしまっていた。見えないが、壁が愛の前に現れたのかもしれなかった。そしてその壁の高さ厚さは、愛には想像もつかないという。

（……しっかりしなくちゃ。これからだもの……！）

持ち前の明るさを何とか拾い直した。再びに歩き出した愛の向かう所は交差点。人混みに紛れて、横断歩道で信号待ちをしていた。愛はその間に、手に持っていた買い物袋の中身を覗き込む。愛は本屋の帰りだった。その前にはレコード店にも立ち寄っている。リリースされたばかりのCDを買い、それから本屋に寄って聞き取り用の言語ブックを買って。家に帰ってから、まずはどちらから聞こうかと考えていた。すると。

ピロリロリ……

愛にとっては、なじみのある音を聞いた。そう、携帯電話のメール着信音である。

すぐに愛はバッグから携帯を取り出して、折りたたまれていたのを開いて画面を見た。周囲の人々は信号が青に変わったからと集団で動き出して、人波を作り出していた。渡らずに立ったままの愛は、……胸躍る。「レンからだ！」

久し振りのレンからのメールだった。表題も『久しぶり』と書かれたもの。愛は、たまらなく嬉しくなって大はしゃぎだった。

（うふふ）

愛の理性をとっぱらい開放したなら、人の目も触れずにいきなり踊り出してしまうだろう。愛はにやける顔を我慢しながら、人に続いてやっと前を歩き出していた。横断歩道を渡る上で、自分の閉鎖された世界に浸りながら、酔いながら。しかしその時だ。

「君、危ない！」

「え？」

突然の、愛の世界を壊す声。ついで、激しい高音の――車のブレーキをかけた音だった。暴走した乗用車が、車線と車線の間を縫って乱暴に走ってくる。まだ我慢笑いをしたままだった愛は、無邪気にも声と音のした方を振り返っていた。声がしたのは愛の後方で――。

振り返り、と同時に。愛は強い力で前方へと突き飛ばされる。

キキキキキキ……！　ドン、パリン、……ぐしゃ。耳障りで、異質な連続音が響いていた。愛の耳にもあたりにも。そして。

「あああ！」

「大丈夫ですか！　……救急車あ！」

名の分からない通行人たちのざわめきと、好き勝手に心配する言葉達……群れ。愛の倒れた傍らには、割れたＤＶＤやＣＤ、本の入った袋の残骸が地面に散らばっている。購入したばかりで、まだ開けてもいないＤＶＤやＣＤ。聞き取り勉強用に買ったのと、レン率いるバンド『ＳＡＫＵＲＡ』の新アルバムだった。……

もう聴けない――

……

その頃、同時刻。雨が降り出しそうななか、レンは走っていた。これから愛と待ち合わせた場所へと向かう。今夜に発つ飛行機でレンは、仕事のためにロスへ行かねばならなかった。しばらくの滞在予定でもある、そうなれば、しばらくは愛と簡単には会えなくなるのだった。だからその前にと。

「愛……」

今のレンは身軽で、手に持っているのは一枚のＣＤだけだった。開封されてはいるが、新品同様でＣＤには触れても聴いてもいない。それはレンが愛に贈るためだけの、特別な仕様を施したものだからだった。

歌詞が付いている。レンの手書きで。普通に出回って販売されているものには、付いてはいないもの。

これを会って、愛に渡す。愛は喜ぶだろう、笑うだろう。レンはそれを見たかった。

雲行きが怪しい。今から、雨が降りそうだった。街の雑踏のなか、レンは息を切らしながら気持ち急ぐ。何軒、何十軒という店やビルのそばを通りすぎ、人と人との隙間を強引にぶつかりながら抜けていった。時折、何処の店からか音楽が聞こえて、しかしちっともレンの関心を惹き寄せられないという無力な音楽でもあった。唯一、レンの耳にとまったのは。

（……不思議なもんだな）

交差点で信号待ちをしていると、大手の電器屋だろう、店のなかから自分の知っている歌が流れていることに気がついた。流れているのは『Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ……』。知っているどころか、自分の歌である。

（自分の歌だってのに。なーんにも思わねえ……）

まるで他人の歌に思えていた。自分の内情を綴った、自分の歌であるはずなのに。

奇妙で可笑しいと、レンは口元をほころばせていた。上空を見つめ、吐かれた白い息が微風に消されていく。歌はもう、レンが『過去』に忘れ置いてきたものに成り下がっている。それもあって、今のレンには扱いなどどうでもよくなっていた。例え歌がお茶の間のＣＭに使われようとも、センスもなく内容とはそぐわないアニメや映画かドラマの、主題歌に使われようとも。好きにすればいいという投げやりさに落ち切っていた。レンにとっては所詮『過去』のもの。固執しなかった。割り切っていた。

歌は収録された通りに流れていく。決められた五線譜上に沿い、メロディも歌詞もそれに逆らわず従っていく。歌は止まることなど知らず、そのままラストへと、川のように流れていく。

信号が変わり道行く人々と同じに歩き出したレンは、歌の聞こえる領域から脱出していった。もう後ろへ、後ろへと……聞こえなくなっていく。離れ遠ざかっていく。レンがいようが、いまいが関係なく、歌は無関心で平然と、ラストで締めくくられるのだった。……こんな風に。

Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｏｂｔａｉｎｅｄ
得られたものは
Ｅａｓｉｌｙ　ｉｓ　ｄｅｓｔｒｏｙｅｄ　ａｔ　ｏｎｃｅ
すぐに壊される……

13話（迷路）

Want to be alone me
僕をひとりにしてください
Regardless of me
放っておいてください
Without coming here
こちらに来ないでください
Make me lonely
ひとりがいいんです
Even if I go to where, I am l
onely
僕は、ずっとひとり

Do not cry
泣かないでください
The truth is not seen when it
cries
泣かれると真実が見えない
I do not want to think that y
ou are telling a lie
あなたが嘘をついているとは思いたくない
I became tired of worry
考えることに疲れたんです
I want you to leave me alone
そっとしておいてください
And, to another world

そして別の世界へ

――『Ｍａｚｅ（迷路）』、作詞・作曲／　ＲＥＮ　編曲／ＳＡＫＵＲＡより――

……

レンが、一体どのような心境で書いた詞だったのかは、誰も知らない。

いつでも新築のような白の壁、白のベッド、白のイス。全てが、白、白、白の部屋のなかで、愛は、男が寝ているベッドの傍らで小さく呼吸をしていた。聞こえないくらいに音も立てず……静かだった。男の体に取りつけられているのは生命を維持する装置で、点滴、心電図。装置から流れてくるファクシミリ紙のような紙の、上を伝い振れる痛そうな針は、途切れてはいけない生命の線を描く。

男は、意識が不明だった。心の臓は針の示すデータの通りに動いている。働き休まずに脈を打ち出し血液を運んでいる。事故に遭ってから3日が経っているというのに、まだ目を覚まさない、眠り続けていた、その男。脳出血の緊急手術は終えていた。早く目を覚まして欲しいのにと、愛は願い祈っている。

愛に眠れない夜が毎夜訪れているのだ。安らぎのない、渇いた泉に浮かぶはずはないが宙に浮かぶ張りつめた心は干からびて裂け割れそうに。刻、刻と。限界が愛に近づいて来ている……忍びよってくる。

（私のせいで……）

頭にも、布団に被されて見えていない体にも包帯は巻かれて。男は、眠っていた。

織坂陣（おりさか）。工学研究科、未来材料創成工学専攻生。男の身元は、看護師によって聞かされた愛。年は愛とそう変わらないほどで、眉はつり上がり頑固そうな顔立ちをしている。度の低いレンズの眼鏡をしていたらしいが、事故でもはや使いものにならなくしてしまった。ベッドの脇の棚の上にちょこんと破損した眼鏡は置かれていた。

愛は奇妙だと思っていた。彼の身元は分かったが、親などの身内の者がひとりも病室を訪ねて来ないことに疑問を感じていた。おかげで内心では人に責められずに済むと思うこともあるが、時間が経つにつれて彼の身を案じて、この人はどういう人なのだろうかと関心が向いてきていたのだった。

事故に遭った時。

愛は横断歩道を渡る途中、交差点を暴走してきた乗用車に危うくはね飛ばされる所だったのだ。それを回避できたのは、運がよかったと言える。愛は誰かに思い切り前へ突き飛ばされたおかげで車との接触を免れ、こうして生きている。激しく転がって少しだけ手や膝を擦りむいてしまったが、全然平気だった、しかし。気絶し、病院へと運ばれてきた後。愛を助けた男の方、は――。

（私のせいだ……）

愛は自分を責め続けた。愛が目を覚ましてことの重大さを知った後。緊急手術を終えて入れられた個室のベッドの横に、震えながら、立つ……。

ぼんやりとしたままで、視界がクリアではなかった。頬に涙が伝う。

もし死んでしまったら。
もし目を開けて何か言われたら。
もし、体が動かせなかったら。
私は。
私は。
どう責任をとる？
どうすればいい？　……
愛は混乱して身動きが全くできなくなった。数時間も……彼の表情のない顔を、見続けている。

……

Ｉ　ｌｏｓｅ　ｍｙ　ｗａｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｍａｚｅ
迷路の中で迷う
Ｈｅｌｐ　ｍｅ
助けてください
Ｇｉｖｅ　ｍｅ　ｌｏｖｅ
僕に愛を
Ｇｉｖｅ　ｔｈｅ　ｈａｎｄ　ｏｆ　ｌｏｖｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｇｏｄ
神の、愛の手を

……

「愛の野郎……」
レンは、厳しい顔で歯を打ち鳴らしていた。携帯電話を片手に握り締めたまま腕を組んで、その下にも組んだ足をドン、ドン、ドンと、床を叩く音を出し言わせている。非常にイラついていた。空港のロビーの、４人掛けソファ１つに腰かけて数時間。レンはひとり

で腹だたしく携帯電話を睨んでいた。目を離しても、また見る――何度も何度でも、数分おきに。
愛からの連絡が一切ない。
その事実がレンの感情を逆なでていた。オープン・アンド・シャット。ｏｐｅｎ　ａｎｄ　ｓｈｕｔ。単純明快だった。レンは、愛と待ち合わせた場所である映画館の前で、待ちぼうけを食らう羽目になっていたのだった。最後の上演も終わり、お客が帰っていくのを眺めて。空しさは、怒りに。メールで文章にそれを表し送信してみても、返事は返って来なかった。

なに　やってんだよ！

短文に込められた怒り、空しさ、怒り、また空しさへと。無限のループを描くように感情は動きまわり、止まれず、抜けだすことが困難になっていた。何処か遠くに響くサイレンの音が、そのレンの呪縛を解く――赤いサイレン、危険の音を。
（救急車、か……）
怒りが消え、空しさは残る……。
映画館の屋内照明がひとつだけ消えて、いよいよ空しさは主役となった。
背中を押されたかのように、レンの足は映画館から遠ざかり、ひとり。暗い人気のない道路を歩いて……駅へと向かって行った。
――無駄な時間を過ごした。忙しいのに。
レンは空港に来るまでの間、愚痴ばかりをこぼしている。「ま、そのうちごめんってメールが来るよ」
ジュンの言っていた無責任な励まし言葉は、あまり効果がなかった。

色んなことを思い出していると……ひとりロビーで座って待っているレンの方へ。フォーマルな黒い、ビジネススーツの女性が近づ

いて来た。白い襟から見える首元やスカートから伸びる足は魅力的で、凛とした眉と目のラインはプロ仕様のように美しい。だが薄い口唇の奥からは、容姿に似合わない声が出されている。

「行くわよレン！　おりゃあああ！」

勝ち気な性格で、いつも何ごとにも挑戦的な、三富優平の秘書である――二渡（にとべ）部理香。優平の代わりに、日本へとレンを迎えにやって来ていたという。

「どうも。ご苦労様で……手続き、終わったんですか。だいぶ待たされたんですけど」

不機嫌な顔は直ることがなく、苛立ちながらレンは座ったまま、自分の前に立って見下ろしている理香に問いかけた。

「まあね。ごめんなさいねえ、こちらの手違いで。でももう大丈夫よ、代わりの便に乗れるから。さ、行きましょっか」

理香に呼びかけられて、レンは立ち上がる。理香が日本に来てレンを連れて戻ろうとした所、便を間違えて予定の出発をやり過ごしてしまったという失態を犯したのだった。でもめげてはいない、切り替えが早いのも特徴である。

（愛……）

外の景色を大きな窓から見つめた先には、飛行機がちょうど空の中を飛んでいく。レンも、次の便で日本から発つ……陸を離れて、違う土地へと。愛とはこの先仕事のためしばらく会えないことが分かっていても。愛からの返事がなければ、レンにはどうすることもできなかった。

（ばか野郎……）

レンは去る。仕方なくと、肩を落とし。理香と、バンドメンバーがレンを待っている。

仲間がいても、レンは常にひとりきりのように感じて止まなかっ

た。

14話（陣）

こんにちは　ようこそ　鏡の前のエンジェたち
君はだれ、って問いかけてみる
君はだれ

……

閉められている外窓のカーテンと蛍光灯の光のなか。陣が目を開けると。
白いベッドの隣でイスに腰掛け、陣の視線に気がついた愛の姿が目に入った。愛は大げさなほど驚きと喜びに満ち溢れた顔をしている。瞳を輝かせて、待っていましたと言わんばかりの飛び出しそうな心臓の動悸を抑えていた。「おはようございます……！」

何て意味不明なことを言っているのと愛は微かに思った。さらにそんな細かいことはどうでもいいわと無視をしていた。陣も気にしてはいない。

気にするしないというより、始めから気にはかけていないと言った方がいいのだろう。陣は、まばたき以外は体の部位を動かさず、しばらく黙って愛から天井へと視線を移してぼうっとしていた。突然のように飛び込んできた外部からの情報を、頭のなかで整理している。

やがて陣は……不器用に口を開いた。
「ここは……病院、か……？」

生唾を飲み込みながら、それでもまだ部位は動かさない。「はい……」間を少しだけ置いて、愛が申し訳なさげに返答した。「あなたが目を覚ますのをずっと待っていました……」

声が震えていた。目尻に涙を浮かべていた愛。そっと、指の先で涙は拭いて落ち着けようと踏ん張っていた。陣はちら、と愛の方を見たが一瞬だけだったようで、すぐにまた視線を天井に移し「あ、そう」と素っ気ない一言を告げていた。

意識がはっきりとしていることが見て明らかである。

愛はすぐに看護師を呼び、医師が病室にやって来て診察を始めたのを見届けていた。陣の意識が回復したことで、周囲の動きは慌ただしくなっていった。

生還を果たし、生命の危機を一度は脱出したと安堵していた愛や医師たちではあったが、2日経ったある日の午後に陣は下半身の麻痺を訴える。急ぎCTスキャンとMRI撮影を行った結果、首の骨と肋骨の骨折が新たに発見されたほか、脊椎に異物が見つかったという……医師は、「首の骨折はあともう少し事故の衝撃が大きかったら即死していたのかもしれない」と愛を診察室に呼び、そう言って考えこんでいた。

脊椎の異物に関しては、折れた骨のかけらか、凝固した血液とみられている。いずれにせよ応急手術をしなければならず、「万が一、脊椎の神経が傷ついた場合。下半身の麻痺は覚悟しなければなりませんが……」と医師は話していた。

医師は愛の方を見やる。何度連絡を入れても、一向に陣という患者を誰も往訪してこないことに困惑しているのだった。愛は、立ち

くらみを堪えるのが精一杯である。

担当医師が病室を訪れ陣に、愛に言ったことと同じことを告げた後。去る医師や看護師を見届けて、残された愛と陣は沈黙していた。いても立ってもいられず愛は、落ち着きと持ち前の明るさを取り戻して決心し、重い口を開いていた。

「ご両親や親戚の方はいないの？　私、何なら連れて来ますが！」

さっきまではかなりの落ち込みようだった愛だが、何とか払拭しようと頑張っている。暗い顔をしていたって解決しない……気持ちを切り替えるためにもと言い試みたのだった。だが無表情の陣からは、冷ややかな返答しかなかった。

「親とは勘当している。友達も作らないし、俺はひとりだ。ひとりでいい」

「そんな……」

どうして、と愛はイスに座ったままで身を乗り出していた。「俺の実家は老舗の旅館でね」

興奮しかけた愛は引っ込み、淡々と身の素性を語り出す陣の声に耳を傾けていた。今日は好天で気温が高いのか、それとも緊張のせいなのか、喉が渇いていた。

「俺はN工業大学、工学研究科でナノレベルでのエネルギー変換技術の研究をしている。それだけじゃないが、とにかくそっち方面に行きたかったんで実家を継ぐつもりはない――そう言ったけど、頑固ジジイたちには通じなかったもんで。仕舞いには勘当だ。最初から、聞く耳持たないって頭ごなしに怒り気味だったし、俺は始め段階的に説得しようとしてたけど、段々馬鹿らしくなってついには飛び出してきた。もう関わるのもうんざり。俺は誰にも邪魔されず、純粋に研究したいだけだ」

陣の瞳に意志の固さを表すかのような炎が見え隠れしていた。話し合われた場がどれだけ惨憺（さんたん）な状況だったとしても、自分たちの子どもが生死の境をさ迷っているというのに迎えにも様子見にも全く来る気配がないというのはどういうことなのか。愛にはとても信じられなかった。それほどまでに、頭の固い者同士の意地の張り合いだということだろうか。何とも言えないわだかまりが、へばりつくように愛に残る。

（でももし手術をして、麻痺が残ってしまったら。あなたこの先どうするの……大学にも通えなくなるし。治療費は私がちゃんと支払うけど……）

愛は陣の身を案じた。これ以上、下手に口を出し刺激して容体を急変させたらと思うと、思ったように会話を続ける自信は今の所なかった。またこの話は後日の、別の機会にしよう、と愛は他の話題を探すことにした。

「ね、そういえば眼鏡。壊しちゃったから、新しいのを作ってきてあげたいんだけど、どうかしら。それは迷惑？」

明るく、愛は微笑みかけた。陣にはそれが余計な気遣いとでも思ったのかもしれないが、「無いと困るけど、別にあんたが……」と素直になれず突っけんどんに言い返していた。

愛は得意そうに目を細め、また微笑み、陣に言ってやった。

「私はね、あなたみたいに偏屈な人の相手は結構慣れてるのかもね。ふふ」

偏屈、と決めつけた。言われて陣は「は？」と眉をひそめて、愛をばつが悪そうに眺めていた。愛が誰のことを指して言っているのかは、この時の陣には分かるはずもなく。愛はひとりだけで楽しん

でいた。「この後の手術、上手くいくように祈ってる。待ってるから……」

ベッドの小脇で、愛はイスから立ち上がった。数時間後に陣は手術が行われる予定である――愛は事故から数日間、自分の持つ時間をほとんど陣のために使っていた。大学も私生活も最低限の時間しか過ごしてはおらず、押し潰されそうな不安や恐怖と戦っていた。目よ覚めて――起きてお願い――動かなければどうすればいいの――私、は――愛を駆り立てる見えない『もの』は、陣が意識を取り戻したことで幾分か小さくマシにはなったが、まだ奥深く底辺で残留していた。

待っているわ。

静かに去ろうと、愛がベッドから離れかけた時だった。黙って聞いていた陣に、少しだけ動揺が見える。「待って――」

愛が素早く振り返り、肩に垂らした髪が揺らいだ瞬間に――いち瞬間だけ、2人は見つめ合った……陣の方がすぐ、愛から目を逸らしてしまったが。

「本を……借りてきてくれないか……」

擦れた陣の声は、愛の耳にしっかりと伝わっていった。

１５話（Ｗｈｅａｔｆｉｅｌｄ）（前書き）

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ（Ｖｉｎｃｅｎｔ　ｖａｎ　Ｇｏｇｈ　１８５３～１８９０）

後期印象派の画家。オランダ生まれで晩年はフランスで活動。強烈な色彩と激情的な筆致の絵を描きフォーヴィスム（野獣派）に影響を与えた。代表作に「ひまわり」など多数。オランダのプロテスタントの牧師の息子で自身も信仰心が厚く、１８９０年７月オヴェールで銃自殺した。生前に売れた絵は１点だけだったとされるが、その頃には既に画家仲間から作品は知られるようになり、評価され始めた時期だった。傑作とも言われる「黒い鳥のいる麦畑」を描いた数週間後に自殺を図っていることからも、画家が極めて危機的な精神的状態にあったことが窺い知ることができる。彼の画家としての人生は、僅か１０年にしか過ぎない。３７歳没。

15話（Wheatfield）

アメリカ合衆国中東部インディアナ州、東部の郡であるランドルフ郡。人口3万足らずのこの土地にレンは来訪した。訪米してから、ミステリーサークルが現れたというだけで行先を決定し立ち寄ることにしただけだという。レンにとっては特に縁も所縁（ゆかり）もないこの土地で……彼は、土を踏む。

今、この地に赴いたのはレンただひとり。あとのメンバーやスタッフは此処にはいない。レンがひとりでこの地に訪れたことなど、知る由もないだろう。レン、彼の発作的な――『気まぐれ』な行動だったのだから。

麦畑が広がっていた。
6月も中頃、冬に蒔いた種は実を結び、金色の穂はしなやかに流れ整列して並びその生命を規則正しく輝かせる。揺らぐ穂の音色は風の音と同化し、協和音は奏でられて旋律はレンの全身に染み渡り心地よく、時をしばし忘れて酔いしれている。

（来てよかったな……）

自然の恩恵を受けていた。麦畑より向こう、目を細めて見える夕陽の彼方前方には、民家と……空の赤いグラデーションに溶け込むような壮麗な山脈。レンは見てとても満足だった。

「いい詞が書け……『描け』そうだ」
子どものように楽しげに、爛漫（らんまん）に笑いながら。己の気質など知り尽くしているのだろう、はしゃぎ踊りそうな衝動、そのままに、彼

は誰にも見られてないからと高くジャンプした。
無人と思わしき麦畑にひとり。愉快に寝転ぶ、在りのままのレン。解放されて、飛び込んだ麦のベッドは何処までも果てしなく広がっているためレンを縛りつけることはない。ああ自由だとレンは深く安らぎのため息をついた。体の中に溜めていた古きものは、全て吐き出されていくようだ。

――土臭(くさ)い匂いがするな。労働のにおいだ。

せっかく着てきたジョー・○ックの上等な黒Tシャツにプリントされたメッセージは、泥にまみれて薄汚れ消えかけている。『Ｖｉｎｃｅｎｔ　ｖａｎ　Ｇｏｇｈ　ｉｓ　ａｄｖｅｎｔ　ａｇａｉｎ.』――××××は再び降り立つ。
此処に銃があったなら。レン、彼の次の行動選択に狂いは生じなかっただろうか。かつて過ぎ行く絵画の巨匠――僅か１０年の活動期間で生涯を閉じた者の、身も心も圧迫された表現者としての生き様。レンには、とても他人ごとの様に思えはしなかった。

（人生はお飾りだろう？　……なあ？）

レンの閉じた両目からは涙が自然と流れてくる。これは、同じ表現者としての苦しみでもあり、生みの苦しみでもあり……。
（金も……世間も言葉も……目に見えるものは嘘ばかり……）

笑えない。

お金がなければ成り立たない、後世に残らない芸術というのは、一体何処へ消えるというのだろうか。存在を世間へ知らしめ光を浴びて、周りから聞こえ耳触れるのは称賛と敵意の風である。一方では神だ仏だ、素晴らしき価値ありきものよ、と謳い笑い転げ、一方

では何だ、くだらない何処がいいのかあんなものにと平気で唾を――吐くだろう？　表現者はそんな人生、そんな道を辿る。後に残そうとして理想を形に変えて去る。その作品とも言われた『形』がお金か言葉か、芸術か。そのお互いはお互いに、融け合うことはないだろう。お金、言葉、芸術……許し合えないのか、どうしても。許し合うには何が要る？　何を持ってくればいい？

レンの両目は見開いた。

身を素早く弾かれるようにして起こし、つられて土や埃はレンの衣服から舞い落ちた。金髪に近い色のついた頭の髪から落ちた滴は……誰にも見られてはいない。レンは確認するために、『声』でしっかりと指針を表した。

「愛が要る」

レンは胸前で十字を描き、宗教者の真似ごとをしてみせた。

「俺は神を信じてはいない。信じているのは……」

握り締めたこぶしに込めた力を熱く感じた。雄大な大地から授かった溢れ出るエネルギーを、また『言葉』に変えて。レンに脅えは潜伏してはいなかった。

「俺は俺だ。……Ｉｔ' ｓ　Ｙｏｕ」

それがあなたです。あなたはあなたなのです。

レンが自分に下した選択、判断、審判。他人を信じるより自分を信じよう、そのために孤独でいよう、どうか放っておいて欲しい。

『お飾り』にだまされないために、自分を護り殻に閉じこめ。

Ｅｖｅｎ　ｉｆ　Ｉ　ｇｏ　ｔｏ　ｗｈｅｒｅ，　Ｉ　ａｍ　ｌ

onely……
――僕は、ずっとひとり

レンは歌った。
世間は歌詞の意味など知らなくても平気と無恥で歌う。人生はお飾りなのだから……それでいい。けれど、ひとりで生きてはいかれない。ひとりで過ごすには限界があった。閉じこもった殻のなかはいつも不満と退屈だらけではち切れそうになる……破りたい、もうこれ以上我慢ができない……たすけて。たすけて、たすけて。そして求める、自由、解放、救いを、それから。

愛を。

……

I lose my way in the maze
迷路の中で迷う
Help me
助けてください
Give me love
僕に愛を
Give the hand of love of the god
神の、愛の手を

Was I wrong?
僕は間違っていたのでしょうか
I want light
光がほしいんです
Warm light

あたたかな光が
I want healing
癒しがほしいんです
Your hand
あなたの手が

With a smile
笑いかけてください
Without thinking
考えないでください
I do not want to think that you are telling a lie
あなたが嘘をついているとは思いたくはない
I became tired of worry
考えることに疲れたんです
Laugh quietly gently to me
そっと笑いかけてください

And, to another world
そして別の世界へ

……

……梅雨の真っ只なかに季節は変わろうとしている。
梅雨前線は沖縄から日本の上空を北上し、停滞する。連日の曇り空と雨、その影響に見舞われた地上では何処でも傘が必要で、水害のニュースはいつも絶えることがない。

胸元シャーリングのギンガムチェックブラウスに細身のナイトネイビー色パンツを履いた愛は、長くなった髪を暑苦しいからと、蝶をあしらったヘアクリップでトップに留めていた。休日に美容室に行ってこの長ったらしくなった髪をどうにかしてしまおうかと、考えている。

もうすっかり通い慣れた総合病院へ、今日という日も愛は休み惜しまず足を運んでいた。陣が意識を取り戻し生還してから一度、応急手術を施して、それが成功したとみてから数週間の経過だった。頼まれた本を市立図書館から借りてきて、それから陣は愛と交流を持つようになっていた。

陣が借りてきてほしいと頼んだ本は、愛にとっては退屈となってしまうもので。化学用語などが嫌というほど登場し、びっしりと端から端まで字が詰まった専門書だった。だが陣は愛の前では本を広げず、愛のことを聞いてきている。

「翻訳家めざしてるんだ？　……へえ、それはそれは。確か特別な資格はこれといって要らなかったと思うけど、技能認定試験みたいなのがなかったっけ。とっとく方が有利なんじゃないのか」

陣は眠いのか、ベッドにいる自分の上に置いていた簡易台に頬杖をついて、目を閉じて言っていた。

「そうね……勤めの面接の時なんかに、実力の目安になると思う。試験があるのは英語と中国語なんだけど、まずは英語かな……」

少し元気はなかった。自信がない、と言っているかのような顔をする。実際、外国人との交流をする機会を大学などで数回と得てはいたが、愛が満足できるようなものでは到底なかったのだった。自信のなさは始めから徐々に示されていくようで、愛はもういっそ何

もかもをやめてしまおうかと諦めかけている。そうは言ってもやはり前向きだった愛は、諦めないでやり過ごしてはいるのだが。
「失敗ばかりなんだ……思うように発音もできないし、会話しても相手を困らせちゃうみたいで……自分が嫌んなる、ほんと……」
肩を落とし、膝元で組んだ指を使って遊んでいた。行き場を失くした視線が、陣の言葉で上を向く。

「やめたら終わりだぜ」
目は開いていた。
「それで納得すると思うか？　するなら、やめればいいけど」
表情もなく厳しい口調の陣に、愛は珍しく頭のなかにカチンと弾(はじ)く衝撃で音が響ききた。

「あなたに……」

つい漏れてしまった声は、止まらなく続いてしまう。
「あなた『たち』に。何が！　……分かるっていうの」
陣だけのことを指している訳ではなかった。前も今も右も左も追い詰められてばかりの愛の脳裏に、事故で壊れた携帯電話やＣＤ、そして……事故以来、連絡がひとつですらないレンの憎らしい姿が思い浮かぶ。……

窓の外では雨が、音を静かにシトシトと……木の葉を揺らし止む気配を見せず、どんよりと薄暗い雲が太陽の光を遮り、それは人の活力の妨げにも――なっていた。

16話（言葉）

世界に共通する通じる言語が、ただひとつだったらよかったのに。ひとつの言語だけを覚えておいて、それで。それだけで。ねえ？それなら、解りあえるでしょう？　言いたいことが伝わらなくて、相手を困らせることにはあんまりならないでしょう？

英語、日本語、中国語、韓国語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ポルトガル語……まだまだある。もう、うんざり。読み切れそうにもない分厚めな本がバサバサと数冊、数十冊と、大げさな音をさせて天井から降ってくる。バサバサ、ばさ。頭が痛い。

もう嫌。たすけて。

言葉の渦から抜け出したい。誰か、手をのばして下さい、その手を捕まえて逃げ出せるように、……誰か。

アナザーワールドに連れて行ってよ……

レン。

……

愛は眠りから目を覚ました。

自分が住んでいるマンションに昨夜は帰宅するやいなや、ベッドで、服を着たまま転がって睡眠をとってしまったようだった。お酒を少し飲んでからの帰宅だったのを覚えていた。

「♪あい、るーず、まいうぇい……いん・ざ……」

口にすさむ歌は。

「迷路（メイズ）……」

レンが作った歌である。何度も聴いて、覚えてしまっていた。一度はアルバムのＣＤやＤＶＤを事故で無残に破砕してしまったものの、買い直してきて今は手元にあった。一度開封してからは愛のお気に入りとして、いつもいつでも何処でも歌を身近に感じたいからと携帯に取り込んでおいたり自宅のプレーヤーにはＣＤを入れっぱなしにしてあったりと、常にそばに置いていたという。

アルバムのなかの数曲のうち、これだけが――この歌だけが愛の気を強く惹いていた。歌のタイトルは、――『Ｍａｚｅ（迷路）』。訳してみると、愛はまたレンが底知れず思い悩み、臆病になっているのではないかと疑うような、ため息の出る歌詞だった。

『迷路の中で迷う
助けてください
僕に愛を
神の、愛の手を』

今の愛と同じような心境で歌っているのではないだろうかと……そう思えば、愛の口元が僅かにほころんできていた。歌を作ろうと歌詞を考えて四苦八苦しているレンのさまを想像で浮かべてしまっていた。「神の愛の手、って。……レンってば……」まるでイエスか宗教者みたいじゃないの、と笑いは苦く酸っぱくなっていった。

ベッドの上での愛は、想像力が増していきそうで、なかなか起き出すのも億劫らしい。もし自分が寝ている傍らに寝息を立てたレンがいてくれたらと思うと……愛は、幸せになる。だがそれも所詮は夢のように儚いだけで実際にあるのはシーツの上の冷たい温もりだった。自分の体温以外、何の熱さも感じなかった。とても悔しくて堪らない。……

ピロリロリ……

ベッドより離れて、寝室のドア付近に置かれていた鞄から着信音が聞こえてきた。設定されたままの味気ない携帯電話のメール着信音である。愛は誰だろう、と仕方なく身を起こし、鞄から携帯を取り出し開いてみた。待受けで送信者はひと目で分かり、大学の友人からだった。

「『愛、いい？』って。……何が？」

表題を読み、疑問に思った。だがメールの本文を見て謎は解ける。

『今、愛のマンションに来てるの』

「ええ？」

それを見た途端、急いで愛は窓へと寄った。外を見下げて、マンションの前を通りがかる人を順に見ていってみる。時間をかけることはなく、すぐに肝心の友人の姿は発見できた。「やほー」

どうやら愛を待っていたようで、愛の方へと陽気にピースサインを送っていたその友人。

「今行くから開けてー」

言うことを言って、友人はマンションの建物のなかに入ってしまっていった。愛は焦って、友人が上階まで昇って来る前にと部屋のなかを片付けに走る……まずは普段着のＴシャツに着替えて、放り投げ出されていた衣服や本、筆記用具、ＣＤ、食べかけのお菓子などを見えない所へと押し込んだり隠していった。適当ではあるが何とか人様から見てセーフラインだろうというくらいに片付けた後、インターホンが鳴った。「はーい、出るからあー」

髪はボサボサと乱れたままだったが、そこまで気が回らなかった。

大学での一番親しい友人、玉置杏奈（たまき あんな）。首筋までのふんわりとした髪はとても自然的で、ピアスをよくしているのが似合っている。今日は小さなピンクの薔薇の形をしたピアスをしていた。クルリと巻いたまつ毛のカールも、大きめな目にはよく合っている。愛とは同い年の彼女だが、在学している傍ら出版業に自ら飛び込み、あくまでもまだバイト扱いと感覚だが、将来は此処で身を置きたいからと懸命に働いていた。そんな勉学と努めで忙しい彼女が一体何の用かと、来るなり愛は即座にそれを聞いていた。

「愛、詩か何か、書いてみない？」

杏奈はリビングのソファに先に腰かけていて、台の向こうでお茶の用意をしている愛にそう話を切り出してきていた。「詩……？」

いきなりの誘いで、カップのなかのコーヒーをかき回していた手が止まってしまう。湯気の立つ２つのマグカップを片手ずつに持ちながら、愛は杏奈の向かい側に正座した。

「今度ライターで、モニター募集してるんだ。共同でね、いちページ８００文字程度で作品を集めて、詩集を作ろうかっていう試み。愛、どう？　文章とか、書いてみないかな！」

明るく朗らかに杏奈は愛を誘った。「詩かあ……」愛は考え込んで、腕を組んで悩みに入った。

「詩じゃなくてもＯＫなの。書けるならね。何でもいいんだぁ」

これまでに、愛は詩や、日記を書いてきたことはある。だがそれは到底大っぴらげに公開できるほどいいものでもない、むしろ恥を晒すことになるだろう。愛はとんでもないことだと慌てて首を振っていた。

「どうしたの、何か不味った？」「ううん、何でもない、違うのよ！」「そう？」

不思議がる杏奈を尻目に、愛はうーん、と難しく顔をつくる。急に言われて、すぐに決断ができる訳ではなかった。

「それじゃあさ、考えておいて？　今日はいいからさ！」

それだけを言って杏奈はコーヒーを飲んでしまうと、帰ってしまった。残された愛は寝室へと戻り、ベッドに突っ伏して考える。自分が書く、文章のことを……。

「世に読まれるのかあ……大変」

自分には恥ずかしさが勝って無理なのではないかと危惧してしまっていた。そんな心配をしている内にうとうとと……眠りに誘われ愛はまた想像のぬる湯へ飛び込もうと、まぶたを音もなく閉じていく……。

……レンがいる世界、アナザーワールドへと――

……

Ｏｐｅｎ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋ
本を開いてごらんなよ
Ｏｎｌｙ　ｔｈｅ　ｌｉｅ　ｉｓ　ｂｅｉｎｇ　ａｌｍｏｓｔ
ｗｒｉｔｔｅｎ
嘘ばっかり書いてやがるから
Ｉｔ　ｉｓ　ｎｏｔ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｏ　ｓｅｅ　ｔｈｒｏｕｇｈ
見えやしない

……

辞書も本。人が書いたもの。価値観、基準、ルールは個々に違うだろう。何故信用する？　世界がひとつだと誰が決めた？

自分が決めた。地球は丸くて、自転して公転してそれで。宇宙には星が、散りばめられているよ……本当に？　ではどれが嘘なんだろう、見えないから解らない――見えないものを見るにはどうしたらいいと、尋ねてみれば答えは何かが返ってくるものだった。

想像力ですよ、と……愛は答えに辿り着く。

レンが伝えたかったことを、ひとつでも理解できたようで嬉しかった。

17話（帰国）

愛は小さなテーブルの上のノート前で、ひとりシャープペンを右手で握り締めウンウンと唸っていた――先日に、考えておいてと言われた文書にチャレンジしていたのだった。

「もー、……ダメ……」

冷たいガラステーブルに体の筋肉を伸ばして突っ伏す……これが限界とばかりに正座に組んでいた足を崩し、楽な姿勢をとった。「私には無理」……と泣き言をつい、漏らしてしまう。そうして今度は頭髪の毛をわしゃわしゃと数分間掻きむしり、とうとう悲鳴を上げた。「ああん、もお！」

友人に頼まれて書いてはみるが、どうにも上手く書くことが出来ず、四苦八苦して書き切ってはみたものの最初から読み返すと顔から火が出るほど恥ずかしく。とても人前に披露可能な代物ではないと……ついにペンは投げられた。「もう知らない！」

躍起になって、書かれた紙は至極ぞんざいに丸められ、ゴミ箱にポイと軽く投げられた。愛は時間で区切りをつけて諦めた後、気分直しに飲み物をと台所へ立ち上がって向かって行った。淹れたコーヒーの香りが周囲に広がり漂う……愛はリモコンでテレビの電源をつけた。テレビでは夕方までに入ってきた全国各地のニュースを流していた。地方自治の報道へと切り替わり、中継での記者は外が雨で傘をさして報道をしていた。

『あなたに逢いたい。

あなたに逢えるなら、死んでもいい。これっておかしい？』　……

愛の頭から噴火したかと思われたほど、全身が激しく熱くなってきている。失敗だ、と愛は思った。もうすでに書いた紙はゴミ箱のなかのブラックホールへと吸い込まれている。愛はレンを真似て自分の心情を、言葉という記号を用いて綴ってみた。だが、冷静になって読んでみると一体誰に向けて読んでほしいのかと誰かに聞きたくなってくる。レンにではない、レンに聞かれてしまったなら、それはきっと――焦る。

レンに自分の気持ちを知ってもらいたいけれど、でもやっぱり知られるのは嫌。どっちなの、と愛はまた頭の毛を掻きむしる。「……お風呂入ろ」

また気分を変えようと、バスタオルと着替えを持って脱衣所に向かった。

愛が去ってしまった後、テレビの報道は一般から芸能へと話題は移り変わっていった……有名役者の結婚や、タレントの番組内での失言など……真実よりも大げさな文句は飾り立てられ脚光を浴びる。そのなかでレンが――バンド、『ＳＡＫＵＲＡ』と関係者がアメリカから帰国した、と騒ぎ立てられていた。

残念ながら報道は愛の目に触れられてはいない。

湯気の揚がる浴室で、愛は熱めのシャワーを頭の上から浴びながら、何度目かの後悔を思い出していた。自分が陣に投げてしまった言葉とやりとりの数々を……悔いていた。

（あの人が悪い訳じゃないわ……私が、しっかりしてないだけよ。……しっかりしなきゃ。レンみたいに、前に向って進まなきゃ……）

『～しなければいけない』を繰り返し、愛は無理をしていた。愛は

自分に戒めて厳しく、頬を叩いて目を瞬(しばた)く。体を滑り落ちていく、足元に達したシャワーの湯は排水溝まで流れ流れて見えなくなり消えていった。

……

数日後。特に身には何の問題も表れず、陣の入院生活も平穏無事に過ごしていっているという昼下がり。問題は、突如予告もなくやってくるものだった。

愛は過日、感情を出してしまった気恥ずかしさも去ることながら、気を取り直して陣のいる病室へと向かっている。手には、筆記用具やCDと、財布や携帯電話などの小物が入った手提げの鞄を持っていた。五月晴れの今日は、外に出るには気分が爽快でよく、じめじめとした梅雨ももうそろそろ終わりに近づくかと思われていた。ちなみに五月晴れとは言っても5月ではない、本来、梅雨の雨続きのさなかでの晴れ間のことを五月晴れと言う。今は6月も終わりかけに入っていた。

病室に着く前に、廊下で愛はふと足を止める。

数メートル目先に陣がいる病室が待っているのだが、手を離すと自然にゆっくりと閉まってくれる大きめな病室の引き戸から、見たことのない老夫婦が出てきたのだった。老夫婦、とはいっても近づいていってみれば歳はそう、５０代位といった所だろうか。老けて見えたのは、女性男性の双方とも白髪が目立って混じり、陰背負う暗さを持つというよりは真面目そうで怖い顔つきをしているせいだろうからと思われた。

愛と廊下ですれ違った後、受付玄関のある下の階へとエレベータ

に乗り込んで行った。愛はその光景をしばらく見守っていた後……陣の病室を訪れた。

「どうぞ」

ノックをすると返事がなかから返ってくる。愛がドアを開けて入るが、陣の表情に動きはなく、来る愛を目で追って見ていて……半身を、ベッドごと起こしたまま静かにしていた。

「この間はごめんなさい。失礼なことを言ってしまって。……反省してる」

失礼なこと――『あなたたちに何が分かるっていうの』。自分の言い草の方が一方的だったと愛は思った。普段の陣の口や態度が、あまり誉れたものではないということは理解できていたはずなのに――愛は自分が情けなかった。

ところが陣は、「ああ、別に」と平然とした態度をとっていた。

「そんなことより……」

話を切り替えていた。途端に難しい顔が益々曇りを増したようで、まぶたを薄く閉じかけていた。「何があったの？　さっき出ていったのはどなた？　……まさか」愛は、自分で言いながら可能性のひとつを見つけてしまう。自然と出た可能性とは……。

「あれが俺の親」

沈黙が寸秒、2人に襲いかかる。振り払って、愛はごくりと唾を飲み込んでいた。陣の表情が険しく、事態の重さを物語っている。それは陣にぶつけられた障壁でもあった。

老夫婦に見えた陣の父親と母親――病院からの何度目かの連絡を

受け、怒りの治まっていなかった父、祖父の両者は毛頭来る気などなかったという。旅館でもある経営の方をそう簡単に休業することも出来ず、放っておけ馬鹿がとさえ言い放っていたらしい。それでもやはり心配した母親は、熱心にも父だけでもせめてと説得し、それは成功したようで、2人は旅館を従業員や祖父に任せ遠方となる病院へと赴いてきたということだった。来てすぐ病院側から事情の説明を受けた後、事故を起こした相手側、即ち暴走してきた車の持ち主側と示談交渉を行い、話をつけた……それはそれで決着がついたようで、愛については元々被害者でもあるので負担などは一切発生しなかった。

そのことは陣にとっては重要ではない。此処からだった。

遠路はるばると来た両親は、またすぐに帰らねばならなかった。また来ると……だがそう何度も往復し続けるのも骨が折れるからと、陣に病院の転移を申し出たのである。医者の話では、今後様子をみて安定しているようなら構いませんがという返答だった。田舎の病院へ移った方がのんびりとして、残っている麻痺のリハビリができていいのではないでしょうかという意見もあった。陣は、……複雑な心境でことを聞き流していた。

田舎へ移るということは、今もだが、大学とは完全に隔離されていく……一度決めて思い発って行動してきたというのに、完全に挫(くじ)かれた、その思いがまだ強く陣を捕えていた。悔しさ、腹立たしさ、許せない……誰に、何にか。

「ちくしょう……」

漠然とした夢だっただろう。でもやっと見つけた自分のしたいこと、方向。両親たちの反対を無視して決めてきた、自分の選んだ道

を、今に断たれようとしているのか――事故、――怪我のせいで。

一体誰を恨めばいいというのか。陣は行き場のない怒りと悲しみで、つい声を漏らしてしまっていた。「こんな体で……」固く握りしめられたこぶしは震え、目尻から薄く水が滲み出る。よほどの悔しさは、いつも静かで冷ややかな陣を激しく動揺させていた。だが、それ以上に動揺させたのが……愛の涙だった。

気がつけば、愛が泣いていた。陣は自分のことで思いは忙しく、愛のことを全く考えてはいなかったのだった。顔を手で伏せて押さえようとしているが、指と指の隙間から滴が垂れてきている。言葉はなく、嗚咽を吐き漏らさないよう懸命になかに耐えていた。

「ごめん……俺のせいで……」

愛に返事はない。空は雲がせっかくの青空を隠すようにまた、雨を寂寞（せきばく）に呼んでいた。

……

苦しい。

此処から、抜け出したい、此処から、変わりたい。

状況を変えたい、自分を変えたい、変える、改革するには、……どうしたらいいのだろう？

仕方を教えて神様……レン。

……

愛が願えば願うほど、困難がやって来るということに愛は少しずつだが……気がつき始めていた。

そうやってくたびれた愛は重い足をひきずるように帰宅する。だがその前に、来客がいた。

折りたたみの傘を閉じてマンションへ着いた後、階をエレベータで上がると……愛の部屋の、玄関のドア前で誰かが待っていた。頭が垂れて顔は俯き見えなかったが、ドアにもたれて座り込み両膝を立てていた。だらりと姿勢は楽にして、人が来るのを感じ取ると少しだが反応を示し体を動かしていた。おかげで顔色が僅かに窺える。金茶に近い髪が揺れていた。

「レン……」

18話（Ｂｅｌｌｅ）

Ｂｅｌｌｅ――『ベル』。それは、美しいことを女性で意図し表していた。歌詞を書いたレンも、訳をした愛も『ベル』を“夢”、もしくは“夢の向こうの住人”だと……言っている。レンはライブではよく、間奏などでベルのことを少し違えて歌っていた。Ｂｅｌｌｅだけでなく――

Ｂｅｌｌｅ　Ｍａｌｉｓｓｉｍａ　……

――恐らくは、夢の向こうの住人を『非常に（最高に）美しい』女性的に比喩した言い方であり、これ以上に美しいものは存在しえないと言いたかったのだろう、愛はそう思っていた。

Ｂｅｌｌｅ　Ｍａｌｉｓｓｉｍａ、Ｂｅｌｌｅ　Ｍａｌｉｓｓｉｍａ　Ｍａｌｉｓｓｉｍａ、……

それは残響音となっていつまでも頭のなかに残り、これは福音だと耳受け入れた者は必ずと浸透し切り、我、是非にとまた感、揺れ動かされて喜ぶのだろう……レンの声によって、だった。そして誰も疑い知ることがない、夢は、『きれい』……なのだから、と……。

「レン！」

幸いなことに、愛の叫びはマンション前で鳴った車のクラクションにかき消されてしまっていた。大衆の音楽界という枠のなかでは名を知りすぎられているレンを呼ぶことは、暗中で禁止されていることのように思われた。ファンにでも目撃されれば愛もろとも今後の無事が危ういだろう、まさか命とられるとまではいかなくとも、

である。

愛に周囲を気にする余裕はまるでなく、急いでレンの元へと駆け寄った。玄関のドアの前で腰落ち着けて座り、項垂(うなだ)れていたレンは愛がそばに寄っても顔を上げなかった。魂が抜けて何処かへといってしまったのか、地の一点を見つめている。明らかに生気がない彼の姿に、愛はどうしたらいいのと困り果てた。

「レン……しっかりして！　私よ、愛よ。分かる？」

心配そうに愛が呼びかけてみても、あまり反応してはくれなかった。愛は仕方なく、レンを部屋に連れて行こうと考える。「立って……今、鍵を開けるから……」言った通りに愛は玄関の鍵を開け、レンをどうにか押しのけてドアを開けると。レンは音もなく立ち上がっていた。

「疲れてるの？　……なかで休んだらいいから……」

レンの身を心から気遣い、愛はそう声をかけた後。自分の肩にレンの手を回して、歩くのに力を貸してあげていた。至近距離で見たレンの顔色は悪く、愛の心中はハラハラと落ち着かないでいた。熱はなさそうだが体温は少し低めだなと肌に触れて感じていた愛は、レンの身に何が起こったんだろうかと気が気ではなかった。もしや……私に会えなくて？　とも愛は自惚れてしまいそうになったが、すぐにそれをかき消していた。

レンの体が重い。男なのだから当然のこと、華奢(きゃしゃ)な女の体には相当の大荷物にも感じられた。愛は重くもそれに耐え、どうにか自分の寝室か、せめて手前にあるソファまでは行き着けねばと頑張った。玄関に鞄や傘、靴などを放り投げて、ソファの付近に来た所でもうひと踏ん張りと先に進んで行く……向かうは愛の寝室だった。ドアノブを捻らずともドアは勝手になかへと開いてくれたようで、スム

ーズに部屋へと入ることができた2人だった。

ベランダの窓外は日が落ちて暗くなる頃で、照明の光がとても欲しかった。まだ残る薄明かりが救いで、影の動きが壁に見える。折り重なっていた2人の吐息が聞こえていた。

（服が濡れてる……脱がさなくちゃ……）

ベッドへと倒れ込む前に、愛は肩からレンの手を外そうとしていた。だが、愛にとって思ってもみないことが起こってしまう……愛の体が宙に浮いたのだった。

（え！？）

浮いた、というより、強い力に引っ張られていたのだった。そのせいでベッドへと放り投げられた感覚に陥ったといえよう、抵抗する暇も隙もなく、愛はひとりでベッドにお先にと倒れ込んでいた。そんな拍子のいきなりの暴力、乱暴な絶対的力に愛は茫然としていて、思い出したようにそれからレンをひと睨みする。「ちょ……」

何するの、という反論はしかし続かず、レンは愛に襲いかかってきていた。「や……」仰向けで、背を白いシーツの上には着けず反り返る格好の髪乱れていた愛の上に、レンは急ぎ勢いで覆い被さってくる、その速さに構え間に合わずに負けてしまって愛は受け入れ、シーツの地に体を柔らかく着地させてしまっていた。きつく上から両腕を押さえつけられ、愛は強引にキスを迫られ、雨に濡れていたレンの衣服のせいで、着ていたオフホワイトのキャミワンピースは徐々に濡れていった。上に着ていたギャザー・フリルのクレリックブラウスは、すでに脱がされて地面へ他の物と一体に雑然と落ちている。無垢のワンピースも、曲線のラインに沿って総体から脱がさ

れて……

「レ……ん……」

下腹部から滑り上がるレンの指先に、思わず愛の背筋が反り上がって声が喘ぎ漏れていた。首筋にかかるレンの香りと息が、愛の視界を薄らせていき熱を生んで、また濃厚なキスをする。

「愛……」

やっと口を利いたレンから出たのは愛の名前だった。耳元での囁きは、愛にとっては嬉しかった。「きて……」

レンの肩にするりと手を伸ばし回して包み込んで、片時も離したくないからと請うてしっかりとレンの大きな体を引き寄せて抱いていた愛……2人の時間は互いに共有し合い、重なり合い、そして……過酷にもそれは短い、夢の如きに儚く刹那のようのこととなってしまうと分かっていたのだとしても……愛は、触れ温まったレンの体温を忘れたくないと、祈っていた。

激しい夜を過ごす。レンは愛を離してはくれなかった。一晩中、レンは愛を抱いていて、空が白くとなりかけた頃に2人はベッドの上で寄り添うように眠りに大人しくついていた。

愛が至福にまどろんで、目を開けてみた時に……脳裏に浮かんだ、ついレンに聞いてみたかったことを口にした。

「どうして……レンは歌を歌おうと思ったの……？」

どうせレンは眠っていて聞いてはいないだろうと、調子にものっ

て聞いていた。だからレンから答えが返ってきた時にかなり驚いてしまった愛だが、レンの答えは意味ありげでも全ては伝わりそうではなかった。寝言のような、レンの呟きである。

「導かれた……」

……

話は、数年もの前に遡る。今レンは眠りながら昔を思い出していた。

レンが学生の時分のことである。母の実家があるアメリカの田舎にいた彼は、男と運命的な出会いをすることになった。その男が後に、彼を拾い、成長させていくことになったのだ。

三富龍平、『M・A・D・E』の創始者だった。彼もまた、運命的だったと転機を懐かしく、朧げに思い出すことだろう、龍平は、レンの若い才能に理想を見、彼となら成功できるに違いないと根拠のない自信や確信を手に入れたのだった――そのことに今なら感謝を覚えるとまで言ってしまう龍平は、レン、彼を夕刻の晴天時にその地の麦畑にまで散歩に誘い、スカウトする前に尋ねてみたのだという。

「君の瞳(め)には、何が映る……？」

麦の金草原を前方にして、龍平はまだ少年だったレンにシンプルかつ大胆な難題を投げかけていた。幼いレンは最初に黙って小さな頭で考えて、大きなことを言ったのだという。

「俺だけの星」

……聞いた龍平は、あまりにもあっさりとした答えを出したレンに、福神めいて親しみを込めた顔をしてしまう。「そうか」龍平は、大きな口で大笑いをした。見渡す限りの大自然を前に、大人と少年は夢を語る――龍平は、レンの頭の髪をぐしゃぐしゃと掻き混ぜて決意を示していた。

「ようし」

それから、レンは連れて行かれてしまう。両脇に金色輝く麦の穂道を辿って、『ベル』の元へ。

――光の方へ。

19話（通過点）

レンが日本に来てから数年。ボイストレーニングやレッスンを日常的に受けこなし、着実に力をつけていったレン、彼は、三富龍平の許可のもと、路上ライブを行うようになった。それはレンが初めて自分からしたいと言い出した具体的なことで、龍平は最初とても驚いていたが、次第に落ち着いて喜びが増していった。

いつも何処か遠くを見ていて、いつかふっと攫（さら）われて消えるようにいなくなってしまうのではないかと思われていた彼が自発的な行動に出るということになると。無論、周囲はそれに伴って『変化』をしていく――元々にあった才能は、満を持して開花するに至る……。

彼は突如『化けた』のか？　違うだろう。
彼は人前に出た、それだけだった。
道はある、それを辿ればいいだけ、無ければ、つくるだけ。
例え今それが見つからなくても。

「今、俺が此処にいるのは……愛のおかげだ」

レンのしっかりとした腕のなかで、愛は心地の良い寝息を立てて眠りについていた。夢と、そうでない間の堺をさ迷いながら、愛は、答えのようで答えではない返事を頭のなかで繰り返していた。寝惚けて、こんな風に。

ああ何だ……そういうこと。夢は、ひとつなのね。ひとつだった

のね。
そこに行くまでが……道なのね。
……
すっかり体温に馴染んだベッドの温もりのなかで、愛が眠りから目を覚ますと、隣で寝ていると思い込んでいたレンの姿は何処にもなかった。「レン……？」裸のままの愛が上半身を起こして部屋のなかを隅々まで見渡してみても、幻さえ浮かばなかった。
レンはいない。……行ってしまった。
閉められていた遮光カーテンの隙間から朝日が漏れている、視界は段々と開けていった。やがて目が薄明かりに慣れてきた頃、愛は、もぞもぞと身をベッドから脱出させて、冷えていた床に降り立った。頭のなかが冴え渡っている。
（起きたよ……レン……）
あんなにしっかりと抱かれていたのに、自分も、離されてしまわないように一生懸命に彼を掴んでいたというのに……愛は手軽なシャツを着て下着を履きながら、冷静になってから、……残された自分の体を抱き締めていた。
（此処にはもう、いないのよ……）
戒めにも似て自分にきつく言い聞かせていた。そうやって、懲りずにいつもの我慢をするのだと……理性を拾い上げていた。服を着た愛は寝室を出て、湯でも沸かそうとキッチンに向かい、リビングのなかを通りすぎようとした――その時だった。
書き置いた覚えのないメモ用紙が目にとまる。「……？」

テーブルの上にボールペンと一緒に置かれていたそれは、非常に存在感を持っていた。誰に問うまでもなく、愛の物ではないと分かっているならば仕掛けたのはレンでしか有り得ない。愛がメモを取り上げると、下に敷かれていた長細い紙が顔を出していた。「これは……」

長細い紙とは、チケットだった。大きなヴィヴァルディ体のフォントで、『ＳＵＫＵＲＡ　ＬＩＶＥ～ＤＲＥＡＭＦＡＣＴＯＲＹ～』と書かれている、夏に行われる野外ライブの――特別招待券だった。チケットの意味する所はすぐに解る。愛を招いているのだ……『このライブに来て下さい』。愛は、当たり前よ必ず行くわと思いながら口をキュッとつぐんでいた。

チケットに目を通した後は、メモの内容へと移る。愛はレンの直筆で書かれた文章を追っていった……若干の、肩上がりの英語筆記体にも見え得る癖のある字で……綴られている。

『愛。
“Ｃａｎｄｙ”の歌、覚えているか？　忘れているなら、思い出してほしい。

ずっと一緒にいる事が愛じゃないと思うんだ。同じ場所に住む必要はないと思うんだ。
俺は愛のそばにはいないけど、それっておかしいんだろうか？
間違ってるんだろうか？　歌が届いてほしい。
歌が、愛のそばにいてほしい。片時も離れずに。

あまり言葉を使いたくはない。嘘ばかりつくから。

ライブで待ってる。――レン』

……

愛は衝撃にしばらくうち震えていた。メモを持つ手も、小刻みに震えて止まらなかった。口唇を噛み締め、少しだけの涙を浮かべて、愛は自分を納得させようと抗っていた。一体何に抵抗しているのか？　――レンの文章を反芻（すう）する。

『同じ場所に住む必要はないと思うんだ』

歌があるから……？

愛は、レンから出された言葉を手掛かりに、レンの気持ちを探りたかった。でも、どうしても今だけは……愛の心に醜い軋（きし）みが生じてしまったようで、感情が流れてきて本人にはどうのしようもない。愛は構わず思うままに吐き出した。

「勝手なことばっかり……」

声も震えていた。

「私は寂しくて死にそうなのに……」

ライブチケットとメモを握り締めて。

「夢ばっかり追いかけて……夢って何よ？　レンの夢って何？　ベルって何？」

分からない。

愛は翻訳家になることが夢、しかしそれがゴールではなく、ただの通過点だった。レンは歌手になった。歌手の夢叶った先は……何なのか。

その答えは、ライブにある。

愛にはそう思え、それが唯一の光にも見えて……震えは止まってくれていた。

（レン……愛してる）

キャンディという姿形は失くしても、言葉という飾りで嘘をついても。Ｅａｓｙ Ｃｏｍｅ……すぐに手に入れられるものは、すぐ離れていく。ならば、すぐに手に入らないものは、……きっと。

きっと死んでからも、残っている。

……

陣の病室に訪れた愛は明るかった。手には道中で買ってきた、ひと口シュークリームの入った箱を持ち、いつも持ち歩いている鞄には携帯電話や財布の他に筆記用具とノート、『ＳＡＫＵＲＡ』のＣＤが入っている。

「こんにちは……大丈夫？」

個室のベッドで変わらず難しそうな本を読んでいた陣は、愛が来ると本を閉じ顔を上げて迎え入れた。「いいけど」素っ気ない返事も相変わらずだった。だが今日は、眼鏡をかけている。「どうしたの、眼鏡」壊れていたはずの眼鏡が直っていたことに愛はびっくりしていた。

「母親が買い直してきてくれた。昨日、眼科で検査を受けて、同じよーなやつ選んできてくれて。おかげでくっきりと視界がクリアになったわけだけど」

眼鏡で隠れた目頭を指で押さえて、調子を整えていた。眼鏡をか

けずに過ごした数日から慣れるまで、少し時間を要するらしかった。
「気分が悪くなったらすぐに言ってね……あんまり我慢しないで」
様子を窺いながら愛は言葉をかけていた。陣の口から自然と「ありがとう」と出ていた。

『ありがとう』……愛は心中、珍しいものにでも触れたようで、思わず笑いがこぼれてしまった。「何が可笑しい？」それを見つけた陣は、ムッとして不愉快を表している。「ごめんごめん……まさかお礼を言われるなんてさ」

言われた陣は、自分でも「……そうだな？」と意外そうにしていた。それもまた可笑しく、愛は吹き出しそうになるのを堪えていた。
「……そんなに笑うことかよ。変な女」
不快は止まず、陣はシュークリームの入った箱を愛からぶんどった。

先日に会った時のことが嘘のように、場が和やかに包まれていっていた。陣は、愛を自分のせいで泣かせてしまったことに対して自責の念にかられたのだろう、責任感の強さもあってか彼は無視できなかったのだった。

陣は愛に感謝していた。出会えたことに、会い続けていられることに。それから。
「ん？　何？」
愛は箱からシュークリームを取り出しながら、陣の視線が気になっていた。「いや……」
返答に詰まりながらも、陣の視線は逸らさない。愛は何だろうと思いながらも、陣からシュークリームを受け取って、自分のものにかぶりついた。「おいしい！」
今日の愛は本当に元気だった。憑き物が落ちたようで、爽快感に

満ち足りていた。そういえば、と陣は愛の身に着けているものに注目する。デニムでネイビー系のレギンス風パンツ、フードの付いたワンピース風のコーラルピンクチュニック姿。メイクは流行りの、4色のシルバーブルーのグラデーションできめていた。首元に光る天然石の7連ネックレスが微かに輝いていた。

いつも割と地味な女だと思っていた陣はクリアな視界にもなったせいか、愛を違う目で見てしまいそうになった。大人の女性……そう脳裏によぎっただけで、意識が高まってきていた。

「来週なんだけど、語学サークルで交流会があるんだ。カナダやアメリカから先生が来るらしくて、頑張って話しかけてみようと思う……積極的にならなきゃ、始まらないよね。何ごとも！　ね！」

溌剌として大きくなった目で見つめられて陣は、正直、うろたえていた。だが愛は気がつかずにべらべらとおしゃべりになっていた。「今の流行色ってね……」または「今朝のニュースじゃ……」と。楽しげに笑いかけてくる愛に圧倒されて、陣は黙って頷いているだけだった。

陣にとって知らなかった愛がそこにいるように感じられた。此処に至るまで、悲しい表情の愛しか覚えがなかった。そして、いつもそうさせていたのは自分なのだと、後悔がいつも自分のなかにある。

戸惑っていた。

愛が「じゃ、そろそろ帰るね」と言い出した頃、時計はとうに夕方5時を過ぎていたことに全く気がついてはいなく。「あ、ああ。じゃ」と焦りで声が擦れている。

何の疑念も抱かず、愛は軽い足取りで部屋を出て行った。陣は最

後まで愛に目が離れずにいて……しばらく、誰もいなくなった部屋で愛のいた空気の余韻に浸っていた。やがて時間が経つにつれてそれは段々と薄まっていき、何処か冷えて掴み所のない寂しさが代わりに襲ってきていて――身が寒くなる。

（『エンジェ』……）

陣のなかにある閃きがあった。すぐに、そばの棚の引き出しから筆記用具と大学ノートを取り出した。ノートの紙面を何枚かパラパラとめくり、真っ白いページになった途端、素早くボールペンで陣は何ごとかを書き出していった。その書く勢いは無我夢中という四字熟語がぴったりと当てはまって、彼の集中力が止むことはなかった。『鏡の前のエンジェ』と表題のつけられた、以下が書いたそれである。

『こんにちは　ようこそ　鏡の前のエンジェたち
君はだれ、って問いかけてみる
君はだれ

僕の恋人？　そうだっけ
それが君の一面なんだね
ちっとも知らなかった

でも僕は
いつもの君がいい
言わないけれど
嬉しそうだから

今日も鏡の前で違う最先端流行の服を着て
違う君を見せようとした

落ち着かない
流されたくないんだ
君は君なのに

こんにちは　ようこそ　鏡の前のエンジェたち
君はだれ、って問いかけてみる
君はだれ

僕の恋人は違う子だよ
そんな君は知らない』……

……嘘と幻想を織り交ぜた詩が出来上がった。陣はペンを置くと、またもや余韻に浸るように背を布団の上に預けながら、愛のことを考えていた。まぶたを閉じていても、愛の姿は消えることがなく……陣は自分でもこれは何なんだろうかと悩んでいた。

陣が書いた『鏡の前のエンジェ』は閉じられて、元あった引き出しにと仕舞われていった。

20話（激昂）

毎日毎日とレンは非常に忙しい。筋肉、声、必要あればダンスのトレーニングがまずの日課である。そして健康管理にも気を遣わねばならず、風邪には細心の注意を払わねばならなかった。作詞、作曲をメンバーとともに手掛け、頭と感性も随時、働かせている。打ち合わせも国内国外問わず何十回と頻繁に行われていた。

新曲を出すたびにプロモーション用の撮影を行い、ＣＭや音楽トーク番組などに出演し――最も、レンはメンバーの出演回数に比べて時たまにしか、テレビや雑誌などのメディアの前で姿を晒すことはなかった……それはレンのたっての希望というより、メンバーや関わるスタッフからの、レンに対する計らいでもあったと言えよう。主力のレンが――孤高の彼――が、曲作りに徹底して専念できるように。誰にも邪魔をされないために。

レンは勿論、そのことなどとうに知っていて、言葉には出さないけれど素直に感謝していた。自分に出来ることは、ひとつでも曲を、歌を……世に生み出すことだと使命に持っている。

周囲の皆が望んでいる、レンの活躍を。何処にいてもいなくても。レンが生み出す芸術は、感動、時には衝動、感涙、懐古、安らぎをも、性別、年齢問わずに与えていた。英語を織り交ぜた日本語で新風を巻き起こすかのような独特の歌詞、深く情緒を感応させる感傷的で和歌めいた歌詞、ラップのように韻を踏みながらポップに仕上げた若い子世代向けの歌詞。ロック、ジャズ、静と動のバラードにも……重量感があり、透明で繊細な声質は以前から変わることは全くない。

「さすがだ」――音楽に関わる者は全員、必ず圧倒されてしまうという現象は、もう少し経てば令名を頂き、『社会現象』と呼ばれる日が近くやって来るのかもしれない。彼の聖域は広く、万人に向いていた。もはや、走り出した駆動は加速する一方でブレーキをかけ忘れている。

その代表が、世間である。

「お帰り下さーい！　どうぞお帰り下さーい！　通行の妨げになります、ちょっとそこ、どいてどいて！」
「危険ですので、お下がり下さーい！」
「本日、バンドメンバーはおりません！　お帰り下さあーい！」
ファンがスタジオの玄関口でギュウギュウ詰めにごった返すなか、警備員の総勢１０名ほどは大変な思いをしていた。ファンは人の言うことを全然聞かず、もしやメンバーのひとりでも何処かに潜み隠れているのでは、という淡い希望を懲りもせず絶えず抱いて、どんな可能性のあるどんな所へでも足を運び、待ち伏せようとしていた。
「レンがいるんじゃないのおー！？」
「レーン！」
「いつ出てくんのよおおおー」

カメラを持ったメディア関係者たちも多くそのなかに交じっている。
有難迷惑で、良い悪いといった限度の見境がない。困ったものだった。

そんな柄の悪い、うんざりするような報告を受けるのはもう慣れっこになっていたバンドメンバーやスタッフたちである。テレビや雑誌で注意を喚起したこともあった。だが、効果が多少なりともあ

ったのかは断然不明である。

大手全国テレビ局の一室を借りて、短時間予定の打ち合わせ会議が厳かに行われていた。レンを含めバンドのメインメンバーと、携わるスタッフ、それから、三富優平と秘書の二渡部理香がその場にいて討議していた。

いよいよ本ライブ期日が迫ってきていたさなか、神経質になる者、気合いを入れる者、変わりのない平常心の者など、心持ちは様々だった。だが、レンたちにとって重大な事実が明かされることになる。

花火の中止。それから、観客動員数と規模の縮小、進行の見直し――

花火の中止は、予定していた野外競技場の周辺住民の反対の声があったからだった。それに伴い、注文していた花火のキャンセル料は会社に膨大な損失を招く。それはそうとて、これだけ並外れて世間で大に騒がれていては、予定通りにチケット先行予約販売が開始した時点であらゆる渋滞、麻痺や、犯罪に関わってくる事態が容易に予想され、危惧されるだろうと言い出した者が続出した。一般的な具体例で言えば、ネットアクセス増加または集中による回線ストップ、過負荷。ダフ屋と言われる不正に取り引きする業者が必ずといっていいほど存在すること。販売されている映像のコピー、即ち海賊版は、今では常時当たり前のように闇で取り引きをされており、どれだけ規制という重圧をかけても企みの輩は企むのだろう、抑えることが不可である。

特別、『ＳＡＫＵＲＡ』に限ったことではないため、『容易に』予想されていた。

しかしレンが一番に憤慨したのは、花火の中止だった。

「今さらどういうことだ！」

ガシャン！　激しい金物音を立てて、簡易椅子を床に叩き殴るように倒していた。叫んだのはレン、ただひとりだけで、辺りは水を打ったようにシンと静まり返っていた。

「ふざけんな！　……ここまで来て！」

長机に、ぶらさげたままの両手を打ちつけている。自分の頭髪を全爪で斬り掻き肩をぶるぶるといわせ、焦げ焼き射抜きつかせる視線で見えない敵を線上で睨み、レンの眼は血走っていた。

幽霊にとり憑かれた者と同位ではないかと見えるほど、レンは荒れて狂っていた。「落ち着け、レン！」「そうだよ！　そんなに怒らないで……ライブが中止になったわけじゃない」

「取り乱すな、馬鹿が」

シメたのは、毒吐きでお馴染みのシークである。メンバー以外は黙ってことを見守る形をとっていた。「んだとぉ……？」

何度も何度も握り込んだこぶしを机の上に叩きつける。怒りは治まる所を与えられず、痛めつけられた手は青く染まり、これは尋常ではないと判断したセイが慌ててレンの手を押さえにかかっていた。

「やめろ！　手を使えなくするつもりか馬鹿やろう！」

すぐにジュンも同じく身を呈して止めていた。腕を組んでのシークは高見の見物、と決めこみ、愛用の煙草をシャツの胸元から取り出していた。

（何のためにここまで……）

最後、歯ぎしりでレンは会議室を素早く出て行く。「待て、レェェン！」

セイが呼んでいた。だが、レンの足が止まることはなく、空しく声はこだまするだけとなった……

（誰も俺の邪魔をするな……鬱陶しい）

会議室を出た後は、照明灯の照らす迷路のような長く分岐の多い廊下を、レンは乱雑に歩き続けて行った。階段を何階か下りていくと、騒がしい人声がしてきていることに関心が寄せられていった。それはまだ下へと繋がっている階段のもっと先向こうの……発信源は、1階の玄関先だということに気がついた。

（……何で騒いでる）

頭のなかが固まって重くなっていたレンだったが、歩みは止めなかった。すれ違う人のいない暗がりの非常用階段、段上をひたすらに下りて行き、騒音が近づいてくるにつれて歩の速度は緩み遅くなっていったわけではあるが、小さな好奇の心がレンの足を止めなかった。

ゆっくりと迫ってくるものに、目を触れた……。

21話（棲み潜む悪魔）

レンは沈黙していた。壁、手すり、窓、階段と、周囲の物質と同じに、存在だけがあるように呼吸さえも忘れていた。

目下遠くで雑音が聞こえた。人の肉声、重なり合った、烏合の衆の叫びの声がしていた。レンを助けるはずで内心に備わっていたはずの小うるさい危険信号が働かなかったことは、果たして誰を何処まで責められようか。

場はひとつの惨状となりつつあった。

「早くお帰り下さい！　此処にはバンドの誰も、いませんから！」

「さあ帰った帰った。此処にいても会えませんよ！」

予め配置されていた警備員数名は忙しく、何処かの工事現場から借りてきたのか用意がよろしいＬＥＤ合図灯を持っていて、それで外来のファンらしき人々に向けて振りまわし、追い払っているという始末だった。

「嘘でしょー、此処で撮影するって聞いてきたんだから。会わせてよ！」

「そうよそうだ、会わせなさいよぉ！」

若い女の子が数人で、早口に捲し立てていた。２０代後半くらいで、青地の制服を着ていた若い男の警備員は『しっしっ』と手でも追い払っている。「ざけんじゃねえよ、会わせろって言ったら会わせろよああ？」

汚い台詞が飛んできていた。状況は放っておくと激化していき、デッドヒートしている。

そんな光景を階段出口から目の当たりにしてしまったレンがいた。玄関までの距離はだいぶ開いてはいたものの、ファンや警備員の罵声や豪声は感受性高きレンへと直に深く刻み込まれ、突き刺さっていく……。

「レンに会えるまで帰らない！」「お帰り下さい、困ります！」「どうしても会わせねえってんなら、火ィつけたらあ！」

合わせてキャーという悲鳴も聞こえてきていた。乱闘が起こっているらしい、レンは聞くに堪えられず、足を止めて自分が見えないよう、壁に背を打ち当てて片手は額を押していた。「何てことだ……」

何でもいいから吐きたかった。胃からの嘔吐ではない、視覚、聴覚……五感以上の感覚から自分のなかに入ってきたものを、『吐き出し』たがっていた。だが一度取り込んでしまったものは消える気配を見せず、奥底に先着し滞留していた異物（それ）は、まるで薬の副作用のように思っていたものとは違う効果――別の感情を呼び起こす。

（俺の声でファンが死ぬんだぜ……）

棲み潜む悪魔。自分のなかの、臆病が首を長くして顔を出していた。下辺を蔑み、温かく湿った舌を出していた――レンの分身ではと、正体の可能性は想像の範疇（はんちゅう）でしかない。

『どいつもこいつも死ねばいいんだ。そして――俺も死ぬ。歌ってみろ？　今の心情を。きっと聴いた奴らは、屋上から飛び降りるんだぜ……俺が導く、導いたように……』

不可思議な世界だった。誰にも理解されない許し難い世界があっ

た。耳を、関心の塊を、そちらの方へと渡してしまいそうになって危険は危険を呼び、行ってしまうともう戻っては来られなくなるだろう……楽へと誘われていた。

だが、レンの手がふいに腹の辺りのシャツを掴んだ、そのおかげで突破口が開けていた。――ぐしゃり。聞き逃してしまいそうなビニールの小さな音を耳でレンは拾うことができた、それは、偶然にもシャツの胸ポケットにたったひとつだけ残されて入っていた、人づてからの贈り物の――

――キャンディである。

「愛……」

個装に包まれて、確かスタッフの誰かからもらっただけの、フルーツキャンディだった。頭を使うと糖分が要りますねと、からかわれたように感じて気恥ずかしくなったのを思い出していた。

（俺は歌うことでしか自分を表現できない――『臆病』め！）

人に笑いかけることも苦痛、人を追い込むのも苦痛、言葉を使うのも器用さからはほど遠く、人と同一には決してなりたくはない、共感もしたくはない。明らかに『孤立』するレンに、誰が理解を示すだろうか。――ひとり、いた。

『大丈夫。私はいつも、そばにいるよ……』

レンは最後のキャンディを、包みを開けてなかを取り出し、口のなかへと投げ入れていた。キャンディは甘く、舐めていると数分で溶けてなくなってしまった。後にまだキャンディの味が広がっては

いたが、そのうちになくなっていくのだろう、余韻に浸っていた。

（何だかんだで……周りから支えられてんだ、誰でも、俺も）

ゆらりと体が揺れた。向きを変えて、下っていた階段をレンは反対に上り始めていた。暗い表情は前髪に隠れて見えないが、会議室で痛めつけられて青く変貌していた手は隠さなかった。病魔に侵された患者を演じて、人気がないのを幸いに元来た道を戻って行った。

ゆっくりと思考力は戻ってくる。喜ばしく、冷静さを取り戻していっていた。

歩くのに疲れてレンは、非常階段から離れエレベータに乗り込もうと思い発った。気分が明るくなった、とまでは行かないが、くたびれたものから逸脱することができたと安心を手に入れ穏やかになりつつあった。しかし待ち立っていた所に来たエレベータの扉が開くと、途端に顔を曇らせてしまった。

上階から降りてきたシークとバッタリ対面してしまったせいである。

「気まぐれか、ご苦労」

両腕を組み肩で壁にもたれて、レンを迎えていた。「……下は行かない方がよさげだった」

エレベータはこのまま、下へ行こうとランプが点いて知らせていた。「……仕方ねえな」レンの言葉に反応して、シークは身を起こしてレンが待つ出入口に向かい、エレベータをいったん降りることにした。それからレンとシークは2人で横並びになって、一度下へと行ったエレベータを再び迎えうち乗ると、会議室のある上階へと動き出して行った。その時にエレベータにいたのは2人の他に男が

3人だった。ひとりはまだ若さがある風貌で、局の何処かのＡＤか若手俳優だろうと思われる。あとの2人は貫録もそこそこで、固そうに見えていた。

「こうも騒ぎ立てられちゃ、煙草も買いに行けやしねえな……チッ」

なかで、シークが不満を漏らした。シークはレンの様子をみに来たわけではない、恐らくはきれた煙草を買いに部屋を出てきたのだろうとレンはシークの激しい舌打ちを聞き流していた。

「お前がいねえと、話が進まねえぜ、気まぐれ坊や」

珍しくおしゃべりなシークだったが、内容は毒づいていて普段と調子は変わりない。レンはすでに落ち着き払っていて、毒にも挑発にも特には応じなかった。

「頭を冷やした。花火については、一考する。代わりに何か考えるつもりだ」

今後のことを適確に判断し指針を示していた。「……あそ」シークは指で爪を掻きながら、どうでもいいような一応の返事をする。狭く、閉ざされていたエレベータのなかで、息の詰まる思いだった。

奇妙なことに、同じ乗り合わせていた何の面識もなかった男が声をかけていた。「疲れた……」

レンたちとは別に、同乗していた3人のうちのひとりだった。年は３０代くらいで、髪は薄く、黒とグレーのアンサンブルＴシャツを着ていた。首をもたげて、淀んだ目でレンたちをいつからか見ていた。関心が向けられレンは何だと初めて気がついている。「……？」防ぎようのない距離で、レンは一歩身を引いて後ずさった。

「疲れた……あんたのおかげで……」

一瞬、息を止めた。何故なら、男が手にカッターを持っていたからだった。６０度の折り刃式カッター、何処でも手に入る安価な刃物はチキチキと刃を出す音を立て、注目を浴びている。

レンが息を呑み対処を求められる前に、刃は襲いかかってきていた。

22話（REN・1）

刃先は迷うことなく黙り立つレンに向けられて軌道を描いていた。男の握り締められたカッターに込められていた力は自然に、線上で爆発的なエネルギーとなってレンに降りかかる。

それを制してくれたのは、レンの頭身から頭ひとつ出た高さを持つ身長の、隣にいたシークの手の平だった。エレベータに居合わせていた一同は、色を失う。

レンの胸板に届く寸前で、シークは手を伸ばし肉で刃を止めたのだった。だが当然のことながら、突き立てられ食い刺さった刃先からは、血が流れて飛沫が床に滴り落ちていた。

僅かに顔を歪めたシークの伸びた腕の向こうで、無傷だったレンの背筋は凍っている。

「何してんだ！　オイ！」

若い、紺のパーカーを着ていた男は焦り迅速機敏に、咄嗟の判断でレンを襲った中年の男を後ろから羽交い絞めにして地に倒していた。された男は全く抵抗することがなく放心状態で、口元から泡を吹いて涙目で目線にある地面を見ている。この男の身に何があったのかなど、考える余地などはなかった。シークの手の平から刃は抜かれたが、開いた穴は塞がらない、流血してくる状態を何とかしないといけなかった。

ちょうどその時、出入口が開き、エレベータを待っていた数人の前でことの有り様を見せつける羽目になってしまった。「きゃあああ！」「何ごとだ！」「ちょっと……誰か来てええええ！」「……

警察を呼んで下さい！」間を置かずに場が騒然となる。悲鳴で混声になった動揺のなか、紺のパーカーの若い男が犯行に及んだ男を押さえつけながら何度も警察をとしきりに叫んでいた。

――混沌としながら、レンに男の囁きが今一度沸き蘇って、――レンに背後から忍び寄り身の毛がよだつ恐怖を与えていた。

『疲れた……』

襲った男は、彼は、バンド『ＳＡＫＵＲＡ』の関係者だったのだろうか、警備にでも携わる者だったのだろうか。『何に』疲れたと言っていたのだろうか。警護？　生活？　人生、か？　それはレンのせいで起きていた苦痛だったのだろうか。男の素性も身柄も何も解らなかった。

（俺が……人を……）

寒気が止まらなくなっていた。焦点が定まらない目で立ち尽くすしかなかった。

呆けていたレンを復帰させてきたのは、他ならないシークだった。自失のレンの頭の髪をきれいな方の手で乱暴に鷲掴みにし壁にと押しつけて、痛みを堪えているのかそうでもないのか見えない何かを憎んでいたのか、レンをシークは瞳で射抜く。

ざっくばらんに切り揃えられていた髪が揺れ、そのなかから覗き出るシークの表情は最悪だった。嫌なものにでも触っているかのように歪め、嫌悪感丸出しだった。レンはシークの体からにおう、煙草混じりの体臭が不快で気分が悪くなっていった。

シークはそれが分かっていながら、レンの髪を掴んだまま自分の

顔を近づけていった。仄かに漂うフレグランスにも敏感に反応してしまうがレンは何に対しても抵抗できなかった。

「止まんなよ……ビビり」

レンが視線を下にさげると、髪を掴んではいない、シークのぶら下げていた止血されない手の傷口からは、赤い血が遅く流れて床にポタポタと落ちていっていた。レンは血を見ながら、麻痺していた脳が覚醒していく感を覚える。「分かってる……分かった」声が震えないように細心の注意を払っていた。

『俺は止まらない』……レンはこれまでの自分を再び思い直していた。

夢は、きれいだった。でも道は、きれいではない。

何を犠牲にしても、理想を手に入れるために手段を選び――歩く。

夢さえも不透明で困難ばかりが襲ってきたとしても、レンは、見たいからと追いかける。それは好奇で、追いかけることには後悔はしないだろう。してもしなくても、どっちでもよかったのかもしれない、追わなかった時の方が、後悔するのだと思っている。

レンは探しながら、追う、見えない向こうの住人に会うために。

夢とは何か？　――それを知るために。

……

父親は銃自殺し、日本人だった母親はアメリカに残った。生まれたばかりのレンを連れて田舎に住み、レンは、そこで幼少時代を過ごすことになる。死んだ父親について母親は何も語らなかったため、レンのなかに父親の姿は何処にもなかった。噂によれば、父親は変わった人だったと言い、お金にもならないことばかりを平然とやっ

てのける慈善主義者だったとか、時々に手がつけられなくなる乱暴者だったとか――どれも所詮は噂だった、今さら真実を解き明かした所で父親が戻ってくるわけではない、レンも特に興味が起きなかった。

レンの母親は昔、日本にいた時は看護師だったらしいと聞いていた。それがどうしてレンの父親と出会いアメリカに渡ってくることになったのかは想像のなかの物語としてどうとでも考えて楽しめばいいと思われるが、母親の兄、レンには伯父にあたる人物が、レンにとっては主要な存在となってくることだけは押さえておきたい『運命』だった。

彼の名は三富龍平、レンの生まれるずっと前の若い頃は、建築家をめざしていた。これもどういった巡り合わせか、龍平の向かう自分の将来像からは少しばかり離れていって、それが段々と距離が開いていき結局は音楽に関連する事業で華咲かすことに落ち着いたという経緯である。

彼の起こした小さな会社『M．A．D．E』は、才能ある者を探していた。

そう簡単に見つかるわけはなく、気が遠くなるような年月を要していた。龍平は独自の見で才能のレベルを各段階に分け、上級をAとして個性を選んでいた。BやC級クラスに値する者は結構な数が集まるが、それ以上になる者というのが狭く限られている。龍平は、これも仕方のないことさと諦めかけて肩をすくめる毎日だった。

仕事が軌道にも乗りかけ順調に先が見え出した頃、秒刻みで仕事詰めだった龍平は珍しく、養生休暇をとって日本を離れてアメリカに渡る。

仕事も持っていたが、それよりも、一緒に生活を過ごし育ってきた可愛い妹に久しぶりに会いたいという目的があった。性格は明るく社交的で、旅行や写真が大好きで、でも怖がりで泣き虫力を存分に発揮する可愛い妹だった。結婚してからは日本を離れてしまい全く疎遠になってしまって残念だったが、たぶん元気でやっているのだろうと龍平は思い込んでいた。

しかし期待していたアットホームさとは打って変わって、龍平はショックを隠しきれないでいた。

まず父親である主人がいない、そして妹であり母親であるはずの者が家を空けることが多い。連絡なしに突然と訪れた龍平を待っていたのは、金髪の中年女性雇われホームヘルパーだった。

「奥様は外出中ではございますが……どちら様？」

両腕をさすりながら、眠そうに玄関先から登場していたその女性、見るからに日本人でスーツ姿だった龍平を訝しげな顔で見ていた。龍平はヘルパーの横柄そうな態度に尻ごみをしてしまう。「妹に会いに来たんですが……明日はおられますか？」片言の英語で、通じてほしいと願っていた。

どうにか通じたようで、ヘルパーは承諾してくれていた。「では、伝えておきますので、明日にでもまたお越し下さい」

答えると格子状で花装飾されていた門を閉じて家のなかにさっさと去ろうとしていた。龍平は慌てて呼びとめて、手帳に自分の宿泊しているホテルの名前と携帯電話の番号を書き、紙を破ってそれを渡しておいた。家を去る時にひとまずはいいかと息を吐いた龍平だったが、辺りを見回し、このアメリカという風土が我が妹にどんな

影響を与えてきたのだろうかと農道を歩くたびに心配になってきていた。

景色はいい、大きな通り沿いの閑散とした家並みを出ると、畑が視界に見え出してきていた。畑の規模は小さいのだろう、それでも広く、見渡す限りの自然に見えていた。人の気配が少ないが、ムクドリに似た鳥の鳴き声をよく耳にする。林の奥からはヒバリのような美しい鳴き声が聞こえてきていて、ああ此処は田舎だな……と思いながら来た道を辿って戻って行った。

途中、麦の穂の色の髪をした少年と会う。

２３話（ＲＥＮ・２）（前書き）

『Ｌｉｔｔｌｅ　Ｂｒｏｗｎ　Ｊｕｇ（茶色の小瓶）』

アメリカ合州国の伝承歌謡。グレン・ミラー楽団がジャズにアレンジして有名に。１８６９年にジョセフ・Ｅ・ウィナーが作詞作曲したと言われている。

23話（REN・2）

レンは誰とも遊ばなかった。アメリカの土地で幼少を過ごして、10歳になっていた。容姿の面では少しダークがかったブロンドのクセのある髪、ヘーゼルと呼ばれる淡い褐色の目をしていて、白人ではなく、日本人である母親の形質を受け継いでいるのか肌の色はアジア人に近かった。レンの通うスクールでは9割以上が白人で、レンはひと際目立つ存在でもあった。

からかわれることが多い。追い詰められていたわけではないが、レンが自ら集団のなかに飛び込むといったような無鉄砲、おかしな真似は、まず、ない。

レンは外界と自分の世界とをきれいに『分け』て、内なる自分を育てていっていた。

よって単独行動が多く人と群れることをせず、自分の価値観、自分の趣向に従い自分の知らないことには無関心と無視、それでいて――独特は形成されていっていた。

（何処の子だろう……）

龍平は、刈り取られたばかりの畑の前で、歌をひとりで歌っていた子どもに出会った。龍平は歩いて農道を、道は道なりに沿って来ていたわけだが、畑を挟んで数十メートル向こうから鳥のような、オーディオから流れた整った音楽のような、聞こえに美しい旋律に気がつき発信源を探していた。それで見つけてみるとそれは子ども、少年から発せられた声で、青のナイロンジャケットを水色の染柄タンクトップの上から羽織っていて、だぶだぶのカーキ色ズボンと汚

れたスニーカーを履いていたことが近づくにつれて分かった。金髪に見える髪がメッシュキャップから覗いていた。

ありふれて何処にでもいそうな、地味で大人しそうな子どもだと龍平は思った。だが声に惹かれ、関心を持っていた。

（……。この歌は……）

アメリカの民謡だった。元は１９世紀に楽曲として発表されたものではあるが、親しまれて民謡となり、アレンジされてジャズのスタンダード・ナンバーとしても知られる有名な曲である。

龍平も小学生の時に習ったことがあり、よく知っていたのでピンときていた。

（おいおい……酒の歌なんか子どもが歌うなよ……）

龍平が習ったのは日本語に直された歌詞の方で、子どもが歌っていたのは英語で原曲の歌詞だった。子どもは龍平には全然気がつかずに、遠くを見ながら歌をただひたすらに歌っていた。畑の向こうの、山の連なりを細い目で、真剣に眺めて……

『Ｉｆ　ａｌｌ　ｔｈｅ　ｆｏｌｋｓ　ｉｎ　Ａｄａｍ'ｓ　ｒａｃｅ，　ｗｅｒｅ　ｇａｔｈｅｒｅｄ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ　ｉｎ　ｏｎｅ　ｐｌａｃｅ，　ｔｈｅｎ　Ｉ'ｄ　ｐｒｅｐａｒｅ　ｔｏ　ｓｈｅｄ　ａ　ｔｅａｒ，　Ｂｅｆｏｒｅ　Ｉ'ｄ　ｐａｒｔ　ｆｒｏｍ　ｙｏｕ，　ｍｙ　ｄｅａｒ……』

（アダムの民の奴らが集まって来たなら、愛しいお前にお別れだ、此処までかと俺は……たぶん涙を流すのだろうな……）

歌は酒を止められない男を歌った、陽気な歌のはずだった。そう龍平は解釈している。だが何故か聴いていると、どうもそうではな

いような、思わず涙を浮かべてしまうような危機にも迫る、思い深い歌声、愁いを帯びた声だった。

「よお」

龍平は声をかけていた。歌を歌うのをぶち切り、過敏に反応した様子の子どもは首を遅く、龍平が立っている方へと振り向いていた。「……」表情は悲しくも喜んでいるようでもなかった。動くことを忘れた玩具と化していた。

「とても上手いじゃないか、おじさん感動しちまったよ」

片言交じりだが真面目に英語で発音し、オーバーなアクションをつけて賛評を表していた。誉められた子どもは特に何も言い返さず、無言で俯いていた。龍平は「えーっと……」と、会話を続けたくて話題を探し、必死で考えていた。「その酒の歌は、何処で覚えたの？　スクール？　家かな？」ともかく話しかけていた。

「家にレコードがあったからそれで……親は家にいないよ。ヘルパーがいるけど」

そう子どもは答えた。親のことなど聞いたつもりはなかったが、とちょっとばかり唖然とした龍平は、質問の向きを変えてみた。「ジャズは、好きなのかな？」子どもは素直にうん、と返事をしていた。

ホッと安心した龍平は、笑顔になって「じゃあ、その今歌っていた歌が好きなんだね」と言う。また頷くか、それとも首を振るのかを期待していた、だが。

「大好きなことを止めるように言われて……悲しいんだ……」

眉をひそめたくなる答えが返ってきてしまっていた。龍平は「どういうこと？」と単純に聞き返すしかなかった。「僕じゃない、歌

の人の話だよ」寂しそうに顔をつくっている。
「歌の話？」
酒を止められない男の歌、それだけしか龍平には分からなかったが、子どもには何かが見えているのか、それを説明してくれていた。
「どれだけ酒飲みを止めるように妻や他人に言われても……貧困でも、大好きなことは止めなかった。でもアダム、神様が言ったから、止めようと決心したんだ……好きなことを諦めたんだ。それって悔しい……悲しい、……悲しい」

子どもは始め泣きそうになっていたが、言い切ると本当に涙が頬を伝っていた。「ま、待て待て待て。泣くな、泣くのが解らん」

龍平は慌てて子どもの肩を叩いている。叩かれて揺れながら子どもは「ソーリー……」と腕で涙を拭き、急に歩き出して行った。「お、おい！」伸ばされた龍平の手は空をかいている。子どもは止まらず歩き続けて行ってしまった。

残された龍平は、ポカンと狐につままれたような顔をして、「うーむ……」と受けた衝撃を隠すことが難しく、腕を組んで唸っていた。

（大好きなことを止めるように言われて……悲しい、か……俺だって昔はさ……）

あんな、まだ小さい子どもに言われたことを、いつまでも後に引きずって、龍平は来た道を戻りながらこれまで自分が歩いてきた人生を振り返って考えてみていた。若い、そうだな２０歳代、あの頃はまだ若かった、何でも自分が最強で、やる気が実現を果たすんだと根拠のない強がりを存分に発揮していた時代だった、と思い返される。でもそれは理想であり未来を描くビジョンであり、例えば１

０あった理想のうち一体どれだけが実現したのかと１０年ほど時が経って数えてみれば、結局は１つ程度にしか過ぎなかったんだと……気がついて知る。

知ったことで、初めて大人になれたような感覚を覚え思い知った。龍平は、ああこれが経験というものだと自覚したのだった。若い時には若いから解らない。

それで今だが、龍平の心に新しい風が吹いている。

（これは……）

間違いなく予感だ、と龍平は思っていた。背筋から、ジワジワと見えない何かがすぐそこまで来て龍平の心の隙を窺っているような、ゾクゾクとした寒気があった。

（今すぐ帰って、準備をしなければ……）

あの子どもに突き動かされていたのに間違いはない、龍平に俄然とやる気が湧き起こっていた。両のこぶしを握り締め、俺はやるぞと夕焼けに近い空のなかへ叫んでいた。

好きなことが出来る、それが大人だ……龍平はそうも叫んでいる。子どもだと力も無く実現不可能だったことが、努力と運と知恵次第で可能になることだって多いのだ、それを見せてやろう、俺のこの両手に誓ってと、……この子どものような大人は叫んでいる。

子どもの歌声は、このように人を動かしていた。

……

結局、龍平がいるホテルに滞在期間中、一度も訪問はなく、最初に訪れた日の翌日に足を運び再訪してみても、外出中ですと言われ妹に会うことはなく門前払いだった。

普段からもっと電話をして近況を聞いたり、顔を見せにと、交流を少なからず持っておけばよかったと非常に後悔していた。仕事詰めで忙しかった若い頃からに続く日々の弊害が、このような所に及んでいる。龍平は納得がいかないながらも、置いてきた仕事たちを放っておくわけにもいかず日本にしぶしぶ戻って行った。

また来年でもいい、必ずあの子と座って共に話をしよう……。

龍平はそう心に決めて、日本に帰って来たらまず、あの子どもが歌った歌のレコードを買いに走るかと、先の予定を考え始めていっていた。

２４話（変わり者）

＞ｉ１５４７６―１７７５＜

レンは誰からも理解されなかった。

母親は福祉関係の仕事で忙しかったため家に普段はおらず、常時ヘルパーに家のことは任せていてレンは監視されて育つ。年いった中年女性ヘルパーはレンを部屋に閉じ込めたあと、リビングでテレビを見たり昼寝をしたりして寛いでいた。監視されているとは言ってもそれはレンにとっての煩わしさというだけで、例えば、部屋のドアに鍵をかけているわけではなく。家のなかは、自由に動き回ることができていた。しかし外へ出るにはリビングのなかを通らなければならなく、通ると、部屋で時間を過ごしているヘルパーの女性の目にとまって行き先などを聞かれるため、何処に行くのかを必ず告げてからでないといけなかったという。

それが例え家の庭でも、声をかけてからでなければ出られなかった。

限った友達ですらいないレンは別に、遠くまで遊びに行こうという欲求はなかった。内向的だったということもあり、もし出かけて迷子にでもなってしまったなら母親やヘルパーたちに迷惑がかかると考えていたのもあり、レンはたまにしか外へは出たがらなかった。

自らを閉鎖したなかでレンに語りかけてくるものはというと、本、オーディオ、窓から見える景色。それらは全てレンにだけに聞こえる情報や感性である。

窓からでは遠くに、麦畑の景色が広がっている。

（……誰か、僕の話を聞いて……）

人がそばにはいなかった。レンの話を理解するどころか聞いてくれる者さえいなかった。

不満は溜まり、独特や独創は……対象を求めて形成されていく……。

１８歳で、レンは単身、日本へとやって来る。三富龍平は、成長した彼を育てる決意をしていた。専門家の的確な指導のもと定期的なトレーニングを行い、音楽の楽しさと厳しさを覚え、路上ライブをしてみたいと自分から言い出すまでのそれまでは、彼の心が清々しく解放されることは微塵もなかった。常に、何かに熟考し、思いにふけっている、悩みを抱えている、決断を迫られている、見えない何かに追われている。

そして誰にもその重い口を開くことはなく時間は坦々と過ぎていき、レンはその足枷を外せられないまま囚われの身になって、もはや数は増えて重くなっていった。

「レン、いいだろう、何でもやってみたらいいぞお」

『Ｍ．Ａ．Ｄ．Ｅ．』の社長である龍平、それから副社長クラスで息子である高平たちはレンを取り囲み、活動を言い出すのを待ってましたと言わんばかりの構えで、大らかにそれ行けゴーとサインを出していた。普通なら立場は逆で、活動・宣伝などの方針は会社側が決定していくものだろうが、レンの場合は明らかに待遇からして違っている。それはそれだけレンの才能を高く買い期待をたっぷりとかけ、特別視していたと言えよう、扱いがまるで化け物……いや、

別物だったということである。

気楽である龍平たちのお言葉に甘え、レンは他のライバルたち――つまりは数も名もあるインディーズに交じって、会社を一切間に介入させず、あくまでも単独で街なかの路上なり小さな会館なりでライブ活動をするようになっていった……

……

Ｂｕｓｙ　ａｔ　ｎｉｇｈｔ
夜は忙しい
Ｅｖｅｎ　ｉｆ　ｔｈｅ　ｂｏｄｙ　ｔａｋｅｓ　ａ　ｒｅｓｔ
体は　休んでいても
Ｔｈｅ　ｈｅａｄ　ｄｏｅｓｎ'ｔ　ｆｅｅｌ　ｒｅｓｔｅｄ
ａｔ　ａｌｌ
頭がちっとも休まらない
Ｍａｙ　Ｉ　ｒｕｎ　ａｗａｙ？
逃げたっていいだろうか
Ｍａｙ　Ｉ　ｎｏｔ　ｋｎｏｗ　ａｎｙｔｈｉｎｇ？
知らなくていいんだろうか
Ａ　ｓｏｃｉｅｔｙ　ａｎｄ，
Ａｆｔｅｒ　ａｌｌ，
Ａ　ｒｕｌｅ　ｏｎｌｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｆｒｏｎｔ
所詮は上っ面の社会とルール

Ｔｈｅ　ｍｏｒｎｉｎｇ　ｄｏｅｓｎ'ｔ　ｃｏｍｅ
朝がやって来ない
Ｔｈｅ　ｂｏｄｙ　ｄｏｅｓｎ'ｔ　ｆｅｅｌ　ｒｅｓｔｅｄ
ａｔ　ａｌｌ
体がちっとも休んでいない

Became tired
身も心もクタクタだ
I'm exposed at the people when the sun rises
でも日が昇るから外へ行く
The flower is seen to be in blossom
花が咲いているからそれを見る
The world never changes
世界は変わらない

……

『ＯＮＬＹ　ＴＷＯ　ＫＩＬＮＳ』。大阪のとある商店街付近で、地下へと潜ってみれば行き着くことができるライブハウスである。場内は４人掛け円形テーブルの着席で１５０人、スタンディングで２５０人は収容可能なスペースがあり煙草などは完全禁煙、黒御影石でできている凝ったドリンクカウンターが中央よりやや後方に設置されていた。カウンターでお客はオーダー制ドリンクバーを楽しめるのである。

機材は主ならばギターやベースのアンプ、ドラムセットにキーボード、プロジェクタといった物を希望または必要なら店側で用意してくれていた。他にはエフェクタ、ミキサー、パワーアンプ、コンプ／リミッター、スピーカー、マイク……といったＰＡ（音響拡声装置）を店長と応相談でレンタル使用ができる。

幼少の昔は地方の田舎に住んでいた店の店長は、大阪の音響関連企業に若い頃は赴任して勤めていたが年がいくとついには退社し、思い発って飲食店を始めたという。元々大阪という土地が自分に馴

染んだのか、情の厚い、物ごとのはっきりとした性(さが)や豪快さ、おもろくて儲ける勘定精神が大好きで、商売には向いていたらしかった。

そして店の名前が『2つの窯だけ』という意味ではなく、『恩に着る（オンリー・に・キルン［ず］）』と感謝を表し駄洒落たものだったということは、恐らくほとんどの人が気がつかないのだろう、エレガントさが今ひとつ足りないネーミングセンスだった。だが、まあ笑って許せというご愛嬌を大阪という場なだけに求めているのかもしれなかった。

店長の名前は鎌武(かまたけ)登である。夫婦で経営をしていた。

「おいそこのブロンド。お前、いい体格してんなあ、身長幾つ？」

店長は遠慮なく長身である金髪のギタリストの肩を軽く叩いて話しかけていた。愛用している赤いギターを手に持って、ステージの奥が控え室と直結になっている付近の、カーテンが掛けられたパーティションの裏にて次番の待機をしていた彼だったが店長相手に無表情で味気なく答えていた。「知らねえ、忘れた」

思い出すことが面倒なだけだった彼は、弦を細かく弾(はじ)きながらステージを見る。何処かのお子チャマバンドが下手くそを弾(ひ)いてるな、と心中で堂々と悪態をついていた。『我狼』というバンドに属している彼はまだバンド活動を始めて日もそんなにはない、というよりは、ギターさえまだまだ練習経験の乏しい彼は、相手が上手下手どうであれ言える身空でもないのだが、気位だけは一丁前だったという、ある意味、物ごとは正確に直視できていて受け入れ寛大だった。素直、正直である。

場内は禁煙であるからか、彼はずっと機嫌を損ねたままで煙草を吸いたく我慢し続けて、非常にイライラもしていた。

やっと自分たちのバンドの演奏が終わった時に、彼は他のメンバーを放って一目散にステージから退いていた。彼はギタリストでありながらボーカルもこなしている。しかし歌は本人にも充分に解ってはいるが……微妙に調子が外れていて音痴だった。何処かの看板アイドル並みである。

仕方ないだろ、歌える奴がいねえんだからよ……。

そう嘆く彼は控え室の畳の上で胡坐(あぐら)をかき、むっつりとさらに機嫌を悪くしていた。眉間の皺は険しく凸凹を作り、頭痛に悩む病人かと思ってしまえていた。

「……冗談じゃねえ、歌なんかもうやってられっかよ!」

嘆きは、決断に。彼は膝を打ち、立ち上がって頭をガリガリと掻きながらだるそうに猫背で控え室を出ようとしていた。

「おい、また発作かシーク。何度目なんだよ、おま」

「演奏のたんびにこれじゃあな、ま、ご苦労さんさんや」

ステージから控え室に戻ってきたばかりの『我狼』メンバーは和んで笑って彼、シークを眺めていて、慌てている者はひとりとしていない。それがまたシークには憎らしく思え、次の演奏者の曲がスタートしたというのに、叫んで台無しにしてしまいそうになっていた――だが。

「ちょっと待てえや、シーク。この声……」

マンセイという名の『我狼』メンバーのひとりは、シークが大声を出しそうになるのを手で制して、関心をステージに向けていた。

ピアノ伴奏から始まる曲のそれは、マンセイの他、メンバーやシ

ークの興味をも惹く。

聞いた覚えのある声だった。シークたちにとっては、とてもよく気を惹かれ特徴のある、鼻にかかった……男の声質なのに天使のような声。

素朴なピアノの調譜に乗って、声だけがとてもよく目立ち……耳に滑らかに届く響きだった。

シークは声の主を知っていた。数秒と、聴いて途端にステージ袖へと舞い戻って行った。

25話（接点）

「葉上（はがみ）……高紀（こうき）、……か？」

ステージの裏で、出演を終えた『我狼』のメンバーとシークは立ち並んでカーテンに隠れ、それぞれは湧いてきていた唾と息を飲みながら壇上の人物を見守っていた。一同の瞳は一心に『彼』へと釘付けであって他への散漫を一切許さずに、関心という心で身ごと囚われてしまっていた。葉上高紀――シークが確認するようにメンバーの前で名前を出していた。

「そうや、彼やんな、あの、凄い奴っちゅう！」

ひとり、またひとりとメンバーは歓喜めいた声で少しずつ騒ぎ立てていっていた。「シイッ、うるさいで！」

指を立てて制して、状況は静かに落ち着き、皆、演奏と歌に聴き入っていた。

シークは始めから騒ぎ立つこともなく、葉上と呼んだ若いひとりの男に注目していた。シークも知っていた、彼という人物が、音楽を愛好する者にとってはどのような存在だったのか。まだプロではなく活動自体は小さく地味で、告知らしい事前の告知はいつも当日ギリギリで、都会に多く各地に渡り出没しているという。気まぐれで出演を決めて行っているのか、拠点は何処なのか仕事はあるのか、年齢は、そもそも日本人なのか本当に男なのか、その髪はスタイルは――誰も、彼の素性を詳しくは知らないようで、雲の上の天上人のように扱っていた。

歌はステージの隅で弾く、ピアノ奏者の伴奏と合わさって、物音

の出ない観客席を前に演じられている……

……

Solitary one is easy the naturе at night

夜はひとりがいい

You will rest your body

体は休んだらいい

If the head also takes a rest though it might be good

頭も休んでくれたらいいのにね

May I run away?

逃げたっていいだろうか

Can you change without knowing?

知らなくても変われるだろうか

It is a lie after all,

A fiction,

And a reality

所詮は嘘と虚構と現実

Be warm in the morning

朝はあたたかくない

What does this body do?

体は言うことをきいてくれない

Do you keep worrying only?

悩んでばかりだ

Say someone to me

誰でもいいから言ってよ僕に
Ｔｅｌｌ　ａ　ｌｉｅ　ｂｅｃａｕｓｅ　ｎｏ　ｏｎｅ　ｉｓ
ａｎｇｒｙ
嘘でいいからついてみせてよ
Ｉｎ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ，　ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ｎｏ　ｃｈａ
ｎｇｅ　ｗａｙ
世界は変わりようがない

Ｉ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｂｅｇｉｎ　ｔｏ　ｒｕｎ
走り出したい
Ｉ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｂｅｇｉｎ　ｔｏ　ｒｕｎ
走り出したいよ
Ｉｎ　ｔｈｅ　ｎｉｇｈｔ
夜のなかを
Ｉｔ　ａｉｍｓ　ａｔ　ｔｈｅ　ｍｏｒｎｉｎｇ
朝めがけて
Ｔｈｏｕｇｈ　ｉｔ　ｉｓ　ｓｈａｍｅｆｕｌ
恥ずかしいけれど

Ｍａｙ　Ｉ　ｓｈｏｏｔ　ａ　ｄｉｃｅ？
サイコロを振っていいですか

……

葉上、その男の歌声はメランコリーに満ちていた。どうしようもなく聴く者の心を打つ。ピアノのイントロから始まり、ただでさえ感動的な美しいメロディーであるにも関わらずその精神を秘めた独特の歌声は相乗作用か、より一層、静寂のなかの美を突き詰めて表現しているのではと誰もが思えてしまっていた。

残念ながら歌詞は最後まで通しで英詞だったため、意味は伝わらなかっただろう、観客は感性だけで聴き、単調だが安定して作り出された音の世界を魂から足先まで隅々と堪能して、曲の終わりがくるまでにどの席でも会話は一切されなかった。

魅了され高揚感に支配されて、手の指先は細かく震え、全身で涙を誘う高低音を繰り返すバラード……1曲が済むと、端の席からもう1曲、という声が上がっていた。

受けて若いボーカルのその男は、人差し指を立ててピアノの方へとサインを出している。特段目立つような振る舞いでもない、あくまでも自然に見えていた。

（あいつ……『本物』だ）

シークも納得をしていた。せずにはいられず、今に所属しているバンドにおいては付け焼き刃的な価値でしかないだろう、自分のこのポジションに別れを――下手くそな、ボーカルとしての役割など、この男の前では綺麗に捨ててしまいたいと衝動に駆られていた。

本物だと称された男は音楽をさせられているのではない、『しようとして』いるのだった、それは意志というものである……ただ阿呆のように歌っているのではない、意志という情は情を呼んでいて、だが内に秘めているものをただあば擦れいい加減に吐露しているのではなく、整った旋律のなかから抜きん出て邪魔とならないよう真っ向から音とは感性を譲歩しながらと合わせられて……その技は、歪みなく真（まこと）しやかな澄みきった結果を出している。アンコールは2度3度と叫ばれた。

だが人指し指を立てたのは、1度きりだった。

……

拍手喝采のなか歌を終えた彼をステージ袖で待ち構えていたのは、『我狼』のメンバーと店長だった。

「ねえねえ、どっから来たん？　……噂は知ってんねんで、葉上高紀、いうんやろ？」

「こんなとこで会えるなんて奇遇やわぁ、ちょっと飲みにいかん？」

「素晴らしかったよ、あんな独特な感性、聴いたことがない」

「なあ行こうや、俺たちと」

このように質問と誘い攻めだった、だが。「……用があるから」と、彼は拒絶し断っていた。

そのやり取りのなかに、シークの影はなかった。

……

ライブ帰りのホームである。シークは、我狼のメンバーとは乗り換え駅で別れてひとり、番線に来る次の電車を待っていた。煙草は吸わず、白線より下がって、電車待ちで数人と並んでいる所からは数歩離れて立っていた。

肩に掛けていたギグバッグの中には、愛用の赤いギターが入っている。かつて父親に渡されて初めて音楽というものに触れるきっかけともなったギターだったのだが、当初は僅か5分で飽きていた。

手ぶらな片方の手の指を空中で遊ばせながらシークは、自分の目の前を通りすぎていく人物に着目した。

それは、葉上。天上人扱いの男だった。見間違いではないよな、とシークは暫く葉上の様子を観察していた。

（何でこんなとこにいる……化け物め……）

シークに目をつけられているとは露知らず、葉上はシークの前を通りすぎた後に地面へ手荷物であるバッグを少々乱暴に落とし置いて、重そうな体でベンチへ着席したかと思うと、今度はどさり、と横になってしまっていた。

シークは何だこいつはと顔をギョッとさせて、尖らせた口で光景をずっと見守っていた。電車が定刻より3分遅れてホームに停車し出発を告げても、シークは動き出そうとはしなかった。自分が乗り込むはずだった電車が夜の闇へと走り出して行ってしまっても、それは持続していた。

（こいつの面の皮を剥いだあとには、何が出てくるんだろうよ……どうせなら、俺らんとこに来ないだろうか、ボーカルとして……いや）

自分の納得できる答えを探して、葉上へと強い視線を向けている。

（……せめてこいつの後ろでギターを弾けたなら）

どんなにいいか、と思う前に次の電車がやって来ていた。昇降する人数はまばらだったが、特に関心は持たれずに寝転がっていた葉上のそばを我先にと通りすぎて行った。

26話（勧誘）

『2番線に入ります電車は……』

感情の持たないアナウンスは、事務的に案内を繰り返している。帰路への電車へ乗り込むことをすっかりと忘れシークは、ベンチで未だに寝転がっている男に一瞥をくれていた。夜も深くなっていくのだが、帰りたいという気からは遠ざかっていっていた。

男、葉上が場所をとって寝ている横に座ってから、数十分が経過し、電車は何度でも通りすぎて行く。足を組んで腕も組んで、煙草は吸わず、息だけをシークという男はしていた。

一体いつまで、この男たちは此処に居続けているのだろうかと疑問が膨れ上がる時分、ある男の影が迫ってきて、状況に変化をもたらしていた。

「待たせた、レン。行こうか……」

いち早くシークは下げていた顔を上げた、そして声のした方に光を向ける。過敏となった目の光は、現れた男に集中して射す、だが男には残念ながら振り向いてはもらえなかったようだった。

背中が丸く、スーツを堅苦しく着こなしていそうな体格のその男は、明らかに葉上を指して呼んでいた。ただし葉上、という名で呼んではいない、そのことにシークは奇妙感を抱き、人違いではないかと警戒心が立っていた。

（『レン』……？　どういうことだ？）

男の口ぶりからして待ち合わせていたともとれる呼びかけに、シークはまだ黙って聞いていた。すると現れた男に反応したのか、それまで大人しく眠っていた葉上、彼は、突如目をはっきりと開けて起き上がり、即座に立ち上がって折れていたコートの端を整えていた。

「こんな所で堂々と寝るな、呆れた奴だ、はっはっはっ……全く」

彼の髪をぐしゃぐしゃと掻いて、肩を強く叩いて、背中から前へと押し出していた。「それじゃ行こうか。理香を待たせているんだ」……太みの男は、そこで初めて隣の人物の視線に気がついて注目する。「ん？」

シークと男の目線がばっちりと衝突した瞬間だった。ぎくりと肝を刹那に冷やしたシークだったが、相手の男の方が大人だったことに救われている。「やあ」少し口元を微笑ませ、何もないように男に話しかけられていた。

「君は、ギタリスト？」

シークが何も呼応できないのを構わず、優しく問いかけていた。足元に置いてあったギグバッグを見てそう思ったのだろう、問いかけは自然と出てきただけだった。「ああ」……シークの低い声は非常に聞き取りにくかったため、同じ質問で返ってきてしまう。「ギタリストなのかな？」今度のシークは頷いていた。

葉上もシークが視界に入り、長身の彼を見上げていた。

「どっかで見たことが」

思ったことを口にしたのか、言いかけた言葉は先がなく見失い、相手任せへと化していた。

「さっき同じライブハウスで演奏してただろ、あんたは眼中になか

ったかもしれねえけどよ」

機嫌を損ねたに振る舞っているわけではなく、彼のこれ、この態度が自身にとっては決めてのマイペースなのだと察知するに至るまで、加えて僅かな時間を要するだろうということは初対面では理解し難かった。「あいにく、物覚えは悪い方なんで」

葉上は葉上で、自分の調子を崩さず答えていた。間に入るように男が話題を変えていた。

「なるほど、そういう繋がりか……何かの縁だな、そうは思わないかい？　君」

恰幅のよい男はにこにことし出し、シークの出方を窺っているかのように手を擦り合わせてやがて本領を発揮していた。「さて君、これから……時間はあるかな？」男の細くなった目は、冗漫にも見えるが見ていると寒気がしてきて気分のいいものではなく、鋭い長針で狙われている獲物の立場に追われていた。つまり、本気の目で見られている。

「言ってる意味がもうひとつ分か……」

分からない、と言い切る前に、シークの腕を引っ張って付け加えていた。

「私の勤める事務所に来てくれないか、要するにだな、これは勧誘」

「勧誘？」

引っ張られている腕を振り解こうとする前に、男は言い直していた。

「スカウト」

男は三富優平と名乗った。名刺を渡され、シークは自分の目をまず疑ってしまった……白い小さな紙に書かれたものが本当のことであるならば、シークにとっては信じられない事態に当たっているらしい。

タクシーを使って駅からは離れて、葉上と同じに並んで後部座席にと乗り込んだシークは、窓から見える景色がひどく別の世界のものに見えていた。もう此処には戻って来られないのかもしれないと、余計な心配が自分を取り囲んでいる。

「おい、葉上」

タクシーに同乗して、難しい顔に出来た皺を掻きながら、隣に座っている相手に話しかけていた。「何ですか」目は話す方には向けず、窓に寄りかけた頬杖づく手も動かなかった。遠慮という概念がまるで感じ取れないでいた。

「お前、レンって呼ばれてるのか？　葉上、で、今、返事したから合ってるんだろうがよ……紛らわしいな、葉上」

2度3度と繰り返す名前に、「おかしくはない」と言い返した。

「仲間うちでは本名で呼ばれて、別におかしくも何ともないだろ？」

……

そこでシークは「……はぁ？」とさらに顔を曇らせてしまったという。

行き着こうとする所は、スカイビルだった。

地上55階、地下5階、北、西、東、南へとタワー4棟で構成され、それを連結した円形が螺旋を描く造りになっている。空中には

庭園である憩いの場が設置され、街をそこから上下四方八方見渡せて限りはなく、展望が自由だった。

幾多の外資系企業、製造業、研究機関が入居しており、領事館もあったため観光をするには正規の身分証明と高質の常識が絶対的に要とされている偏倚(へんい)部分もあるが、モダン、レトロを再現するなど趣向を凝らした飲食街、最新科学を実践した展望台や映画館などは観光スポットとして人気が高めだった。

エトワール凱旋門に似た大アーチをくぐり抜けて彼らを乗せたタクシーは、大広場へと続く小路手前の乗り場で静かに停車し、ひとりずつ順番に降ろされていった……シークは、来たこともなければ自分の身とは不釣り合いなこの地に居心地悪さと、煙草を吸いたいのだがという欲求に見舞われている。

「先に飯でもどうだい？　まだ開いているレストランがあるんだ、何なら今日はホテルをとって休んでもらってもいい……レンも、そうするか？　疲れたろ？」

降車して一番に優平は話を持ち出した。だが、話を触れられた2人は互いを見合うことをせず、拒否反応を示していた。「いい」「結構」「理香さんは？」

ちょうどその頃、暗いなかから元気のよい明るい声が遠くからやって来ていた。

「すみませーん！　遅くなってしまいましたあああー！」

噂の『理香』である。二渡(にとべ)部理香、三富優平の秘書でありよく働く活発な女性だった。グレーのスーツ姿で、ヒールを履いてはいるがどうでも構わず駆けてきていた。

「何処行ってたんだ。１０時頃に着くと言ったろう」
「すみませえん……外国人に道を聞かれちゃって、案内してきちゃいました。あ、あなたが“Ａ級”ギタリスト？」

出迎えの遅れた言い訳を簡単に済ませ、理香は優平のそばにいる背の高い、むっつり顔のシークをじろじろと物色するように足元から頭まで先々を見つめていた。

（何だよ“Ａ級”とか……気に食わねえ）

シークは、嫌悪感でさらに顔を曇らせていた。それを見た理香はやっと自分のした失礼に気がついて、慌てて謝っていた。
「きゃー、ごめんなさい、違うのよ、変な目で見ていたわけじゃないの。初めまして、ようこそ『Ｍ．Ａ．Ｄ．Ｅ．』へ……此処が何処だか、把握してるよね？」

両手を合わせた奥から瞳を覗かせて、理香はシークのご機嫌を窺っていたが、シークの最悪な表情は変化なかった。腕を組み首を傾けていたシークは、「スターにしてやるって、連れて来られたけど？」とどうでもいいように扱っていた。
「気位は高いようね、そうこなくっちゃあ。君みたいのがね、此処にはごろごろといるのよ、隣にいる彼もそう。まあ彼の場合はまたちょっと違って、“Ｓ級”クラスだけどねん」

平然と差を言ってつけた理香に優平は、「こら、しゃべるなお前は。理香！」と叱りつけて、シークたちの案内を始めている。
「これからの詳細は事務所内でしようか。立ち話じゃなんだかな、大事なことなんだし」

そう言って優平、理香、葉上――レンは、シークより前に敷地内へと向かって歩き出している。シークはあとを追いながら、自分の今後のことを――将来像を、そびえたつビルの高層に見立てていて、これから俺は何処へと向かっていくのだろうという、不安という沈黙を腹に抱えてしまって……

流されていっていた。

27話（決断）

深夜1時を過ぎていた。

終電を気にかけていたシークだったが、心配は御無用と理香は優平から指示を受けタクシーを呼ぶ。夜のなかを同じ黒の色でとけ込んで来て、高級感たっぷりのハイグレード車はシークと理香、2人を乗せてまた、見通しの悪い暗いなかを集団と並列にある街灯などのライト頼りに、街へと駆け出して行った。

後部座席に座るシークと理香の2人は何十分という無言の時間を過ごしてはきたのだが、理香の方が静けさを嫌い、シークに話しかけていた。「あのさ、君」

「は？」

寝ぼけたような、知ったことではないと無視をするような、やる気のない返事をしていた。

「さっきの、こちら側が申し出た要求のことだけど……君、どうする気なのかなあ、なんてね……」

愛嬌のある顔をさせながら、理香はシークの機嫌と反応を見て苦笑いをした。夏でもないのに不快指数を表すその顔は、来る者を拒んでいたわけではない、彼にとっての『楽』な姿勢だった。

「さあな……あいつらにも聞いてみないと。こっちの判断だけじゃ決断できない」

後部座席の窓から後方へと流れる景色は単調で、退屈なものだっ

た。道に人もいなければ温かみもなく、２４時間開いているコンビニや夜になって役割を果たす街灯の光が走る速度に沿って離れて行った。

理香は、シークに冷えた視線を投げかけていた。

「あなたは、仲間が止めてくれたらやめる？　私たちの方へ来るのを。それとも、止める止めないに関係なく、あなたはこちら側に来るつもりはないのかしら。あなたの運命は、仲間の反応で決まるのかしらね……」

シークに突きつけられた問題が迫っていた。理香に迎えられ、優平たちとともに『Ｍ．Ａ．Ｄ．Ｅ．』事務所へと案内されたシークは、説明を受けて改めて勧誘を受ける。勧誘、即ちそれはギタリスト、音楽家としての本格的なプロ入りの話である。

しかし、それには条件があった、シークに下された『別れ』、『選択』である。

スカウトをしているのはシークだけであって、彼が所属しているバンドのメンバー、マンセイたちを一緒に連れていくことはできないと言い渡される。聞いたシークは何故だ、と聞き返さずにはいられなかった。だが優平は動じることはなく意向も変えず、ガラステーブルに広げられた何枚もの書類の上を指で何度か叩いていた。コン、コン……。落ち着いている優平、そばに立つ理香、来客用のソファに腰かけている葉上、レン。隣でシークは……言葉を失っていた。

（俺だけがプロ入りか……）

優平の見解がシークを混乱に陥れていた。優平の言っていたこと

を車に揺られて鮮明に思い返されながら、心が揺れていた。車は止まらずに道路を走っている。

理香の冷えた視線は、矛先を変えて、窓の外にと移っていた。

「私たちは真剣よ、お遊びじゃないの。怖がらせるつもりじゃないけど、もしひとつでも事業に失敗でもしたら、多大な迷惑……損失が必ずある。あなたひとりで何とかできる規模のものではないし、下手をすれば死人だって出る。命くらい懸けて真剣にやってもらわないと、こっちとしては困るわけね。ああいう平然に見えて、優平も社長たちも死線を一体幾つ乗り越えてきたことか……」

理香の話は後半に私情というぼやきを挟み、シークに言いたいことを言っていた。

「優平があなたを高く評価した、その期待に応えるのか、それを蹴ってまで連れ添った仲間に固執するのかどうか……決めるのは、あなたよ」

最後に理香の目には、温かさがあった。解凍していったシークの頭のなかから口先へと運びこまれた言葉に、理香は微笑みさえ浮かべるようになる。

シークは尋ねていた。

「聞きたかったことだが……」

「何？」

「何で俺をそんなに高く評価する？」

シークが疑問に思うことには無理もなかった。

「俺は……あの、優平とかいう人とは駅で会ったのが初めてで、それまで面識はないはずだぜ、少なくとも俺は、な。何処で俺のギターを聴いたってんだか、まさか、ライブに来てたのか？　俺にはどうしてもその謎が解けない」

理香は「ああ、それね、それはね……」と、軽く受けて返していた。

「直感といえば直感だけどね。たださ……優平によると」

「？」

何もない上を見上げながら、口元がほころんでいた。

「レンがさ……『どっかで見たことが』あるって言っちゃったのを聞いたか・ら・よ」

「はあ？」

顔をしかめていたシークの反応は理香には面白かったようで、ますます笑いが込み上げてきていた。「あはははは……だからさ」

ほどなく2人を乗せたタクシーは高速へと進入し、ただでさえ寂しく暗い、単調だった風景は、これもますますと黙調になっていった。

「君を高く評価したのは、レンだったということね。普段、外界には自分から見向きもしないあの気まぐれレンの気を惹いた見事で稀なギター演奏、今度私にも聴かせてね」

……シークのなかにふつふつと熱いものが沸き上がってきていた。内情は本人にしか分からないことだが、熱いもの、それは何故沸いてきたものなのか、または何なのかと探ることは本人にとっても小難しく、また分かったとしても素直には認めたくなかったのだろう、

顔色を変えず隠していた。

（神……あいつに導かれたみたいだな……）

自分の力量のことなどどうでもよく、『あいつ』の関心を惹いた、そう思い込むことでシークに意志という火は弱くとも点き始めていた。これがシークにとっての2の人生の始まりになろうということは、この時にはまだシーク、彼には思いもしていなかったことなのだろう……。

深夜のタクシーは、シークを家へと無事に届けるために高速を駆けて行く。

整備のされた道路を通り、夜をも突き抜けようと、シークは今後の行く先を腹の内で決めていた。

……

シークは自分が住んでいるマンションに到着するとすぐに、『我狼』メンバーのひとりであるマンセイなる男に携帯から電話をかけていた。深夜3時半、相手が寝ていようがお構いなしといった態度で、シークは「よう……」と擦れた声で呼び出していた。

『何じゃい、こんな夜中に……疲れて寝てんのや、こっちは。んにゃぁ、今帰ったんか、まさかお前？』

かなり寝ぼけた感を出しながら、マンセイはシークに聞き返していた。小型の冷蔵庫を開けて、冷えた缶ビールを出すとシークは、フローリングの床の上に横になり転がっていた。缶ビールは蓋を開けず、手に持ったままで冷たさが神経を伝い、頭に冷静さを運んでくるように感じられていた。

「大事な話なんだが……いいか。俺、あの『M・A・D・E・』にスカウトされた」

用件は、飾りたてなくそのままで相手に伝えられていた。無論のこと、マンセイは素っ頓狂な反応を示していた。『は、……。……なにいい！？』さらに、『“メイド”って、“あっち”の方や……ないよなあ！？』と、混乱を誘う。「“あっち”って……何処だ」シークには通じなかったようで、大真面目に受けていた。

ともかく、ちょっと待ってくれと一度電話から離れ、改めてマンセイはシークから事情を聞いていた。真剣に話をするシークの邪魔をせずに、区切りがつくまで熱心に、マンセイは醒覚させた頭と耳でしっかりと内容をこぼさず……黙って頷き聞いていた。

『そうか……』

聞いた後に答えた言葉は、しばらくの沈黙を迎えている。

立てた缶ビールを同じ床で寝転がっていたシークは……重くなるまぶたに耐えて、見つめていた。

「俺は……どうしたらいいんだろうと……迷った……」

相手の声しか届けない電話に、語りかけるようにシークは、見えない先の結末の所在を探すように……吐露していた。

「でも、やりたいことが見つけられたんだ」

体は疲れていても、眠くはならなかった。

「あいつの後ろで、演奏ができたら」

眠くなるどころか、熱を帯びたものが体から蒸気しつつある。「最高だと」どくどくと、心臓の高鳴りは激しくなっていった。

開けて網戸になっていた窓からは隣のマンションや奥に建つビルが暗い形となって見えている。沈黙や闇夜は今のシークには非常に助けよろしい装いで、冷静さを見失わずにすんでいた。時折、吹く風の音が、ベランダの付近でカタカタと小物を鳴らし、完璧な沈黙を遠ざけてはいた。

『おめでと、シーク』

そのなかで、マンセイの声は電話の向こうから届き、聞こえて続いていた。

『んじゃ、明日っちゅうか、今日からな、シーク』

「ん？」

『来んでええよ、もう。他の連中には言っとく。バイバイや』

それが最後の会話だった。

28話（結成）

俺は何者なのだろう。レンは自分に問いかけていた。

レンと理香を乗せて走る新幹線『のぞみ』は、待ち合わせた駅へと向かっていた。グリーン車指定席で約2時間35分ほどかかる道のりに、レンは退屈し窓枠に肘をついてまぶたを伏せていた。横で理香はセピアのサングラス越しに、組んだ美しい足の上に雑誌を広げて読んでいて、暇を潰していた。

シークには連絡を入れた、だが彼は電話には出なかったため、仕方なくレンを連れて理香は東京へと向かっていくことにした。乗車してから数十分後、理香の携帯電話にシークからの連絡が入る。着信から折り返しシークは理香に電話をかけたのだが、理香たちが既に大阪を離れているという事実に「早ええ」と驚き、追いかけますと返していた。

「……ってことは、決めたのね？　これからどうするのかを……」

理香は嬉しそうに興奮しそうなのを堪えて冷静に、決断をしたシークを褒め称えていた。

「分かった。駅で待ってる」

隣では、目を閉じたままレンは話を……聞いていた。

……

レン……俺は何がしたかった？　そんな疑問が自分にかかる。

前が判らなかった。いつも、頭のなかは迷いと不満だらけだ、いっぱいだった。自分が解らない、そういえば普通とは何なのだ、俺

は、いつも変わり者と言われて。
自分のことが知りたくて心理学の本を読んでみても、解らない。本は俺を分析してくれようとしてくれるが、だからといってこの先俺がどうしたらよいのかを教えてくれそうでもない、本を開いた意味がない。……

俺はいいのか？　歌い続けていいのだろうか？
いいのか、いいのなら、歌う。俺の歌を聞いて感動してくれるなら――歌おう。それでいいか、満足か。……

レンというアーティストは、自分の内情を歌詞と譜に表し、歌った。
それが聴く者の胸を打ち、惹き込ませ、変える。
レンの信者は増え続けていく。
レンが存在、する限り。

……

シークが移住をし、拠点を関東に変えた後のことになる。
レンとシークは、優平と理香に事務所へと呼び出されていた。見渡せば都庁にも近く位置する高層ビルの一郭、理香に連れられ赴いたレンが、指定された部屋番号の部屋へと入ったときだった。
こじんまりとした広さで、ふかふかの2人掛けソファや仕事机くらいしかない簡素な部屋だったが、迎えていたのはシークや優平だけではなかった。

あと2人。
小柄でオレンジのパーカーを着た、カジュアルな服装だった幼げな男の子と、比べて全体がスタンダードな、大人しそうな男。対象

的だった。
どちらも、レンを見るなり前へと1歩を踏み出した。
「初めまして。キー（ボード）担当の、セイです」
先にスタンダードの方の男が軽く頭を下げて挨拶していた。続けてカジュアルな方の少年は、会釈する。
「ども、ドラムのジュンです。よろしくぅ」
言ったあと、壁際にいたシークは、「で、俺がギター。よろしく」とだけ言った。
「何のことだ」
すぐさまレンが思ったことを口に出していた。それもそのはずで、レンは本日、呼び出された理由を聞かされてはいなかったが、どうせ次の新曲の打ち合わせか何かだろうと適当に思っていた。
「バンド」
レンの横で理香が教えてあげている、だが。「バンド……？」
自然な髪を、レンは掻いた。少し混乱していた。
「レンを入れて、4人。これで揃ったわね、新メンバー、新バンド発足。おめでとう」
にこにこと笑い、理香は祝いの言葉を並べ立てている。レンが、机の傍でこちらの様子を窺っていた優平に顔を向けたとき、優平は軽く頷いていた、そして言う。
「ま、これで飯でも食ってこい」
そう言いながら、優平はスーツの内ポケットから財布を取り出し、万札1枚を一番近くにいたセイに渡していた。
「仲良くやっていこう」
「うん。楽しくやろうね♪」
セイとジュンは、明るくレンに話しかけていた。

（仲良く？　楽しく？）

レンには随分と納得がいかなかった。

レンは思った。俺は、ひとりでいいのに、と。

何も頼んだわけではない、仲間など求めてはいない、優平や理香、いや、社長である龍平の提案なのかもしれなかった。一体どういうつもりなのか、バンドなど。

レンはずっと黙っていた。

「それじゃ、午後から打ち合わせを始めるから、それまでには戻ってこいよ」

優平に言われて、メンバー４人は事務所から外へ出た。時刻はまだ正午前、ジュンのお腹がきゅるると鳴っていた。「早く行こうよ」

「何処に」「うーんと。並ばなくてもいいラーメン屋」

じゃあ繁華街か、とセイに笑われて歩き出していた。

最寄りの駅までに、桜が咲き始めた並木道をメンバーは通る。気温は春先らしい温かさ上々で、道沿いに重なった木々の影は奥まで続き、散歩コースにはもってこいの穏やかな道だった。

桜の根元では添うようにタンポポやオオイヌノフグリが小さく点々と咲いている。陽気な風は、道行く人々に優しく吹きかけていた。

ジュンだけが、弾みながら歩いていた。ぶらぶらと並んで歩いているメンバーの前に出て、ジュンは目をきらきらとさせて意見を出していた。

「ね。僕らの名前、サクラにしない？」

ザワ。……

そのとき、サッとひと吹きの、桜の花弁を交ぜた心地のよい風が

メンバーの肌をくすぐった。まだ地面には花弁がそんなに落ちてはいない。咲き始めて、間もない――

ジュンの、日向に輝く髪が、揺れていた。

「サクラぁ？」

と、場にそぐわない声を上げたのはシークだった。

「だって今の僕らにぴったり」

懸命に自分の意見を通そうとジュンが、少し口を尖らせていた。

「桜の咲き始めた頃だってことでさ♪」

バンドの名前――サクラ――桜の咲き始めた頃と――僕ら。

簡単な式は、妙な説得力を生み出していた。「ありきたり」尚もシークは文句をつけている。

「皆に覚えやすくて親しみやすくて、馴染みもあるし。いいんじゃないかな」

ジュンを援護するように、セイがフォローに回った。

「日本人だしー」

調子にのったジュンは、その場で回る。だが、ジュンの何気ないひと言は、ある男の心中に深い楔を打ち込んでいた。それに答えるかのように、男の口からは温度違いの言葉が飛び出してしまった。

「俺は日本人じゃない」

――。

全員の動きがピタリと止まった。空気が凍てつく。

外に出てから今まで黙っていてメンバーの会話を聞いていたレンが、初めて口にした言葉。それは、とても重かった。

さらに、横槍かと思えるほどの言葉が被る。

「日本語しゃべってる」

擦れた声だった。シークだった。

敏感に反応して、レンはきつい顔をする。弓の弦が張り詰めたような緊張感が漂っていった。

「しゃべれるだけで、日本人なのか」……

もう、すぐ。並木道は終わる。

レンは問うのだ。

明日、場所を変えれば、人は変わるのか。
明日、名前を変えれば、俺は変わるのか。
環境を変えた所で、俺のなかの血が変わるわけではないし、背が伸びるわけではないし、瞳の色はライトブラウンとダークグリーンの間の淡褐色だ。よく見れば判るだろう。
俺は俺だ。――何も変わらない。

……

「あ、すみません」
打ち合わせを終えた後、ロビーで理香を待っていたレンの所にファンの1人が寄ってきていた。目を閉じて考えごとをしていたレンは、人が来る気配を感じるとまぶたを開けて、光と一緒に外を受け入れる。
「あの……葉上さん、ですよね？」
近寄ってきたのは理香よりも若く、春用の、爽やか軽めのフォーマルスーツを着た女性だった。手には丸めた紙の束、もう一方にはグッチのバッグを持っていた。首から提げたプラカードには、『仁取』と名前が提示してあった。事務所に出入りしている者であることは、間違いがない。
「だったら？　何か用？」
面倒臭く、レンはもたれていた背中をソファから起こした。座る

頭上で女性は続けた。
「ファンなんです。2、3度、ここでお目にかけたことがあったんですが、なかなか勇気が出せず……。お疲れの所、申し訳ありません」
レンは聞いて、いっそう、不機嫌になってしまった。
(だったら、話しかけてくんな……)
口に出すことはなく、レンは無言だった。
「あのう、それで、もしよかったら。サインもらえたらな、と……」
段々と消え入りそうな音量で女性はレンに頼んでいた。ジロ、と女性を睨んだレンは、……聞いてやったという。
「何処に書く?」
ペンなどの書く物も、色紙も見当たらない。
「あ、そうですよね。す、すみません。少し、待っててもらえますか? そこの売店で買ってきます!」
女性は慌ててそう言ってすぐ、レンの返事も聞かずに去ってしまった。

行き違いになって戻ってきたのは理香だった。
「さ、お待たせね。行きましょ、レ・ン」
用を済ませた理香は清々しそうに腕を広げて羽を伸ばしていた。
「ん? 何かあった?」
レンを迎えにきた理香が不思議そうに聞くと、「さあ。……行こ」とレンは、すっとぼけていた。
(俺に指図すんじゃねーよ。勝手に喜んでろよ……ばぁか)
悪態を心で吐いたレンは、理香とロビーを出た。この後に戻ってきたファンの女性はレンを見失い、非常にガッカリするだろうということは、レンには分かっていた。だが待つ気は、さらさらない。

（俺は俺だ。俺は……ひとりで充分だ）

深夜の高速道路のなかで、カーラジオのＤＪはリスナーからのハガキやＦＡＸに書かれた内容を、役を演じながら読み上げていった。メールなどがまだ浸透していない時代、紙を通しての内容については、以前に渦中にあった話題や芸能人、著名人、歌手などに関する『噂』を立てて、大いに盛り上がっていた。

「……らしいんですけどね。でもどうやら、他にオファーがあったそうなんですよ」

「えー、そうなんですかぁ。でも蹴っちゃってんでしょお」

「やっぱり稼ぎどきに稼いでおかないとね。ＣＭなり何なり」

「聞いた所によると、……」

信憑性は皆無だった。あくまでも『噂』だという意識が薄れて、時には論議を展開している。

本当に意味はあるのか、面白おかしく。

楽しければいいのだろう。今夜という現在に、乾杯する。

（素敵な夜なことで……これは、まるで）

高速を走る車はスピードを緩めることはなく、真っ直ぐに突き抜けていた。カーブに差しかかると、減速をし始め。窓に映った難しい表情のレンは、心の内で言いながら……笑った。

（さながら、パーティーだ）

見せかけの上っ面。社会。

社会が、『パーティー』。

そうして、レンの次の曲の構想が――決まっていった。

29話（波乱）

レン、シーク、ジュン、セイ。４人が揃い、バンドの名前はジュンの希望通り、『ＳＡＫＵＲＡ』に決定した。だがレンが反発したことで、桜、サクラ――を、英語表記にすることにしたのだった。それには、レンが気がつくか、つかないかというさりげない工夫――だったといえる。

レンの気分はひとまず４人は活動を開始した。まずはライブに向けて、それに向けての曲づくりが始まっていった。目玉となるシングル曲を発表、発売、それを先行にした後は、アルバムの発売開始。合わせてライブの実施へと……予定は立てられ、メンバーたちは難色なく筋道通りに動いていっていた。

彼らは忙しい、宣伝の方にも手を伸ばしていた、いや、伸ばざるをえない。

名を知ってもらわなければ。売れなければ、次が無いのだから。

『仕方なく』……彼らには迷惑でしかない質問にも、何か答えを出すしかなかった。

「今回のこの曲には、どういった想いを？」

とあるバラエティ番組の司会者が、収録中に悪びれた様子もなく明るくレンの方を向いて話しかけてきていた。数分間のインタビュータイムがあり、これが終わって新曲を披露してからレンたちメンバーはやっと解放されることとなっている。それまでの辛抱だとメンバーは心中、特にレンは酷く、自分に言い聞かせるしかなかった。

「……」

レンは無言のまま、数十秒が過ぎていた。答えが見つからないで

いた。すると横からジュンがフォローに回ってくる。「秘密ですよ。ヒ・ミ・ツ」レンの肩に手を置き、笑顔の零れた陽気な顔がお茶の間に流れていった。司会者は口を尖らせていて、スタジオ内に僅かな笑いの声が発生していた。

（聴けば分かる……分かる奴にだけだ）

そう穏やかでは決してないレンの胸中を察してくれているのはメンバーだけで、彼の目に映るもの、スタッフや観客、スタジオ内の人間全てが敵にも化けられた。何故自分は此処にいつまでもいるのだろうと、嫌で嫌で堪らなく、次第に喉の奥が熱くなり気持ちが悪く、酔ってきていた。

すると歌の準備が整い、メンバーはあちらへどうぞと司会者に言われたので移動していった。ホッと安堵の息が、聞こえずともメンバー全員の胸の内にある。じっと静かに、大人しく、辛抱を繰り返していたレンは束縛から解けて……一にも二にも走り出してしまいたかった。

不満や恐れは歌うことで誤魔化す。覚悟したレンは一瞬でそう決めた、なので、それでは、実行するとしよう。小さな決心だった。

レンは伴奏が始まると目を開けて、『自分の世界』を表現していった。誰にも踏み込めない、神聖な地へとの旅立ちを……小旅行を。だが残念なのは、歌う歌詞の内容だった。何処が神聖なのか、社会がパーティーだと……皮肉を込めたメッセージが、歌われる。

Ｅｖｅｒｙｏｎｅ　ｉｓ　ｃｈｅａｔｅｄ
だまされている
Ｅｖｅｒｙｏｎｅ　ｉｓ　ｐｌｅａｓｅｄ　ｔｏ　ｂｅ　ｃｈｅａｔｅｄ

だまされて喜んでいる
Ｔｈｅ ｌｉｆｅ ｉｓ ｔｈｅ ｄｅｃｏｒａｔｅｄ ｏｎｅ ａｎｄ ａ ｐａｒｔｙ
人生は お飾りなんだ パーティーなんだ

（共感できなければしなくていい。俺は俺だ、変わらない。変わりたくはない。共感だと？　立場が違うのに？　……可笑しいだろう？　それは）

レンはいつも何かを考えていた。頭をよく使っている、だから疲れてしまうのだ。例えばこうだ。

（人は、どうして服を着る。アダムとイブが、唆されたからか。神の怒りを買ったからなのか。人は、どうして周りに合わせようとする。依存したいのか。生き抜くためには。……人は、独りでは生きていけないのか。単独行動では、限界がくるのか。限界にくる前に、気がついてしまったのか――負け犬め！）

考えに考えていった後には、必ずといっていいほど感情が彼を導いていた。

（俺はそれを許さない。限界、そこまで行ってやる。俺の音楽とは、何処までなんだ？　突き止めてやる……

――どんな犠牲を払ってでも）

……

レンの周囲は慌ただしかった。レンは沈黙し、事の成り行きを見守るようでいて、怯えていた。どんな時でも自分であれ。沈黙していなければ、崩れてしまうだろう、レンのいる世界では。
周りの見えないレンのことをこの時に一番に理解していてくれていたのは、メンバーだった。頑ななレンに、セイやジュンは練習中などによく声をかけていた。

「今度、松上通りのクレープ食べに行こうよ！」
練習が終わり打ち合わせの合間でジュンは突然に思いついて言い出したようだった。「クレープ。久しぶりだな」黄緑色のバンダナを巻いていたセイが、ふうと息を吐きかけ何かを紙に書いていた手を休めながら答えていた。
「昨日から半額だって聞いた。イチゴ食べたいなぁ」
イスの背もたれに頬杖をつきながら目を輝かせていた。後ろでは寡黙に半袖のシークが自前のギターの弦をいじっていた。
「レンは甘いものイケる？　コーヒー、無糖ばっか飲んでるしさ。苦手とか」
ジュンがレンに話を振ると、楽譜を広げていたレンは顔を上げてジュンに関心の方向を変えていた。
「別にイケるけど」
飾り気のない答えでも、ジュンには満足だったようで嬉しそうに飛び跳ねていた。「そう良かった！　じゃあこの後に皆で行こう！」
反論もなく、ジュンの提案は通されることとなった。

……

トゥルルル……

メンバーが打ち合わせを終えて帰った後のことである。紙の上を筆記具が滑る音、パソコンのキーを叩く音、小さく会話している声など、オフィス内の一室で重なる生活音のなか、1本の電話が目立ち鳴り響いていた。「はい。『M．A．D．E．』ジャパン、企画課でございます」

受付の女性は、事務的な挨拶をした。そこまでは良かったのだが、通されて、電話は課長にと回された。課長、彼は、顔色を変えて折り返しの連絡を約束した後に電話を切ってすぐさま、企画室を飛び出していた――

「あれ課長、いかがなさいました。そんなに慌てて……」

スーツの上着は脱いでいて涼しげに、カッターシャツにネクタイの彼だったが、じっとりと背中には汗が染み込んでいた、さらに額にも沸々と浮いていた。それどころではない彼に声をかけたのは、下で働く社員だったが、比べてのんきそうに紙コップでコーヒーを飲んでいた。

自販機の前に屯在しているのは2人だけで、休憩所の灯りは暗くなりかけていた。

「いや、ちょっと……社長に用が」

握っていた紙コップを握り潰してしまいそうなほど、ぎょっとした反応を若い社員は見せていた。「社長!?」声が弾んでしまっていた。

「一体何があったんです。ただごとじゃ、なさそうですけど……」

落ち着きを一瞬で取り戻した社員は、課長の彼に顔を曇らせて言った。事態を重くみた社員は彼の言葉を慎重に待っている。「それがだな……」混乱しているのか、頭を突(つっ)いても上手く舌が回りそうでもなかった、お茶を濁すようには、どうにもいかないらしかった。

「ウチの売り出し中のメンバーが、週刊誌で訴えられたらしい」「は？」

「曲を聴いたファンが、その影響でビルから……飛び降りた、と……」

日は、落ちかけていた。

……

ファンが自殺した――

事務所に連絡が入った日、本日発売のバラエティ週刊誌『スポットライト』は集中してバンド『ＳＡＫＵＲＡ』を攻撃していた。

概要は、以下となる。

『ロックバンドＳＡＫＵＲＡのヴォーカリスト、素顔を隠したＲＥＮの歌は、死を招く！？　厳重警戒、発令中！！　（１９９×年×月×日）

現在人気御礼中のロックバンドヴォーカリスト、ＲＥＮ（年齢不明）の大ファンだったという女性、仲本律絵さん（２６歳／仮名）が、前々日である×月×日に、自宅マンションから２ｋｍ離れたビルから転落死していたことが、昨日未明分かった。

関係者の話によると、律絵さんは非常に勤務態度も真面目で、死の１週間前までは少なくとも特別に変わったこともなく、普段と変わらずに過ごしていたという。

記者独自の調査により、律絵さんの友人のインタビューによると、死の３日前から時折、暗い表情を見せることがあり、理由を聞くと律絵さんは「周りが怖い」等と漏らしていたらしく、精神的苦痛を訴えていたとみられる。

律絵さんはＳＡＫＵＲＡに非常に熱中しており、よくメンバーの話をしていた。
記者は、ＳＡＫＵＲＡの新曲である【Ｅａｓｙ　Ｃｏｍｅ……】に、律絵さんが強く影響を受け、何らかの引き金が死へと行動させたのではないか、として厳しく原因をみている（以下略）』

そんな内容だった。事細かに、詳細は続いていた。
記事は、会社やバンドに対して真っ向から戦う姿勢らしく、挑戦的で大胆な書き方だった。

血相を変えた人物がまたひとり、理香である。デスクを乱暴に叩きながら起立した。
「すぐにメンバーに連絡して！　今から1歩も外に出ないでと！」
それを聞いた社員は社室を飛び出そうとしたが、理香は何かに気がついて、その社員に待ったをかけた。「ストップ、――待って！」何度も止めにかけ、理香の動きさえ止まってしまった。「！？」
従順な社員は理香を見つめながら不安そうに表情を浮かべたが、理香も胸中では困惑し不安だった。
「待って……レンには……」
曇る顔、寄せる眉の皺。警鐘が、低くも派手に打ち鳴らされていく。
「レンには……連絡は、いいわ。他の彼らだけに連絡して。それで……」
指示は力もとなく、理香は親指の爪を噛みながら苦渋の判断を出していた。

「レンには絶対に気づかれないようにと、……伝えて」

理香の特別の計らい、それは。
レンと外界とを、遮断するためのものだった。

30話（追憶）

知らなくていいことがあった。
知りたくもないことがあった。
知ってからでは、もう遅い。

過ぎた時は、戻らない、……戻れない。

……

理香からの指示がメンバーに届いたのは、打ち合わせの帰りだった。ちょうど、レンを含めメンバーの4人は、松上通りにあるクレープ屋で注文をし、待っていた時だった。
店の前はオープンカフェで、白いパラソルや円形テーブル、装飾をこしらえたイスが並んでいた。日は落ちかけて、ここで注文したクレープを食べながら休んだ後は各自、本日は解散するつもりでいた。
セイの携帯電話が鳴った。ジュンとレンはレジカウンターへ、シークは立ち止まったセイを見ながら、後を追っていた……

セイは電話に出ると顔を曇らせていく。
相手は理香本人ではなく、理香の指示を受けた社員からの――
緊急連絡だった。

「外出禁止って……レンには詳細を隠せって。何でそんな回りくどいことを。できません！」
セイは、つい大声を出してしまっていた。幸い、セイは他の3人

とは距離が空いていた。今の内容を聞かれることはなく、セイは傍にあった1本の街路樹の陰に寄り、声のトーンを下げていった。社員は必死で説明をしていた。

『事態が鎮まるまでの間、君たちに家で……いや、会社に来てもらってもいい。その方がいいかもしれない。マスコミが君たちの誰の所に現れるのか、わからない。レンにもし接触したら……アウトだ。レンには、外部からのしょうもない喧騒に巻き込みさせたくはないとのお達しだ』

社員の慌てて重い口ぶりに、セイは舌打ちするしかなかった。理香や社員だけではない、セイたちメンバーも、思う所は一緒だった、作品づくりをするレンの邪魔はしたくないと――都合の悪いことは隠せるなら隠しておきたいのだと。だがしかし、だった。

「レンを守りたい気持ちには同意します。でも、……難しい、無茶だ」

セイは苦痛だった。隠し通せることができるのか？　先など疑問だった。

そこを何とか……と、社員の粘りについに折れてセイは、「……分かりました」と諦めて電話を静かに切ると、暫く体が動くことができなかった。心地よい風が吹いても、今のセイに癒しを与える効果は期待できそうもない。

「何があった。話せよ」

横から、ただごとではないと察したシークが呼びかけていた。「……って」「え？」小さく、セイは悩みながら声を漏らしていた。

「隠すったって、どうやって……」セイは歯を食いしばり、空を見上げている。

説明を聞いたシークは、いつもの不機嫌そうな顔をさらに一層曇らせていた。

「冗談じゃねえな」

チ、と舌打ちをした後は、片足で土を何度も踏んでいた。ポケットから煙草を取り出して、空いた片方の手で胸元を探りながらライターを探していた。「で？　俺ら、どうすんの」火をつけると、吐いた息の向こうでシークがセイに尋ねていた。
「仕方ないだろう……ひとまず、このまま会社へ逆戻りだ。いや、会社もどうだろう。俺らの自宅も、記者に見張られてないとも限らない。ならいっそ、このまま逃亡しようか……そうだ、俺の叔父のとこ、皆で一緒に来ないか。土産屋をやっているんだけどさ」
シークはチラッとセイを横目で見ると、「土産屋？」と聞き返していた。
「田舎の方で……ああ、観光地なんだけど、饅頭とか売ってるよ」
そう言うとセイは、すぐに電話で何処かへと連絡を取り出していた。

慌しくなったのは、三富龍平、『M．A．D．E．』の社長でもある彼の心中でもだった。
「分かった……じゃあ、少しの間だけそうしてくれ。向こうさんに後で謝礼を持って伺うことを、理香に伝えておいてくれ。追って連絡する」
社長室で電話を置いた後、龍平は、ふう、と息を吐き椅子にどっかりと腰を落ち着かせていた。照明が薄暗く、場にいるのは龍平と秘書だけである。
「訴訟ですか」
「当然。酷いもんだが読んでみたか？　……出版差し止め要求だけじゃ済まさない。フン、ここの出版社は、前にも同じように名誉毀損で訴えられて賠償命令が下されたことがあってだな。懲りない連中だが、一応、売られた喧嘩は買ってやる。それより、バンドの方が気になる。今、社員から報告を受けたばかりだが……」
龍平は頭を抱えていた。龍平が聞いたのは、レンを含めてメンバ

ー４人が、遠隔地にて緊急的に『避難』『待機』していること。そして、レンには事を一切隠し通すこと。気位の高く、普段から特別扱いを受けているレンに対し、今回もまた、特別な『待遇』を迫られていたのだった。

秘書である女性は、まだ秘書になってそう年月も経ってはいないのだが、龍平を見て頷いていた。

「訴えも想定範囲内なんでしょうね。一体何の目的があって報道倫理に反した記事の掲載に至ったんでしょうか、さっぱり理解できませんけど。私は、自殺報道と聞いて８０年代の某アイドルを思い出しましたわ」

「ああ、あれ……」

「私もマスコミは嫌いです。友人に芸能人がいまして、よく悩みを打ち明けられるんです」

女性の目の奥には光があった。よほどゴシップに対し、恨み所があるらしかった。おかげで龍平は徐々に冷静さを取り戻しつつあり、手続きの確認を急いで秘書に取らせていた。

「話は早そうだな。君に任せるが、逐一の報告は欠かせるな。レンは……俺にとってのレンは」

用件をまとめて、秘書に最後、龍平は言い纏めていた。

「家族なんだ」

……かつて聴き惚れた、レンの幼い歌声がする。

それはもう戻れない過去の記憶となって、龍平の耳には『記憶』された音楽が奏でられていた……

あの即興の歌を。

録音（レコード）ではない、生の声を。

あの記憶を。

護りたい……

・・・

「旅行？」

クレープをひと口、飲み込んでレンは向かいにいたセイに聞き返していた。

「うん。来月、連休あるけどさ。それまでに向けて強化合宿でもないけど、場所を変えて曲づくりはどうだって社長からの提案らしいよ。ここじゃなくてもっと田舎。空気も澄んでるし人も少ないし、何しろ、のんびりできそうだ」

バターシュガーのクレープを注文したセイもひと口ふた口と皮をかじりながら、にこにことして見せて笑っていた。オープンカフェから歩くこと約3分、駅の前のバスターミナルを通り抜け、地下鉄へと続く階段の脇にメンバーは固まりクレープの味をそれぞれに堪能していた。セイはバターの固形がそのまま焼きたての皮に包まれて溶けていくバターシュガーのクレープを、甘い物には限りなく服従してしまうジュンは、味も人気もボリュームも買った店ではピカイチなバナナチョコカスタードを、手に持っている。

夕方には僅かに時間があったが、人の通りもそこそこに、皆、メンバーの横を素通りし先を急いでいる。何処かで車のクラクション、自転車のブレーキ音、立ててあるノボリがビルの隙間風に当てられバタバタとたつ音が、不規則に響く。

ブルーベリーとチーズの兼ね合いが絶妙で見事な香りのよいクレープを大口で一気に食べていたシークが、チラと隣のレンに横目で様子を見ていた。

「急な話。……何考えてんだかあの大人」

食べる手を止めず、レンは呆れたように呟いていた。何処かホッとしたセイの気配を察する様子もなく、話を進めていった。

「次の戦略かもね。大丈夫、半分、休みも兼ねての旅行だと思えばいいさ。暫く忙しかったじゃないか？　その分、ゆっくり休んどこうぜ」

安心を覚えたセイはまた笑いながら、クレープにかぶりつく。

「いいね！　寺とか神社とかお参りしてみたい」

いきなり脱線しそうなことを言い出したのはジュンで、残りわずかだったカスタードを幸せそうに頬張って喜んでいた。「寺っておま」セイが苦笑いで否定した。

「断らないわけだ」

「……別に」

黙々と答えたレンに対し、シークはクレープの最後のひと口を口に放り込んでいた。

気まぐれのレンが旅行を断らなかった理由、それは田舎と聞いて、昔の情景を思い浮かべただけに過ぎない。

歌うことに姿勢を傾けるレンにとっては、特に何も気にしなかったのだろう、世間の動きも反応も情勢も、『外』の世界とは隔離する。綺麗で、純粋で汚れの無い、閉ざされた安らぎの無音世界。レンだけの囲まれた聖域。

守られている世界。

守らなければならない世界。

彼だけの。

……

食べ終わった後、携帯電話を片手にセイが言った。
「後で、迎えに行くからレン。用意して待ってて」
「は？」
「すぐに発つ」
レンは言葉なく唖然としてセイの顔を見ていた。「急だったろ。もう手配してあるからさ。まあ、行くと決めてくれたなら用意してサッサと行こう」
セイの強引だが明るい表情には、曇りはない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2257e/

イージー・カム

2011年4月6日17時05分発行